
R a b b i t ぱにっく

維月十夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

「」のPDFファイルは、「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Rabbitせばにづく

【NZコード】

N2469A

【作者名】

維月十夜

【あらすじ】

市内の幼稚園で、『』く平凡に保母として働く高島さくら。だが、彼女の平凡だった日常は突然な出逢いによって、覆されてしまう。人の言葉を話す黒ウサギ・朔との出逢い。そしてさくらの過去。『森の民』という人語を解し、人獣両方の姿を持つ種族の青年と暮らしていた事があったさくらは、朔もその『森の民』であることを知り、彼に懐かしさを覚える。やがて、懐かしさは恋心へ。しかし、兎族・『森の民』は過去の因縁が忘れられずに、未だに人間を恨んでいて。惹かれ合つさくらと朔。過去と現在。そして、彼女にきつ

く絡みつく前世の記憶。狭間で、やがては運命の決断を迫られるー。

プロローグ

「は……今日もしんどかつたあ、ガキンちょの元気な」と。お母さん達も、あたし達のそれ以上に大変なんだろうなー」

「そうですよねー？ 子供って、ワガママは言つし、急に泣き出すわで大変ですけど、そう考えるとお母さんって、パワーがあるって言うか、スゴイですよねえ」

夕暮れの河川敷沿いの道を行く、女二人組。

見かけ、仕事上の先輩と後輩と言つた感じである。

歩いていく一人の影が、不格好な案山子のように、地面に伸びあがつている。

「あ 、やつと明日休みだあ」

先輩の方が、ひどく情けない声で呟いた。

「明日つて、確かに……となり街の公園まで遠足でしたよね？ いいなー、先輩」

「あはは、頑張れー……まだ若いんだし」

「先輩だつて、若いじゃないですかあー」

にこにこと笑う先輩を、後輩が膨れ面でどつきに掛かる。

「じゃ、ここらでね？ お疲れさまあ」

後ろ向きのまま手を振つて、後輩とY字路で分かれる。

「お疲れさまでしたー」

遠くに後輩の声を聞きながら、彼女はほうと溜息をついた。

Y字路で別れた二人。それは、あたかもこれからの一人の行く道を、示しているかのようだった。

彼女は、後輩と別れると、バスを終点で下車し、閑静な田舎道を歩いていった。

私、高島さくら、23才。（いや、年は余計だったか）市内にある、幼稚園の保母をしています。

ちなみに、居間は実習生を育成中。これがまた、ダメっ子で……。とりあえず、毎日が大変で、めまぐるしくて……だけど、どこかで退屈してる。

『なんか、普通でないことが起こればいいな』
なんて、軽々しく考えたのがいけなかつたのかも知れない。
その後に起こることが、私の人生を大きく左右することになるなんて、私は夢にも思つていなかつた。

旅ウサギ・朔（前書き）

市内の幼稚園で、保母として「ぐく平凡に働く高島さくら（23）」は、仕事帰り、自宅の玄関先でとんでもない拾い物をする。その拾い物は、どんどんさくらの人生を変えていく……？人と、妖の恋を描くラブ・ファンタジー

旅ウサギ・朔

さくらは、玄関先に丸まっている黒い物体に一步、いや、数歩後じさつた。

なんだろ？、死骸だろ？か？ パカパカと、切れかけの電灯が照らし出すそれは、そのまま動かない。動かないのなら、そななんだろう。でも、進まなければ中には入れない。

「死骸！？」ちょっとちょっとお、勝手に、人間家の玄関先で死なないでよね……もう」

触つてみて、もしさプラッターだつたらどうしよう……。

オロオロと、処理に困つて散々迷つたあげく、おつかなびっくり、それに触つると手を伸ばした瞬間、その物体がゆっくりと起きあがつた。

「わあ、よかつたあ～……生きてたのね、にゃんこちやん」「さくらは、途中で言葉を途切つた。

そつと抱きあげたそれは……それは幾分か、猫よりも耳が長かつた。

「つて、なに、ちつこいウサギ？ 縫いぐるみみたい」

こんな都会に、ウサギ？

ここに住人、誰かのペットが逃げたのか？

いやいや、ここはペット禁止のマンションである。

「どうしよう、これ」

さくらは、仕事で疲れていたし、細かいことを考える余裕がなかつた、面倒くさかったのである。

だから、そのウサギが人間の言葉を話しても、まったく驚かなかつた。

「スマン、ちょっと離してくれるか？ 窮屈でな」

「うん」

「ふう、夜分に申し訳ない、脅かすつもりはなかつたんだ、でも…

…おいら、ひもじくて動けなくなつちまつた

すらすらと、人語を話し出した黒い物体 基いウサギは、ちょ

こんと後足で立つと、なんとも可愛らしく説明始めた。

「玩具かしら、フアスナーは、つと」

さくらは思案顔で、むにっ、と子ウサギの背中をつまみ上げる。

「あわわ、おいら本物だつてばよう、降ろしてくれ~」

情けない声で訴えられ、さくらは、じたばたと暴れる子ウサギを降ろしてやつた。

つままれたウサギは「ひどいなあ」とこぼしつつ、せつせつと毛繕いをする。

「うー、めんね？ やつぱり…ちよつとびっくりしちゃつて」

さくらは、バツの悪そうに毛繕いをする子ウサギを撫でつけた。

「いいよ、慣れてるからさ。それにしても、入つておいら達より恐がりなんだなあ」

子ウサギは、ふこふこと小さな鼻を動かしてウインクした。

「動物は話さないでしょ？ インコとかなら分かるけど」

「動物だつて話すさ？ ただ、今の人間は聞こえないのが多いからね。おいら達も喋らないようこしてゐ。つて、父ちゃんの受け売りだけどな」

人間のよつて、ヒツヒツと笑つた子ウサギに、さくらはそつと触れた。

「ほんに小さこのに、一人で偉いね。ビラしてこんな所にいたの？ 家族は？」

「いや、おいら一人だよ。気づいたときには、あちこち旅してたなあ」

照れくしゃみに、笑いながらひつ子ウサギを抱つこすると、さくらはピーピーピと動く鼻面を撫でた。

「ねえ、よかつたら、ウチくる？」

こんな、小さな生き物に共感するなんて……昔ならそう思つたけど、今はなんとなく、この不思議な「めぐり合わせ」に感謝したい。

「いいのか？ 姉ちゃん、いいヤツー」

手放しに喜ぶ子ウサギが可愛くて、さくらは微笑む。

「あたしはね、さくら。名前、聞いてなかつたねえ」

「おいら朔さくつて言つんだ、似てるな？ なんだか」

「だねえ、待つてね、今開けたげるから」

さくらは、朔を抱っこしながら片手で鍵を開けた。

「ここにいてね」

さくらは、朔をソファに乗つけると、いそいそとキッチンに入り、鍋を火にかけた。

「あー、もう8時過ぎてるよ……なんか冷蔵庫に入つてたつけ？」
ばふつ、と勢いよく冷凍庫を開けるさくら、しかし勢いがありすぎて冷凍食品が雪崩になる。

「きや、きやあー！？」

ガラガラと、冷凍食品が転がる音。

「慌てんばだなー、さくら」

それを尻目に、ぽつり呟く朔。

しかし……誰も聞いちゃいない。

初夏のある夜、高島家に不思議な同居人（？）が増えたのだった。

旅ウサギ・朔（後書き）

こんにちわ、維月です。

1話と2話…ちゃんと繋がってるかなあ？

心配。

始まつたばかりですが、どうぞよろしくです。

朔の小冒険（前書き）

市内の幼稚園で、『よく普通に働く高島さくらは、ある日、仕事帰りにとんでもない拾い物をしてしまう。

その拾い物は、人語を話す、不思議なウサギ・朔さくだった。

朔と暮らし始めたさくら、彼女の凍っていた心を、朔が溶かしていく。

さくらは、4年前になくなってしまった琥珀が忘れられずに涙するが……？

人と妖・異種族間の恋を描くラブ・ファンタジー

朔の小冒険

子ウサギ・朔と暮らし始めて、早3ヶ月が過ぎ……。

朔が、子ウサギじゃなくなつた。

……ような気がする。

一回り大きくなつたように見えるのは、果たして、あたしの気のせいだらうか？

「さくら、メシくれつ、メシつ」

暮らしにすっかり慣れた朔が、犬のようにエサ皿を銜えて走り回る。

久々の休日の朝を、思いきり引っかき回すのが「ヨイツ、朔だ。

朝っぱらから、元気いっぱいに、あたしの上で飛び跳ねてくれた。まるで、子供ができたみたいだと思い始めた、今日この頃である。

「はいはい。朔、お皿銜えたまま走らない……ケガしたら危ないでしょ？」

言われて、ぴたりと動きを止める朔。

銜えていたアルミ製の皿が落ちて、からんと固い音を立てる。

「分かつたよう、大人しくするから、早くメシ～」

ペショットと耳を下げる、後足で立つた朔が、さくらの足に両手で掴まつた。

「いい子ね、ちょっと待つて……キヤベツ切るから」

床から皿を拾つて、さくらは朔を撫でる。

「おう、大盛りでなつ」

「はいはい」

そう言つておきながら、ちつとも大人しくない朔に、さくらは楽しそうに、くすくすと笑つた。

「朔ー、最近大きくなつたよねえ？ なんでも、よく食べるもん」
がつがつと、キャベツ+ラビットフードを持った皿にがつつく朔の頭を、もしゃもしゃと撫でながらさくらが言つ。

「そおか？　あ、これ、『じちせつさんな

鼻先で皿をさくらに突き出すと、受け取った彼女の手をペロペロと舐めて、朔は『ウサギのお礼』をした。

「はい、『じちそつさま』でした。さて、あたしも朝ご飯しようかな」ぱたぱたと動き回るさくらの脇で、朔がのんびりと毛繕いをして、耳や顔を洗っている。

ひょこひょこ、と居間を跳ねていた朔は、電話台であるキャビネットの上に、一枚の写真を見つけた。

98.07.28 蘿珀と一緒に

マジックペンの消えかけた文字。朔は、なぜかとても痛々しいものを感じた。

写真に写っているのは、行儀よく前足を揃えている、灰色に近い、銀色のウサギ。

(優しい目　　きれいな人だな)

「あれ、朔ちゃん？」

さくらは、写真を見あげていてる朔を見つけ、動きを止めた。

「ああ、さくら……この人、琥珀って言うんだな。きれいな人だな

？」

朔は、そつと何度もさくらの手に顔を擦りつけて甘える。

「朔ちゃん」

さくらは、ふつと表情を和らげた、慰めようとしてくれていてる彼が、あんまりにも一生懸命だから。

「おいで、朔ちゃん」

「…………さくら」

朔を抱っこすると、さくらはソファに腰掛ける。片手には、琥珀の写真を持つて。

「琥珀はね、4年前までウチにいた人なんだよー、きれいでしょう？」
えへへー、とさくら。

「さくら、泣きそうだ」

朔が、小さな手でさくらの頬を撫でながら言った。

「えー？ あたし、全然平気だよ？ 心配性ね」

「嘘つくなーい、さくらの田、悲しい田してる」

ペロペロ、と優しく頬を嘗めた朔に、さくらは、大きく田を見開いた。

開けっ放しの窓から、サワサワと風が入り、カーテンを揺らす。あまりの静けさに、かすかに遠く、カタンカタンと、電車の音までもが聞こえたような気がする。

始めに、口を開いたのはさくらだった。

「朔ちゃん、あたしね？ 今でも琥珀が好きだよ、でも、朔ちゃん」と比べてる訳じゃないんだあ？」

「さくら、おいらは……」

段々と涙声になつていき、遂に声が切れ切れになる。

「琥珀の……代わりとかじや、ないからね？」

「うん……おいら、ちゃんと分かつてるとみるよ」

ぽろぽろと頬を滑る涙を舐めながら、朔はきつと、さくらに身を寄せた。

「いい子。朔ちゃんが、今のあたしこはすつしく大事ー」

「おいらもー」

朔は、動物同士がよくするように、さくらの頬と、自分の頬を擦り合わせながら言う。

「おこら、どこにも行かない。さくらとこる」

「朔ちゃん……ありがとつ」

さくらは、朔を床に降ろすと、照れくさそうに笑つた。

「着替えたら、お散歩行こうか、朔ちゃん」

「ホントかつ、散歩だ散歩ー！」

ダーツと、すばしこく走り回る朔に振り向いて、さくらは微笑みかける。そして、そのまま階段を昇つていった。

さくらが一階に行って、少し退屈していた朔は、戯れにプランターのベンジャミンゴムの葉を齧っていた。

わくわくに見つかってはいたが、この葉はまあまあ美味しいので、もう一枚千切つておく。

ちぎった葉は、テレビ台の後ろにでも隠しておけば見つからないだるひ。

「朔ちゃん、用意できたよ……つて

さくらの動きが、ぴたりと止まる。

足元に散らばる、プランターの葉っぱを見たからだ。

同じく朔も、一時停止。

「おこで、朔ちゃん。こま口もぐもぐしたよねー？」

「おこり、ねやんと待つてたよ？」

慌てて後ずさるが遅く、哀れ……わくらじつかりと捕まえられる。耳が丶字の、『バレちゃった！？』サインを出していく。

こうじう時の朔は、怪しげなのだ。

「ダメでしょ、またベンジャミンちぎって……せせせテレビの裏

にも隠してあるんでしょ、出しなさい」

ベンジャミンの葉、押収。バレバレである。

「だつて、わくらが遅かったんだい」

足首に、ぎゅーっとしがみつく朔を抱っこし、わくらは穏やかに微笑んだ。

「じめんね、朔ちゃん。そつか、ちよつと遅かったね、拗ねないの」

「散歩いこ、散歩～」

「うん、朔ちゃんのおやつ持つてこつか」

わくらは、朔を抱っこしたまま、冷蔵庫から果物入りのタッパーを出して、小脇に抱えた。

タッパーの中身は、赤くて艶々とした苺が詰まっている。

「ねー朔ちゃん、今日は遠出して、堤防の向いまで行つてみようか？」

「さくら、今日は太つ腹へ」

「今日は、は余計だぞー？ じゅー」

わくわくは、お仕置きとばかりに、朔の鼻をつまんだ。（潰したとも言つ）

「んふう」

にっこりと笑うさくらに、朔も幸せそうに笑う。

「さて、散歩に出発う」

「おう！」

バタン！ と勢いよく玄関のドアが閉まり、きやあきやあと、一人の楽しげな声が遠ざかっていった。

日だまりになっている居間のテーブルの上には、置き去りにされたままの一枚の写真があった。

無邪気に笑う、遠い日のさくらと琥珀。もういいんだよ、忘れなさい、とでも言つかかるように、せつと網口から入った風が写真を吹きつけ、床に伏せてしまった。

朔の小冒険（後書き）

今晚話、維月十夜です、ああ、書いていて恥ずかしいことが何点か。
あつう、朔を動かすのが難しい……（汗）

ねめた……。（前書き）

朔を連れて散歩に行つたやうに。
ひなたぼっこをしていた朔が、日に当たりすぎて茹だつてしまつた！
かいがいしくも、朔を冷やさうと世話をするとおまけに朔は、おかしな事を言つだして……？

おめか……。

朔は、毛の色が真っ黒なので、どうにかてもすぐに分かる。

「朔～、朔ちゃん、探すことないか、すぐいたいた」

やくらは、遊び疲れたのか口だまりで、ひなたぼっこをしている朔を見つけた。

「もー、こんなとこで寝ちゃって。あれ？」

と、やくらは異変に気づく。

「心なしか、汗ばんでるような……？」

「ひー、ひー、ひー……」

「朔！？ アンタ、何やつてんのよつ、こんなに熱もつてー..」

やくらは、慌てて朔を日光から庇つ。

そうなのだ、黒いものは、熱を含みやすいのだ！

「あーつーい 、田えまわる～～」

「朔ちゃんのおバカつ！ 川にでも浸つてなさーつ」

やくらは、そつと朔を緩やかな水流に漬け、手のひらで水を掬つては、耳を避けてかけてやつた。

「やべりー、じめんよう

やや斷くして、川の水に冷やされてしまつかり元に戻つた朔が、申し訳なさそうに言いだした。

「もう、勝手にになくなつたりしたら、やーよ~」

「ああ。じつちは小回りが利いていいけど、あつむだと……やくらが怒るな、多分」

やくらは、なんのじつちや、と首を傾げる。

「おーい、朔ちゃん？ 上せちやつた？ なんの話か分かんないよ

「つー、なあべりー……じつちのせいじうと、男前なおいら、じつちがいい？」

「朔ちゃん、朔ちゃんでしょー？ へんなこと言わないの、帰る

よ

「うー

ずぶ濡れ朔を抱っこして、急ぎ足で道をつゝかれていく。

「さくら、温けえ

目を細めて呟いた朔は、そっとさくらの喉元に顔をすり寄せた。が、特に聞いていないようである。

「急がないと、ドラマ始まっちゃうじゃない

その後は、朔がむくれて、フォローが大変だったようだ。

おまか……。（後書き）

いつも、維月です。

ここまで読んでくださる読者様に感謝です。

朔が言っていた『男前なおいら』

後に分かれますので、ひつじ期待。（なにをだ～）（汗）

おかしな夢（前書き）

市内の幼稚園で、『よく普通に働いている高島さん』は、帰宅途中に、自宅の玄関先で不思議な拾いものをしてしまつ。

人語を話す、不思議なウサギ・朔は『森の民』といつ、人間よりも古くからいる種族の生き残りで、琥珀とも同族であることが分かる。不思議な生活を送る高島家は、今日も騒動の渦中！

おかしな夢

(あれ、ここ どこだっけ?)

耳元を、ヒュウヒュウと鋭く風が掠めていく。
さくらは、見わたす限りの草原に立っていた。

草原 いや、枯れ薄すすきの穂が、僅かな風に揺れるだけの中に、佇んでいるのだ。

(他に、なにも見つからない……ここには、あたし一人だけなんだ
(わ)

ヒ・ト・リ・ボ・ツ・チ

【お前は、独りだ】

さくらは、度々囁くその声を知っていた。

孤独に潰つぶえて押し込められた、もう一人の自分。

(一人になって、もうどれくらいになるかしら? 一人なんか寂しくないのに、どうして不安なの?)

さくらの脳裏に、一瞬、園児達の笑顔がよぎる。

園の終わり頃に迎えに来る、親に向けられる子供たちの眩しいほど
の笑顔。

どうせ、あたしは一人。

どうして、あたしは一人なんだろう。

(一人は、イヤだ)

つうと一筋、さくらの頬を涙が伝い落ちる。

蹲うずくまつて、座り込んださくらは、声を殺して泣いた。

もう、いやだ。

一人にしないで……。

誰か、あたしを見つけて!

(泣いているの?)

蹲つていたさくらは、肩に温もりを感じて顔を上げる。

(ずっと、ここに一人かと思って)

中音の柔らかな声に、大きな浅黒い手。顔を見よつとしたが、なぜかモヤに被われたように、はつきりしなかつた。

(「じにいぢやいけない、おいで）

彼の大きな手が、さくらを強く引き寄せた。

(「じにいぢて、どこ？　あたし、よく分からなくて）

さくらは、枯れ野ばかりが広がる景色を、きよひきよると眺まわしながら言つた。

(ここには彼の岸と此の岸の狭間さ、まったく、フリフリ行くから追いかけてみたら、こんな場所にいるんだもんなあ……さくらはよっぽど寂しかったんだな)

顔が分からぬのに、彼が『笑つて』いる。と分かるのはビツしてだらう。

それに、教えてもいゝ自分の名前まで知つていてるのだ。

(あなた、あたしを知つてゐるの？）

さくらは、怯えに身を固くしながら問つた。

(知つてゐるさあ、じつちの形はまだ知らないんだもんな、仕方ないよな)

彼は、なぜか楽しそうに言つた。

(ね、ねえつ、じつちとか、知らないとか、よく話が見えないんだけど)

(ま、そだらうな。じきに夜が明けるし、そしたら分かるぞ)

(全つ然、なに言つてるか分から……な)

突然、そこでさくらの意識は途切れた。

いや、それはむしろ『田覚めた』といつ方が正しいようだ。

「寝苦しい」と思つたら、やつぱりコマイツか
かけ布団を勢いよく剥ぐと、さへりて、べばつづくつにして寝て
いる朔がいた。

「さくら……もう、寂しくない、ぞ……つこやこや
寂しくない、と言えば、あれは夢だったんだろうが？」

それにもしても、妙に現実味のある夢だつた。

「そう言えば、夢の中の人もそんなこと言つてたなあ。それにしても、おかしな夢……あの人、あたしを知つてゐみたいだつたけど、憶えないしー」

さくらは眉間に皺を寄せて、うむむ、と唸つた。

「さくら、一人言怖いぞ？ どした？」

胸の上に、ちよこんと座る朔に『おはよひ』を言つて、さくらは彼をつまんで、床に降りしてやつた。

「朔ちゃん、へんなこと言つてたよ？ あたしが寂しくないとか」

「おひ、さくらが迷子になつてたから、おいらが迎えに行つてやつたんだ。あのままだつたら、どつか行きそうだつたしな」

どこか得意げに説明する朔に、さくらは思わず固まつてしまつた。自分を知つてゐると言つていた彼。そして、夢の内容を知つている朔。

「ねえ朔、まさか、あたしの夢に出てきたのって、アンタなの？」

さくらは、毛繕いをしていいか分からず、そつと朔を抱き締めた。

「さうだよ、おいらの他に誰がいるのさ」

さくらは、どう反応していいか分からず、そつと朔を抱き締めた。

「朔つて不思議……喋るし、へんな夢には出てくるし。あ、でもその時は人間だつたよねえ？ 夢つて、なんでもアリなのかなあ。もしかして、あたしの願望とか？」

「残念、さくら……おいらはフツーのウサギだよ」

さやあさやあと騒ぐさくらに、朔はゆるくと首を振つた。

「嘘おひしゃい、朔ちゃん？ 隠せなくともいいんだよ？」

「さくらっ..」

朔は、弱々しく咳いてから、さくらの胸元に顔を埋めた。

「おいら、怖いんだ……フツーじゃないって知つた人間は、みんなおいらを殺そつとする、犬に追われて、ここまで逃げて来れたのが夢みたいだ」

フルフルと小刻みに震える、小さな彼が堪らなく愛しくなつて、さくらは朔を抱える腕に力を込めた。

「大丈夫……あのね、朔ちゃん、隠さないで見せて欲しいな？ 朔ちゃんの本当の姿」

「やだ、絶対気味悪い！ それに、おいら一番醜いから」

呟いた朔の声が、次第に尻っぽみに小さくなる。

ぴょん、と勢いよくさくらから離れると、朔は思いきり足を鳴らした。

「今更なに言つてんの、喋れるんだから、それくらいで驚く訳ないじゃない。それにね、琥珀もそつだつたの……話せて、姿も変えれた。だから、ね？ あたしは怖がらないよ」

緊張して、丶字になつていた朔の耳がペしょりと下がり、朔は一つ溜息をついてから話し始めた。

「分かつた、話すよ……おいら達は、人間より古くからいる種族で、山肌に畑を耕し、獣を飼い、地味だが平和に暮らしていたんだ。『森の民』であるおいら達一族を、昔の人間は神として敬い、丁重に扱つていたが 時が進んで、人間はおいら達を狩るようになつた。それからおいら達は人知れず散り、『森の民』は流浪の民になつた」

「そんな、散るつて……朔ちゃん、『森の民』つて、みんなウサギの姿なの？ 琥珀も、なにか関係あるのかなあ」

きょとんと首を傾げるさくらを、朔の青い瞳が真っ直ぐに見た。

「『森の民』は半獣だからな、色んなヤツ^とがいたよ。熊とか、鹿とか……琥珀も多分同族だろうけど、外つ国の者だな」

「外つ国つて？」

「外国つてことだ、渡り者だつたんだな、きっと

「朔ちゃん、物知りねえ」

そう言いながら、さくらは朔を抱つこじよつとするが、朔はそれを慌てて拒んだ。

またきょとん、とするさくらである。

「あ、いや……おいらの姿、見たいんだろ？ 少し離れててくれるか？」

「うん。いいけど」

さくらは、ただ茫然と見ていた。

朔が耳慣れない言葉を呴くと同時に、まるで、水が形を変えるよう、その形が歪んでいき、その後に現れた青年が膝をつくまで。その青年は、ぶるぶると首を振ると、慣れた仕種で立ち上がった。色黒な肌に、不思議に澄む、強い意志を秘めた青い瞳は変わらず、通つた鼻筋の、整つた顔立ち。

目が覚めるほどの、美青年だ。

「そう、これよ！ 夢に出たの！」

さくらは、自分より頭一一つ分は背の高い青年・朔を指さして笑つた。

「これ、ってなあ……こつしてみたら、さくら、こんなに小さかつたんだ？」

人型になり、さくらより大きくなつた朔は、ぱふぱふとさくらの髪を撫でる。

「むひ、小さいなんて失礼な、アンタがでつかすぎなの！」
人並み、と言つても、さくらの身長は163センチ。おそらくは190はあるだろう朔からすれば、小さいと言われても仕方なかつたりする。

「お、怒つたのか！？」「めん、ごめんさくら」

ぷーっと、膨れた餅のようになつてしまつたさくらに、オロオロと戸惑う朔。

そして、なにを思ったのかおもむりに……。

がばつと、さくらを抱き締めたのだ。

「むぐ……ち、朔……放しなさい……」放してよう

当然、さくらは真っ赤に上氣しながら、朔から脱出しようとがく。

「いやだ……さくら、温かくて、いい匂いだ。おいら、さくら好きだよ」

「さくら、朔！？」

やくらの心臓は、パンクを通り越して、今にも口から飛び出しそうだ。

やくらの頬が、一気に赤みを増した。

どうしたんだろ？、本当に、どうしたんだろ？

おかしい。

相手は、あの子ウサギ・朔だつて分かっているのに。耳の奥で、鼓動がうるさい。胸が痛いのは、なぜ？

「さ、朔う……あたし、恥ずかしいよお」

やくらはどうしても、まともに朔を見ることができず、彼の胸に顔を埋めたまま、小さく言った。

「恥ずかしい、なんでだ？　だつてやくら、いつもおこらを抱っこするだろ？　同じじゃないのか？」

「ち、違うわよ…　あのね朔、今は人間で、男の人でしょ？」

「よく分からんけど、やくら……こっちのおこら、キレイなのが？」
朔は、華奢なやくらをひょいと抱きあげると、肩に留まらせる。そつと、伺い見た朔の端正な顔は、今にも泣き出しそうだった。

「あ、あの、あのね？　あたしだつて、朔ちゃんは好きよ……でも、急にだつたから、ね？」びっくりしちゃつたの」

「こっちの姿、好き？　だつたら、ずっとこっちの姿で過ごすことにする」

いや、シシコミ所が違うとつこむやくらだが、そんなヒマもなく抱き締められ、息ができない。

「離したくなこよ、よく分かんなこけど、おこら……やくらとこたいんだ」

やくら、つこに爆発+つこで沸騰。

いきなりのハプニングと、告白にやくらは、くにゃんと放心してしまった。

おかしな夢が、正夢になるなんて～！？

やくらの叫びは、声になる前に意識の底深くに沈んでいった。

おかしな夢（後書き）

いつも、じんばんは（^ ^）維持です。
朔、もう一つの姿、解禁です。

今回は、さくらとのじゃれ合いを書くのが面白かった。（笑）
こんな話ですが、読んでくださった読者様には感謝です。次回もよ
ろしくお願いしますね。

繋がる想い　　一人の絆（前書き）

「」く普通に幼稚園で保母として働き、暮らしていた高島さくらは、ある日の仕事帰りに不思議な拾いものをしてしまう。人語を話す、不思議ウサギ・朔は、次々とさくらの人生を変えていく…！？

惹かれ合う二人、遂に佳境！

人と妖、異種族の恋愛をつづる、ラブファンタジー

繋がる想い　一人の絆

「ふあ、あ」

薄暗い部屋のソファで、青年がその端正な顔を歪めた。
(天井が近い、視界が狭く見える……?)

「あ、そつか……今は人型だっけ」

やや暫くぼんやりしてから、青年・朔はバリバリと頭を搔く。

「……静かだ」

さも面白くなれずに咳いて、朔は二階への階段を昇つていった。

時計は、午前10時を少し過ぎた辺りで。

無人の居間に、チクチクと時計の音だけが、せわしなく響いている。
無音の空白。

朔は、その静寂が痛かつたのだ。

朔は、二階にあるさくらの部屋の前で、座り込んでいた。
さくらが、いない。

仕事だ。

そんなことは分かつている。

朝から夕方遅くまで、帰つてこないことが多い。

夜中まで持ち越すことだってあって、おいらとも……最近一緒にいてくれない。

大変なのが分かつているから、大切な仕事だつて、分かつてるから
おいらも敢えて言わないが、さくらのヤツ、絶対ムリし
てる。

寝てるフリして見てたけど、今朝もさくら、顔色が悪かった。

……ぶつ倒れたり、しなけりやいいけどな。

おいら、心配だよ。

一方さくらは、園の近所にある公園で、一足遅い昼食を取つてい

た。

実習生である後輩に、これから園児達に教える、折り紙を教えていたのだ。

「ちょっと熱っぽいか……カゼ、悪化しちゃったかも」
ちなみにさくら、いつもカゼをひいても早退することなく、終了時間までやり通していた。

薬を飲んでおけば大丈夫だと、さくらは自分に言い聞かせて一気に、薬である錠剤を喉の奥に流し込んだ。

自分は大丈夫、ただのカゼくらい何とかなる。

そう、高をくくっていたさくらは、後に痛い目を見るのだった。

居間のカーテンを開け、適当に食事を済ませた朔は、仕事場にいるさくらを想いながら、ぽかーんと、底の抜けたように高く晴れた、秋空を見ていた。

「さくら……平気かな」

ぽつりと呟くが、朔一人きりなので、誰も応えてはくれない。

「先輩、ここいーですか？」

さくらの向かいに、後輩の知里が、ちゃっかりと座つてから言った。

「うん、どうぞ……つつう」

さくらは、さつきよりも頭痛がひどくなつたような気がして、強く眉間に押さえる。

「先輩、大丈夫ですか？ すつごく顔白いんですけど、早退した方がよくないですか？ あたし、伝えますから」

「いいの、大丈夫……あたしは大丈夫よ。ちょっと、眠いだけだから」

さくらは、強く知里の手を握りながら言つ。

「でも、先輩つ」

「大丈……夫、よ」

行こうとした、知里を止めていた手が、力なくテーブルに落ちた。

「ちよつと先輩！？ 先輩つ、誰か、誰か救急車

っ

！」

昼時のどかな空氣を、救急車のサイレンが搔き乱していく。
さくらを車内に抱ぎ込むと、救急車は早急に公園から遠ざかつてい
った。

居間に、けたましく電話の音が響き渡る。

ソファに転がっていた朔は、危なく落下一寸前の所を、片手をついて
凌いだ。

「やべえ、電話だよ」

ぐぐりに、電話には出るなど言われている。

オロオロとしているウチに、留守録のオレンジ色のランプが点滅し
始め、せっぱ詰まった女の声が、とんでもないことを一頻り叫んで、
電話は切れた。

朔は、そろそろと再生ボタンを押す。

『あのう、さくらさんのお家の方つ、いたらすぐ病院に行つて！

先輩…さくらさんが倒れたの！』

朔は、思いきり玄関を飛び出した。

病院とかいうものが、どこにあるかなんて、自分は知らない。
けれど、幸いに朔は獣神である、さくらの気配を追うのは造作もな
かった。

朔は走った。

足を止めることもせず、ただ真つすぐに、さくらの元へ。

足裏の皮膚が擦り剥けて血が滲み、爪が欠けて剥がれたが、そんな
ものは、彼にとつてはどうでもいい、些細なことなのだ。
さくらに逢いたい、ただ、それだけ。

走るうちに、見えてきた白い建物に入ると、朔は真つすぐにさくら
の病室に直行した。

いそいそと、階段を段とばしで登り、初めから知っていたかのよう
に、病室に飛び込んだ。

「さくらり、さくら、大丈夫か！？ 倒れたって、他に、どうも苦しくないか？」

「朔ちゃん、どうして、ここに？」

飛び込むや否や、グッドに齧り付いた朔に、さくらはおっとりと、眠そうに言った。

「電話だ、電話がきたんだ。したら、さくらが倒れたって聞いて、朔の騒ぎぶりに、通りすがりの看護婦が、口元に人差し指を宛てて『静かに』とジェスチャーする。

「ごめんね、朔……心配させちゃったね」

ベッドに横座りをして、さくらは、朔に『おいで』と手招きした。寄ってきた朔の頭をそつと抱き締め、耳元で何かを小さく囁くと、一気に朔の顔が赤くなつた。

「さ、さくらあ」

ぱつ、と慌てて離れると、朔は、さくらの横にそそぐと座つた。えへへー、と笑う、満面の笑顔。

しかし、いつものような霸気がない。

「ごめんね？ ホントはごく軽い過労だから、休養すれば問題ないつて言われたんだ。帰ろうつかと思つてたら朔が来てくれる……だから少し甘えちやつた」

ぼすん、と朔の肩に頭を預け、さくらは目を閉じる。

「ありがと、朔。好きよー？ アンタのこと」

「つー」

思わず告白に、朔は死ぬほど嬉しかつたが、わざと違う話をして気持ちを押し込んだ。その顔は、やかんのように赤い。

「電話つて、おいらやつぱりキレイだ。声が近い」

「話、聞いてなかつたでしょー？ もう、朔ちゃんてば」

ふい、と背中を向けたさくらを、朔は思いきり抱き締めるとカーテンを閉めた。

「ちょっと朔ちゃん、んつ……んんつ」

病室の、純白のカーテンに影が揺れる。

朔は、ベッドにしゃりを縫いつけると、何度も何度も、しゃりの面を求めていた。

朔、遂に爆発。

ずっと我慢していたのだから、当然と言えば当然だろう。

「やつ、ん……誰かきちゃうよお

「…………あ、さくら

「…………つああ

「…………つあ

ねろり、と首筋を朔の熱い舌が這い、さくらはビクビクと震える。一頬りの愛撫の終わりに、さくらの額にキスをして、朔は柔和に微笑んだ。

「帰るうつへー」

さくらは、突如豹変した朔を、茫然と見あげた。

(朔も、男の人なんだわ……やだ、あたし)

「さくらう?

怪訝そうな朔の顔にぶつかり、さくらは一瞬鼓動が跳ね上がる。

「あ、うん……お夕飯、どうしよう、カツブ麺でもいい?」

「うー、やだ

即答する朔に、さくらは苦笑い。

「しょーがないなあ、ワガママ朔けやんは」

「帰るぞ……ほら、おぶされ

朔は少し屈むと、背中を手で叩いて、さくらを促した。

「大丈夫、ちやんと歩いていいよ」

背中を向けたまま言つたさくらに、朔は聞をおいて溜息する。

にっこりと笑つて『帰るうよ』と言つ彼女に、一瞬感じた影はなんだるうつか?

最近、よく感じるようになった 影 (それ) は、さつく朔を締めあげる。

一人の他、人影のない河川敷沿いの道のあちこちで、虫が集^{すだ}いている。

季節は、もう秋だ。

「星がきれいよ、朔ちゃん」

「ああ」

朔は、少し前を歩くやぐらの背中を、じっと見ていた。

「昔ね、じとな風に、星の綺麗な所に住んでたことがあつたんだ。今は、もう行きないけどね」

立ち止まって、ぐにぐに寂しげに言つてやぐらを、朔はきつと抱きすくめる。

「ダメよ……誰か来たら、見られやう」

そう言つたが、やぐらはもう、嫌がつたりしなかつた。

そつと身を任せたやぐらに微笑んで、朔は耳元で囁く。

「俺がいる、やぐら……だから、もう苦しむな」

口調が変わつてゐる。そんなことをほんやりと考えながら、溶け合つ温もりにて、やぐらはうつとつと皿を細めた。

「どうして、分かるかな？ 朔ちゃんは。やつぱり、すうじよ、さくらを縛つている 影 は、彼女の想いだ。それも、とてもなく強い、悲しみの念。

「寒いな、もう帰ろう」

「とか言つて、あたしは降ろしてくれないのねー？」

まるで、子供を抱つゝするかのように、腕の中に収まつてこたせぐらが不満そうに、口を尖らせた。

「あー、ダメだダメ。おこらがいないと、やぐらはダメダメだよ……目離したら大変」

「なによう、子供じゃないんだからね？ もう」

ふくん、と膨れるやぐらの頬にキスをして、朔は『帰つて続きた』と耳元で囁いた。

「きや つ、朔ちゃんのHツチー 降りしなさい」

「ダメー、ほらまじめに帰るぞ」

「もう」

もう、やぐらはなにも言わない。

気づいたからだ。

なにが必要で、なにが必要ないのか。
いら

朔が好きだ、ということ……気づいたから。

ふれ合う心、繋がる絆。

二人はその夜、互いに離れなかつた。

繋がる想い　　一人の絆（後書き）

どうも、維月です。

朔が、暴走中…（泣）こんなキャラじゃないのになあ。
これ、裏にまわつた方がいいのかな?
うつ、穴があつたら、隠れたい……。

Dis t i n c t i o n 故郷へ（前書き）

朔とさくらの出逢いには、意味があった。
意味……それはさくらの『過去』にあった悲しい事故と関わりがある
つて！？

人と妖、異種族間の愛をつづった、ラブファンタジー

「ねえ朔……あなたが好きよ。だからね、けじめつけようと
う」

勝手なあたしを、許して……。

一晩中、求め合つた氣怠い体を起こして、さくらは小さく呟いた。
傍らで無心に眠る、子供のような朔の頬に優しく口づけてから、手
早く身支度を済ませて、部屋を出て行った。

居間の壁に掛けてあるカレンダーの日付は、10月。
10月のページの4日に、赤ペンで丸が付いている。
琥珀の命日である。

さくらは、故郷にある琥珀の墓参りに、行こうとしていた。

「今日も、雨だね……琥珀、あの日と、同じ」

食事もそこそこに、さくらは朔の朝食の食パンとサラダに、布巾を
掛けてマンションを後にした。

一方、さくらの寝室では、眠っていた筈の朔が、いそいそと身支度
を始めていた。

朔には、さくらがその日必ず出かけるのが、分かっていたのだ。
階段を下り、転げる勢いで居間にいると、テーブルの上に、さくら
が用意した朝食が置いてあるのを見つけた。

しかし、用意された食事をしているヒマはない。

勿体なかつたが、さくらを追う方が、大切だからである。

(今回ばかりだと) 合い鍵でドアを閉め、急ぎ足で後を追つた。

朔の、履き古したスニーカーが、泥混じりの水たまりを蹴散らす。

「さくらっ！」

息を切らせて走っていた朔だが、さくらは、マンションからそう離
れていないところを、傘も差さずに歩いていた。

朔はそんな彼女を、逃がすまい、とをつゝをつゝ抱き締める。

「……朔ちゃん」

俯いたまま、さくらは呟く。心なしか、少し震えていたようだ。

「一人で、行くつもりだったのか？」

ひた、と見つめる朔の瞳には、確かに怒りがあった。

暫く、両者の間に無音の沈黙が続く。聞こえるのは、細かに降る雨の音だけだ。

俯いたまま、さくらはなにも言わない。いや、言えないのだ。

「じめ……なさい」

やがて、小さく聞こえた涙声に、朔は大仰に溜息してから、さくらの髪を優しく撫でた。

「なあさくら、言つただろ？　おいら達、これからもずっと一緒にきて」

穏やかに囁いた朔に、こくんと頷くさくら。

「嬉しかったんだ、その言葉……だからけじめ、つけようと思つ」
今度は、真っすぐに朔の目を見て言つることができた。

その目に、もう涙は一欠片もない。

「そうか。なら、尚更だな……おいらも行くよ、行つて、琥珀に頼む」

「え？」

「さくらをくれ、つてな」

にっこり笑つた朔に、さくらも思いきり笑つ。

その笑顔は、どこか清々しく、潔いものだった。

いつの間にか小糠雨は止んでおり、時折、雲間から僅かに白光が差す。

「それで、どこまで行くつもりだったんだ？」

ふいに、思い出したように朔が問つた。

「前に話した『星の綺麗な場所』かな、祖谷（おや）っていうの」

刹那、朔は凍つた。

祖谷　　懐かしい名前だが、そこは『森の民』一族の本拠地

である。

「もう、今時間の空港行きのバスも行つたやつたし、どうしよう『時間表を片手に』『しようがないね』と笑ひながら、朔は思つて言つてみることにした。

「それなら心配すんな、ちつと手荒だが、他より早く着ける方法を知つてゐる。それに、行き先な、おいらもよく知る場所だから」「え……？」

どういう事が分からぬ、と眉をひそめるさくらじ、朔は苦笑した。

「祖谷は、おいらの故郷でもあるんだ。これなら、話が早いよな？」「瞬のうちに、さくらの顔が、ぱああと輝く。

「朔ちゃんっ」

さくらは、ぐいっと朔の首を引き寄せると、反動をつけてキスをした。

「覚悟、ついたよ、朔のお陰で……アンタとなら、なにがあつても怖くない」

「俺も、さくらさえいれば怖い物なんてない、行こう？　俺たち、例えなにがあつても一緒だっ」

朔は、暫く目を剥いたままだつたが、すぐに嫣然^{えん}と笑いながら言った。

「でも、どうやって行へのかしら？　飛行機よりも速いの？」

「おう、早いぞ……筋（みち）を通るからな」

「筋……ね」

一瞬、さくらの背を冷たいものが滑り落ちる。

以前にも、似たようなことを琥珀が言つていたのを、思いだしたのだ。

【筋を使えば、どんな場所にもすぐ着く】と。

「行くぞ、さくら。乗つてくれ」

朔は、少し屈むと背を叩く。

「ねえ……重くない？　大丈夫？」

促されるまま負ふさつたさくらは、不安げに朔を見るが、朔はなにが嬉しいのか、にこにことしていた。

「朔つてば」

「ん？ 筋 に入つたら少し苦しくなるけど、我慢なんしょ、と背負い直しながら朔は笑う。

「苦しくてもいいの、朔がいるもん、だから平氣」

「どうして、お前の言葉つて……こんなに響くんだろ？ な？ すげえ力出るんだ」

「そうなの？ 朔ちゃんが嬉しいと、あたしも嬉しいよ」

照れくわやうに言つた、朔の肩口に顔を埋めてさくらは微笑んだ。

と急に、すとんと体が落ちる感じがして、さくらは慌てて朔の背中に身を寄せた。

例えるなら、海の底にいる感覚 入つたんだ、 筋 に。

景色は、テレビなどで見たことのありそうな、照葉樹の森が広がっている。

霧を煙らせた、蒼生した森の匂いが全体を支配していた。彼の背に揺られていてる内に、さつきまで見えていたものが、今では黒い、小さなシミほどにしか見えなくなっていた。
朔の足が、それ程までに速いと言つことだ。

朔が足を止めた反動で、さくらは大きく咳き込む。息ができる、 筋 を抜けたのだろう。

さくらはまるで、酸素不足の金魚のように、口をパクつかせた。

「辛かつたよな、さくら……大丈夫か？」

さくらを降ろしてやり、朔はそつと、彼女を草の上に横たえる。

「待つてろ、水探してくるからな？」

「待つて、朔ちゃん……周りに、なにか見える？」

「行こうとした朔のトレーナーの裾を、さくらはぐいっと引っ張った。

「そうだな、すぐ近くに……かずら橋が見える。今は善徳辺りか、

起きても大丈夫なのか？」

朔は、ゆっくりと半身を起こしたせくらを、やんわりと抱き締めながら問うた。

「琥珀のお墓、この近くなの。行こう、朔ちゃん」
せくらは、朔ときつて手を繋ぐと、山肌にある畠の畔あぜを、森へ向かつて歩き始めた。

朔も、せくらの手をきつて握り返すと、これから先に待つものを見据えるように、真っすぐ前を見つめたのだった。

Dis t i n c t i o n 故郷へ（後書き）

こんには、維月です。

『R a b b i tパニッシュ』新章のお届けに参りました。
D i s t i n c t i o n ……けじめの章ですね、朔と琥珀の間で揺
れていったさくらは、決断をします。

こんな話ですが、よろしければ、これからもお願ひしますね。)
—) それでは、失礼致します。

追憶（前書き）

琥珀の墓参りに、故郷である西祖谷村を訪れたさくらと朔。そこで、さくらは4年前の惨劇を静かに語り出した。

憎しみ合う人と妖、絡み合う憎悪の渦中に、今一人は引き込まれようとしている。

人と妖は、結ばれることができないのか！？

人と妖、怒濤のラブファンタジー。ここに見参！

追憶

あの日を思い出して、まず始めて浮かぶのは 激しい雨の音だ。

今はもう、ほぼ元通りに復旧しているが、過去にあった事故の傷跡は、未だに消えてはいない。

徳島県、西祖谷村 今から4年前、この地域を大規模な土砂崩れが襲つたのだ。

高校を卒業して、一時里帰りをしていた、矢先のことだった。

その日は、朝から天気が悪かった……。

「天気悪いわねえ、ここ最近雨ばかりで。地盤が滑りそうよ」

「ええ？ んな縁起の悪いこと、朝から言わないでよねー、ねえ琥珀」

「まー、そうだよなあ。ここ最近は降り過ぎかも、お袋さんの言つことにも一里ある」

「琥珀っ」

あたしは、隣りに座る恋人・銀髪の大男である琥珀を、ギッと睨む。連日の悪天候に、母だけではなく、みんな少しヒステリックになっていた。

「そうよね、琥珀ちゃん、なんかオカシイわよねえ？」
身を乗り出して訴える母を、あたしはびしゃりと一蹴する。

「お母さん、うるさいよ」

「お・だ・ま・り（怒）」

「いでててて……」

むに～～っと、ほっぺたを引っ張られてしまい、慌てて手を引っ剥がす。

機嫌が悪いときの母は、本当に始末が悪い。

その他の面々は、『触らぬ神に祟りなし』とばかりに知らんぷり。

あたしは生け贋か！ その時あたしは、切に内心で叫んでいた。

「山あの、神さんの祟りじやな……先にも、『開発』とか言つて、どこぞから來た奴らが死んだろ？」

漬け物を、もくもくと嚙つていた祖母が言いだした話に、一同は一同は

人を除いて凍りついた。

祖母は信心深い人で、幼い頃には、よくその類の話を聞かされたのだ。

「や、やだなあお祖母ちゃんたら、そんなのマグレだよお

「そつ、そうよ、だつて神さまじやない」

娘と孫に反論された祖母は、思ひきりイヤな顔。

父と琥珀は、対応に困つてオロオロとしている。

まさか、祖母が言つたことが現実になるなんて
は夢にも思つていなかつた。

信じたからどう、と嘆つことではないが、少しは役立つていたかも
知れない。

今は、後悔するばかりだ。

『畠が心配だから、見てくる』と言つて出て行つた両親と祖母を見送つて、あたしと琥珀は畠の上に寝転がつっていた。

「ねえ琥珀、やっぱりへんだよね？ 雨止まないどじろか、段々ひどくなつてるよ。ホントに地滑り起きそつ」

と、ふいに琥珀が起きあがるのを、あたしは横田で見ていた。

「やっぱ俺、ちょっと出でくるわ……確かになにか起きそつな気がする、確かめてくるから、すぐ戻る、お前はここを動くなよ？」

「ちょっと琥珀っ、ホントにすぐ戻つてきてよー！？ 一人でなんて、いたくないもん」

行こうとした琥珀の逞しい背中に抱きつきながら、あたしはその時、ワガママを言った。

「……分かったよ、愛してる」

「んつ、むつう」

離れ様にキスをされ、その時、あたしは咳き込んで大変だつたな。雨の中を走つていく琥珀を見送りながら、彼が早く戻つてくることだけを考えていた。

その後に、なにか待つのかも知らずに。

「長つ！ もうこれ以上、人間を殺めてなんになります、お止めください！」

琥珀は、薄暗い照葉樹の森を走りながら『森の民』総領に大音声で訴えていた。

しん、と静まりかえつた森の中、姿こそ見せないが、無数の同族達の視線が琥珀を貫く。

「ならぬ、ならぬ、人など、我らに害しか『えぬ…少し減ればいい』人は恐ろしい。我らが受けた数々の恨み、今こそ思い知るがよいさ」

暗がりで、爛々と光る同族達の青い瞳。ひしひしと伝わる、恨みや憎しみの念。

「しかし、すべての人間が悪いわけではない！ 雨を止めてくれ、このままでは恐ろしいことになる！」

必死に訴える彼に、同族の対応は冷たいものだつた。

「なにを言うか、人など減つて当然なのだ！ お前も同族なら分かるだろう、人が我々にした、非道の数々を。人を殺せ！ そして我らに栄光をつ」

「そうだ、殺せ！」

「そんなの間違つてるつ！？ 確かに人は、過去に俺たちを狩つた！ でも今は違う、人も俺たちも同じ命、仕切りなんていらないんだつ」

「裏切るか琥珀！ 人間の娘に現^{うつ}を抜かす、この恥知らずが！」

「お前も、大好きな人間共と同じく死ぬがいいさ、長が動いたぞ」

琥珀は、戦^{おの}きに身を固くした。

森の奥から現れた青毛の大ウサギ
の総領である。

彼こそが全『森の民』

瞑想していた彼が、半眼を開いたのだ。

「ならぬ……我らは古くから人間共と闘つてきた、今更止めることなどできようか」

「なぜ、なぜです長……闘う理由など、もうどこにもないのに」

「お前はまだ若い、去れ」

長は、溜息混じりに言うと、琥珀の脇をスタスターと歩いていった。見晴らしのいい崖に立ち、鼻息荒く、眼下に点在する村を見ていた長が、前足で強く土を掻いた。

「お言葉だ、長のお言葉だ！」

「長、今こそ人間共に報復を！」

琥珀が転身して走るが早いが、長の怒号が、大気を震わせるのが早かつたか。

「愚かな人間共に禍いあれ、今こそ天誅を！ 滅びよ愚民ども
！…」

雄叫びと、地盤が軋み、崩れる轟音とが同化し、激震が西祖谷の各地を襲つた。

あつと/or間だつた……。

家が土砂に押し潰れる音がして、周りで、イヤと/orくらに聞こえていた悲鳴が、聞こえなくなつた。

どのくらい、時間が経つたのか。

それは定かではないけれど、ぼんやりとしていたあたしを呼ぶ声が、琥珀だと気づくのに時間はかからなかつた。

「さくら、さくら……俺が分かるか、しつかりしろ」
泥だらけ、傷だらけの琥珀が目に入った瞬間、あたしはすべてのことを理解した。

なにが、起こったのか。

そして あたしが無傷だつた理由。

琥珀が、身を呈して土砂から底つてくれたのだ。

「大、丈夫か？」

「うん、うん」

無事を確認して、安心したように横たわった彼は、すでに瀕死だつた。

「お前だけでも、守りたかった……親父さんたち、見つからなかつた。」

そこまで言つて、琥珀は大きく咳き込んで血を吐いた。

「もうなにも話さないで！ 静かにしてよおつ」

しがみついた、あたしの頭を撫でた彼の手の温もり、今でもはっきり憶えてるよ。

「さくら、俺……思つんだ、人も獸も、同じ命だから、仕切りはいらない……と」

「そうだよ、そう、あたしたち、同じだよつ」

『泣くな』と涙を拭う彼の手を、あたしは強く握りしめた。

「生きて、な？ さく……ら」

涙を拭つた手が、そのまま、力なく落ちる。

「琥珀、琥珀つ！ 琥珀う、いやああ

つ

10月4日、あたしは、愛するすべての者を失つた……。

救助隊に見つけられるまで、あたしはずつと、琥珀の墓の前で蹲つていた。

「さくら、さくら平氣か？」

不安げな朔の呼びかけに、さくらは線香の煙が薄くたなびく中で、瞑想して閉じていた瞼を開いた。

「なあに？ 朔ちゃん」

溜まつっていた涙が、一気にこぼれ落ちる。

朔は溜息して、さくらの髪をくしゃりと撫でた。

「涙……やっぱり辛いか？」

さくらは強く涙を拭うと、にっこりと向き直つて、朔に抱きつぶ。

「いつまでも泣いてしゃ、琥珀に失礼だもん……それにね、あたし約束したんだ。なにがあつても『生きる』つて」

朔は、無言でさくらを見つめた、その瞳は限りなく優しい。

「そう言つ朔ちゃんは、琥珀になんて？」

「さくらを、助けてくれてありがとう、と、さくらをください……かな」

「やーだ、ホントに言つたんだ？」

臆面もなく言つた朔に、さくらはくすくすと笑い出す。

「当つたり前だろ？ さくらは俺のモノだ」

墓前に合掌してから、朔はさくらを抱きあげた。

いわゆる『お姫様抱っこ』である。

「朔ちゃん？」

さわさわと、山の斜面に広がる緑が、陽光を受けてなびいていく。
風が渡り、世界に色彩が戻り 時は、世界は色を変えながら
廻りゆく。

時は過ぎゆき、流れは分かたれて、道を変えていくけれど、それも外せない『循環^{わか}』の一部。

二人を裂いた訣れも、二人が出逢つたのも、確かな意味があるので、偶然ではなく、すべては必然。

「俺とも、約束しろよな？ なにがあつても『生きる』つて」

ぼそぼそと呟くその顔は、拗ねた子供の顔。

さくらは、手を伸ばして朔の前髪をわしゃわしゃと撫でた。

「とつぶに、約束したじやない。一生一緒だつて、ね？ 拗ねないの」

「つー（まだ、怒つてるらしい）」

「うへ、早く着いたつて言つたナビ……結構経つてたんだ、もう夕方だあ

さくらは、腕時計を見て思いきり溜息した。

時計の針は、5時半。

「帰らうか？」少し冷えてきたな

朔は、そっとしゃくらを降ろしてやる。

「ひん、宿はもう取つてあるの。ここから近い所よ、行こう」

しゃくらの後についていた先にあったのは、善徳の外れにある、一軒の旅館だった。

「ここね、去年も泊まつたんだ、お風呂も入つて、すぐここによ？」

はしゃぐしゃくらの脇で、朔は不思議そうに首を傾げた。

「……おかしいな」

「わー、久し振りい……朔ちゃんも早く早く」

ぶぶん、と手を振つて、しゃくらはなにが嬉しいのか、はしゃぎまわつている。

（おかしい……こんな旅館があるの、おいら知りねえぞ？）

それに、なんか気配。

同族か？

「おーい、なにしてるのよ、先行つひやつよ？」

旅館の引き戸に手を添えながら、しゃくらがむつ一度、朔を呼ぶ。

「あ、ああ悪い」

「もう、どうしたの？ ほーっとして」

きゅーっと、腕に抱きついてしゃくらの頭を撫でて、朔は『呆けてた』と笑つた。

「なんだそれ、まあいいけど」

中に入つていしゃくらに続いて、玄関の扉を閉める。

違和感を感じながらも、楽しそうなしゃくらの気分を害させる気にな
れず、朔は迷いつつも口を噤んだ。

追憶（後書き）

『生きる、なにがあつても
がこの章のテーマですね。
こんな話ですが、よろしくお願ひします。』（こうへ）

小休止（前書き）

琥珀の墓参りに、さくらの故郷である徳島を訪れた2人。宿を取つた先の旅館の女将と、さくらは知り合いで、しかも朔と同じ族である『森の民』であることが判明。そこはさておき、2人は、そこでしばしの休息を取ることにした。

小休止

それから、ここの旅館の女将が話をしている間、朔はなにやら落ち着かなかつた。

『氣配だ。』

やはり同族の氣配がする、近くに、何者かがいるのかも知れない。警戒しながらも、片方はさくらの会話を聞く。

話の内容からして、さくらと女将は知り合いのようだ。

「今年も、またお世話になります。澪君も、こんにちは」
さくらが少し屈んで微笑みかけると、女将の足に、しがみついていた少年が振り向いて『いらっしゃい』と笑つた。

「おりこじさんねえ、澪君は幾つになつたのー？」

「5つ！」

もにもにと小さな手を動かして、身振りでそつそつと進める澪に、さくらは悶絶する。

「かわいいこいつ、やつぱり子供つて好きだなあ」

弾けるように笑う、さくらの意外な表情に、朔は一つ瞬く。

「さくらちゃん、そちらの方は……？」

微笑みながら尋ねる彼女に、さくらは幸せそうに笑つた。

「この人は、朔つていってね……あたしの一番大切な人なんだ。椿さんと同じ『森の民』だよ」

瞬間、朔は固まる。

(『森の民』……そつかー、ここの女の氣配だったのかつ)

「あ、あの」

びくつと、固まつた朔に、椿は慌てて付け足した。

「大丈夫、長には伝わつません……安心して？　ここのは、結界が張つてありますから」

「ありがと、椿さん」

話からして、危なかつたらしくことを悟り、ほう、とさくらが安堵

の息をついた。

「いいのよ、昔のよしみだもの。あなたの家には、よくお世話になつたから。お部屋の方に、案内しましょうね」

椿は、廊下を静々と歩いてゆく。

「お夕餉、でき次第にお持ちしますね？ それでは、『じゅるり』とそう言うと、椿はにつこりと笑つて襖を閉めた。

「静かね」

ぽつりと呟いたさくらに、朔もどうしていいか分からず、小さく返事を返す。

「ああ」

二人きりになり、どこかくすぐりたいような静寂を感じて、さくらはテレビを付けた。

「……さくら」

朔が甘えてくる。

テレビではバラエティ番組が流れっていて、芸人の、とりとめもない笑い声が聞こえている。

そんなギャップに、さくらは内心笑つた。

「ダメよ、離して？ こんなとこじゃできないわ？」

「やだ……離さねえ」

首筋に口づけられ、彼の熱い息がかかる。

「や、ん……ダメ、朔」

背中からまわった手が、さくらの胸元に触れようとした瞬間。

「ねーねー、お兄ちゃん」

ぐい、と朔のトレーナーが小さく横に引つ張られた。

「ぶつ！」

バランスを崩した朔は、みじとに床へ^レ対面。

「てーめーえー、ぬあにすんだよ、このちびつじゆわ」

朔は、恨みの籠もつたジト目で侵入者を睨む。

「澪君が…どうしたの？」

(もう少しだったのに……はあ)

さくらも溜息混じりに、飛び込んできた侵入者・基い澪を手のひらに拾い上げた。

「隠れんぼ、隠れんぼしてたの、一緒に遊んでー」

悪気はなかつたらしく、無邪気にえへー、と笑つ澪。

それと正反対に、ぴょん、と膝に飛び降りた茶色い小ウサギに、朔は顰め面。

「しょーもない、いつちょ遊んだげるつ」

わやつきやとはしゃぐ2人を見ながら（主に澪の方）朔の口にめかみに、青筋が数本浮く。

(このガキ……あなどれねえつ)

「かくれんぼ、しょ！」

「おわ！ お前、いつの間に」

いつの間にか、自分の膝の上にいた澪に、朔は驚いて尻餅をついてしまった。

「お兄ちゃん、溜息ばっかりはダメなんだよ?」

「なんだよ?」

澪は、小さな前足で朔の膝を叩きながら得意気に言った。

「幸せが逃げちゃうの。めつ」

(ガ、ガキに『めつ』とか言われた

「あーあーあ、朔…とりあえず、行つてくるね?」

「バイバイお兄ちゃん!」

憎たらしく笑顔で手を振る澪に、朔は更にへこむ。
げしょ…と自己嫌悪に陥っている朔を放つとらかして、さくらは澪と庭に出て行つてしまつた。

小休止（後書き）

こんにちは、維月です。

朔とさくら、段々きわどくなつて来ちゃつたなー（汗）
どうなんだろ？……。

拙作に、よろしければ感想などいただければ幸いです。
こんな作品ですが、よろしくです。

最悪の邂逅 長じやくら（前書き）

現長・奈与とさくらが鉢合わせ！？

先代の父親と同様に、人を憎む奈与は、さくらに殺意を抱く。
実は、朔と奈与は血縁で！？

絡まり合う憎惡の果てに、異空間へ避難した二人。

一体、どこへ行くのか……？

最悪の邂逅 長じてぐら

（まだだわ、一番早くに起きちゃった……椿さんは起きてるだろ？）
けど、朝ご飯まで時間あるよね。散歩でもしようか）
少し離れて寝ている朔と、昨夜そのまま、遊び疲れて寝てしまった
澪を起こさないように、さくらは玄関へ向かった。
幸いなことに、途中誰にも会わずに外に出られ、さくらは安堵する。
今は、気分的に一人になりたかったからだ。

「懐かしいな、小さい頃よく通った道だ……」

さくらは、半ば草に埋もれた道を進んでいく。

この先には、不思議な色の水を湛えた、泉があるのだ。

「まだあるかしら、あの泉……潰れてなければいいけど」

あの土砂崩れの後、さくらはその時の記憶が、すっぽりと抜けていた。

そう　　いわゆる、一時的な記憶喪失のよう。

せり出した草を、片手で払つて進み出た瞬間、さくらは思わず足を
止めた。

泉の畔に佇む、青い毛並みをした、大きな獣と目が合つたのである。
見つめ合う両者、互いに驚きが隠せないようだった。

「で……でかいウサギ」

ピンと張った耳は巨大で、大地を踏む足は逞しく、爪は鋭い。

大型犬より大きな獣を、さくらは生まれて初めて、目にしたのだった。

た。

「に、人間か？」

声が重なり、さくらはぱちくり、と瞠目する。

大ウサギも、物珍しそうにさくらに近寄り、さくらの手の匂いを嗅
いだ。

「やだ、くすぐったいっ、カワイイね、お前」

スリスリと纏わりつく、大ウサギの頭を撫でてやくらは笑う。

「珍しい女よの、我を見ても驚きもせぬとは……まこと人に人間か？」
青毛の大ウサギは、少しあくらと間を取ると、苔生した石の上に座つた。

「そういうのと縁があるのよ、あなたみたいに、立派な人は初めてだけだ」

「粹な女じや、名を申してみよ……」

苔生した石の上に座り、真つ直ぐに自分を見つめる彼からは、どこか支配者を思わせるような、威厳が感じられた。

「人に名前を聞くときは、まず自分から名乗るものよ？」

そう言つてあくらがワインクすると、大ウサギは度肝を抜かれたのか、目を大きく張つた。

「よからう、我こそは『森の民』現総領・奈与なたくという、そなたは何と申す」

「あたしはさくらよ、奈与さんって、お祖父さんみたいな話し方をするのね？」

「そういうのは、よく分からぬがな……のう、あくらとやら。以前に、どこかで会いはせんかつたか？」

「え？」

さくらは、そつと傍に寄つてきた奈与に、ほんの少し後じさる。

「いや、その名に覚えがあつてな……確か、琥珀と一緒にあつた女子の名と、同じで」

きろり、と流した横目で見られた刹那、さくらは凍る。

「琥珀を……知つているの？」

「ふうむ、やはりそなた……『あの時』の生き残りじゃな？　あやつが捨て身で救つたといつ

がり、と前足で踏みつけた石が、粉々に砕け散る。

「で、でも……あたし、あなたに会つたの、今が始めてでつさくらは、ひどく慌てて後じさつた。

「おめおめと戻つてくるとは、余程命が惜しくないとみえる……我

は、椿のよつには甘くないぞ」「はつ、と息をのむさくら。

それと同時に、さつき、なぜ廊下で誰にも会わなかつたのかを悟り、

きつく奈与を睨み据えた。

「椿さんに、何をしたの？！」

「我に歯向かう者には『死』あるのみ……消した。そして、そなたもここに消えるのだ」

一瞬で組み倒され、肉食獣のよつな、牙の感触を首筋に感じる。

奈与はグルル、と唸ると、さくらを踏みつける前足に力を込めた。わつき、座つっていた大岩を碎いたのと同じように。

柔らかい皮膚が裂けて、傷口に鋭利な爪が食い込んでいく。

ポタポタと流れ落ちる血に、奈与は目を細めて舌を這わせる。

さくらは、殺氣を突きつけられ、息をするのもままならなかつた。

「どうだ、狩られる者の気分は？ 恐ろしかろう、痛からう

「やめ、て」

搾りだすよつに言つたさくらを鼻で笑つと、奈与は襟首を咥えて草むらに投げ捨てた。

「同じ事を、貴様ら人間は我らにしたのだ……そこで、しばし祈るがいい」

奈与が、少年の姿に変わつていく様子を、さくらは愕然と見送つていた。

少年に変わつた奈与の手のひらに、稻妻のよつな光が集まるといふ。それはさくらの足元に生えた、雑草の穂先を粉々に碎く。

「どうした、恐ろしいか？ 次は当てる、楽にしてやるわ……ぐつ！」

奈与が、再びわくらに手のひらを向けよつとした瞬間、彼は低く呻いた。

小石が彼の後ろ頭にヒットしたのである。

「さくらに触んじゃねえ、つのゲスが！」

「朔！」

瞬歩で、樹梢からさくらの傍に降り立つ朔。

躊躇ながら、自分に搔き付いてきたさくらを、朔は宥めるよつて頭を撫でた。

「悪かった、傷、痛むか?」

ぶんぶんと、首を横に振るさくら『よし』と笑つて、朔は『森の民』総領である奈与を睨みつけた。

「朔……貴様、戻つていたのか。なぜその女を庇う…」

奈与は忌々しげにさくらを睨みつけながら、吐きつけるように言つ。

「てめえこそ、なんでさくらを狙うんだよ?」

「その女は、我が先に見つけた獲物じゃ! 仕留め損ねた獲物を、今やつと見つけたところを、貴様がしゃしゃり出おつして、この愚か者つ」

「獲物だあ? ふぞけんじやねえぞ、てめえ」

瞬間、キン…と朔の青い瞳が、殺氣を宿して色を変えた。

びくつ、と震えた奈与に、朔はニヤリとする。

「なつ、なつ」

今までの威勢の良さはどこへやら、尻餅をついて震えだした奈与に、今度はさくらが動いた。

奈与の頬を、平手で殴つたのだ。

「命を、なんだと思つてるの! ? 玩具じゃないの、失くしたら、もう戻らないのよ? 非道によつ、椿さん殺すなんてつ」

朔に泣きつくさくらに、奈与は腕を組んで鼻白む。

「椿が恋しいか? 貴様も、今すぐあの世に送つてもいいんだぞ?」

「いい加減にしなさいよつ! 力ワライつて言つた、あたしがバカだつたつ、アンタなんか、全然可愛くない、このひねくれ者つ」

殴ろうとしたさくらの手を止めて、朔は奈与を放り投げた。

「てめえみてえなヤツと、血い繋がつてゐるなんてな……考えたくもねえ、このクソガキつ」

「考えるヒマ、なくしてやるつ」

バリツと、雷^{いかすち}が大氣を引き裂く。

奈与が手のひらを向け、雷撃を放つのと、朔がやへりを底つたのは同時だつた。

「きやああ

「ひー！」

「くつ、クソガキい

「、ぐつ……やへり、やへりじつ

かりしるー。」

バチバチと、雷撃がやへらを灼ぐ。

「くそつ！」

このままでは、さくらが危ないと直感した朔は、地面に血で移動陣を描く。

印から燐光が噴き出すと、朔は氣を失ったやへりを抱え、非常口として開いた 筋 に飛び込んだ。

見知らぬ世界で…（前書き）

奈与の追撃から逃れる為に飛び込んだ異世界で、朔とさくら… 2人は茫然と立ち尽くすことしかできなかつた。
異世界の湖に 筋 が開けた時、二人の前に現れた人影があつた。
それは…！？

見知らぬ世界で…

(くそつ！ 筋 の底に足が着かないなんて、雷撃で空間が歪んだなつ)

朔が非常口として飛び込んだ 筋 は、ただ広い闇だつた。片方には意識のないさくらを抱え、朔は深闇の中を、出口を探して漂う。

(さくら、息が浅い…… しれじやあ危険だ!)

意識を失ったさくらは、夜目にも青白かつた。ひやり、と朔の頬を、凍つた闇が撫でていく。そつしている内に、天井あたりが薄明るく光つているのを見つけ、出口へ向けて、朔は底を蹴つて昇つていった。

「ぶはつ！ げほつ、げほ！ かはつ」

大きく水しぶきが上がつて、朔が顔を出す。

ヨロヨロと砂浜に倒れ込むと、さくらがその衝撃で噎せ、飲んでいた水を全部吐きだした。

「げほつ！ けほけほつ、うう

「さくらー、さくら、しつかりしつ！」

ぼんやりとする視界に揺れる影に、一瞬、琥珀の影が重なる。

「さ、朔ちゃん……なに、ここ？ あたしたち、どうしたの？」

朔はさくらを抱き締めると、宥めるように、何度も頭を撫でた。

「すまない、奈々から逃れるには 筋 に入るしかなかつたんだ。平氣か？ どこにもケガ、してない？」

さくらは、ゆるゆると首を横に振る。

「朔こそ、傷……痛くない？ あたしを庇ってくれたのでしょうか？」

朔の、赤剥けた手をそつと包んで、さくらはポケットからハンカチを出し、端を細く裂いて、傷口を手当でした。

「「めんね、痛かったよね……みんな、ごめん」

手当てをしながら涙するさくらを、小さく小突いて朔は笑う。

「気にするな、俺も椿も心配ねえよ……『森の民』はそう簡単に死はないのさ。だから……な？ もつ泣くな」

「ホン…ト？ 椿さん、生きてるの？」

朔が微笑みかけると、むくらも安心したように微笑む。

「よかつたあ」

朔は、嘘をついた。

椿は 彼女は死んだのだ。

(ごめん、さくら、おいら…嘘ついちまつた)

嘘を、つかなければいけなかつたのだ。そうしなければ、さくらは深く傷ついていた。

さくらが旅館を出ですぐに、さくらの外出を、厨房にいる母に伝えに行つた澪が、大声で泣き叫びながら戻ってきたのだ。

『お兄ちゃんつ、お兄ちゃんあん！　お母さんを、お父さんがあーつ』

『なにがあつたつ』

急いで場に急行すると、そこは一面の血の海。

その中に、肩口を大きく裂かれた椿が横たわっていた。

『お前つ！？』

『私はいい……こうなると、分かつていたから。すみませ、あの人を…奈与を、止められなかつた、むくらちゃんが危ない、奈与は…あの子を殺す』

『手当てをつ、すぐ戻るから…』

そこまで言いかけた朔を、椿は浅い息のしたで遮つた。

『行つ…て、早く！』

そこまで言つと、椿は自らの本性に戻つた。
息を、引きとつたのだ。

椿の命を賭した叱咤に、朔は死にものぐるいで、むくらの気配を追つたのだった。

「生きよつ、どんなことがあつても……」

腕の中で、大人しくしていったさくらが、ふと思いついたように問う。

「帰るう朔ちゃん、帰れるのよね？」

「筋が歪んでる……奈々のせいだ。さくら、よく聞いてくれ……俺たち、どうやらここで暮らすしかないみたいだ」

「つ……わ」

「すまねえ、さくら……何度も試したんだ」

悔しそうに呟く朔と、ペシャン、と座り込むさくら。

さくらは溜息をついて脱力すると、ややしじらしく間をおいて、すつと立ち上がった。

「なつ、なによつ、別にこられしきで、へこたれるあたしじゃないものー。奈々なんかの好きに、させないんだからつ、ねつ、朔ちゃん」

「す、すごいな」

思わず言つてしまつて、朔は慌てて口を噤んだ。

落ち込んでいると思いつや、強気で地面を踏みしめる。

そんな彼女に、朔は改めて惚れ直し、感服したのだった。

「それにしても、ここど〜〜？」

さくらは、きょろきょろと辺りを見廻しながら歩き始める。
さくらと砂地を進んでいくが、見わたす限り、どこまでも広野が
広がるばかりだ。

湖沼特有の水の匂いが、つんと鼻がつく。

どうやら、朔が飛び込んだ 筋は、この湖に通じていたようだ。
さつきから、何度も開こうとしてくれていたが、向こう側で閉じら
れてしまつたらしい。

「さくら……もしかしたら、日本出たかもな……迂闊には動けないぞ
？」

「ええつー? そうね……でもどうみつけ〜。このままつて訳にも

いかないじゃない

朔は、諦めたように座り込むと、大仰に溜息する。

「まずは、ここがどこかしるべきだよな?『田家でも探せつ』

「うんつ、ここがどこであれ、あたし達生きなきや」

バツと立ちあがつた瞬間、さくらは、自分たちを不思議そうに見あ

げでいる子供と田^たがあつた。

「あ、れ？」

「おかあさん！ 誰かヒトがいるよ 「」

わくらが首を傾げるが早いか、子供は喜々として走つていってしまつた。

「げーほげほげほつ……」

砂が舞つて、咳き込む一人。

「朔ちゃん、いま…言葉通じたよね?」

「ああ」

「つて」とは、いじ日本なんだ！ よかつたー！」

わくら、と抱きつすべくの勢に、朔はぺたんと尻餅をついてしまひ。

「うれしー！」

わくらと抱きつべ、わくらの、濡れてはしきつした胸が押しつけられて、朔は思にきり沸騰する。

「おかあさん、いじむじむ！」

そのわくらの子供が、わくらとましゃぎながら、母親とおぼしき女性の腕を牽いて戻ってきた。

朔が、慌てて背中にわくらを庇つのを見て、その赤毛の女性は笑みを深くした。

「この湖を通りてきたのね？ まだ通じてたんだねえ、大丈夫？ ケガとかない？」

わくらは、彼女の服装と自分たちの違いに、内心『まさか』と息を詰めた。

「あ、あの……いじつて、日本じゃ、ないの？」

「ホントに日本から来たんだ！ ねえ、向いつけは今どつなの？ こっちと季節は同じ？」

「えつと、あの…あの」

「ちょっと待つてくれつ、わくらがびつべつしてゐる… それに、アンタは誰なんだ？ 向いつけで事は、いじせ日本じゃないんだな？」

質問攻めに遭い、まじつやくじりを背中に庇つて、朔は赤毛の女性をギロリと睨んだ。

「いめんごめん、懐かしくてツイ…ね。あたしは氷魚、こっちが息子の風季^{ふうき}だよ。あたしも、日本で暮らしてたことがあるんだ。ここがどこかつて言つてたけど……とりあえず、場所を変えて話そいつよ、びしょ濡れじやないか」

赤毛の女性・氷魚は『ねつ』と人懐っこく笑つて、さくらに手を差しだした。

「あ、はい」

さくらは、今になつて自分たちが濡れ鼠な事に気がつき、頬を染める。

朔は相変わらず、本能的(?)に警戒したままだが。

見知らぬ世界で…（後書き）

こんばんは、どうも『無沙汰しておりました、毎月十夜です。
『Rabbit』につけ』11部のお届けに参りました。

さてさて、本題。

椿と澪の親子…（死んじやつたよ…椿、『めんねつ）澪の父親は奈
与ですよ。

意外。

そして、異界に飛ばされた2人の前に現れたのは『幻夢シリーズ』
の氷魚さんです。

こんな話ですが、読んでくださる読者様には感謝です。

これからもまだまだ続けていく予定なので、よろしければぜひぜひ
謁見の程を。

長文ですみません、それではこの辺で失礼致します。

救い手（前書き）

徳島から 筋 を通つて、なんとか別の空間に避難できたやくらヒ
朔。

しかし、そこは日本とはまったく違う成り立ちの国で、『七つ国』
という異世界だった！

七つ国に、辿り着いた二人に待ち受けるのは……！？

氷魚と風季について行つて、湖からそつ離れていない村はずれに、石造りの一軒家が聳えているのが見えてきた。

四つ角に整備された道の両側には、青々とした作物の葉が茂る、畑が広がる。

「こつちよ、入つて入つて」

氷魚が玄関の扉を開くと、そこには、中世ヨーロッパの民家によく似た内装の、居間が広がっていた。

壁には、たくさんのドライフラワーが逆さに飾られ、深い碧あおを基調とした、見方によつて色を変える不思議で、複雑な色彩の天井には、見慣れない文字が円を描いて彫り込まれている。

「きれい……でもなにかしら？ 天井に、文字みたいな、模様みたいなのがある」

「ケルト文字……一種の結界陣だな」

ぽつりと言つたさくらに、朔は低く囁いた。

「お兄さん、これが分かるんだ？ つてことは、人外だね？」

氷魚は、ふむ…と腰に手を当てる、朔をまつ直ぐに見つめる。

「おかあさん、お兄ちゃんね、ウサギさんなの。でね、こつちのおねえちゃんは人間だよ？」

朔は、急に指を差され、しかも種族を当てられてぎょっとした。

「俺の属が分かつたつて事は、あんたらも…？」

よじよじ、と膝によじ登る風季を抱きあげて、氷魚はひひひろと笑つた。

「分かるよ、それが基本だもん……ちなみにあたし達は人狼さ。つ

て言つても、暮らしの面じや、人間と何ら変わりないんだけどね」

「ここに……人間はいないの？」

「う、ごめん……そうだよね、煽つてどうすんだ、あたしのバカっ、

と、とにかく心配しなくて良いよ、こここの世界も、そんなに悪いト

「『じやないから、ね？』

怯えに表情を曇らせたさくらこ、氷魚は慌てて謝る。

氷魚は、壁に貼つてある地図を外すと、テープルの中心に広げた。
「この世界はね、見て… 7つの国から成り立つてる。棠・勾・蘇・
栖・崙・東崙・胡。だから、これは 七ツ国 といつんだ…」

「……七ツ国」

呆気にとられつつも、さくらは少くとも反響する。

「さくら、大丈夫だ」

茫然とするさくらの肩を、朔が強く抱き寄せた。

「今いるここは、棠國の西外れにある彌庄せいやうといつ所よ… お兄さん、
よつほど彼女が大切なんだね。あ、そういう名前を聞いてなかつた
つけ、訊いてもいい？」

「あ、すみません… 名乗り遅れまして、あたしはさくらといいます。
で、こっちが」

「朔だ」

さくらと重なるように言った朔に、氷魚はナイスタイミングと笑つ
た。

しかし、ピリピリと警戒する朔は相変わらずだ。

「怖がらないでよ、別になにもしないからさ。お茶どうぞ」
二人の目の前に、それぞれ湯飲みが置かれ、湯気と香りが鼻腔をく
すぐる。

「おーし… 温かい」

「んまい…」

「それにして驚いたなあ、初夏とはいえ、水も冷たかつたでしょ
うに… どうして湖なんかに 筋すじを？ 」この世界でも、もう少し
マシな場所があるよ」

お茶にがつつく一人に、氷魚はひょいと片眉を上げてみせる。

「仕方なかつたんだ、逃げるの精一杯で。しかも、攻撃のせいで
帰り道が歪んじまって」

その柳眉を顰めた朔に、氷魚は小声で問うた。

「ねえ、逃げてるつて……追われるの？」

ことん、と湯飲みを置いて、朔は俯く。

「まあ、そういうことになるが……迷惑、かけるつもりはない。茶、

馳走になつたな。行こうさくら」

「じちそうさま、ありがとう氷魚さん」

「ちよつ、ちよつと待つて！ 他に、宛がある訳じゃないんでしょ？』

早足で玄関に向かう朔とさくらを、氷魚は慌てて止めた。

「ない。けど……俺たちに困わつたら、死ぬかも知れないんだ」

「そんな危険な事つ、一人だけじゃさせられないよ！ 迷惑がなんだい、そんなのちーとも構やしない。だから、ね？ よかつたら二人とも、ここに住まない？ 大勢の方が楽しいでしょ？」

「で、でもつ」

「その先は言いつこナシ！ さてと、事情を聞こうかな」

あわあわと困惑するさくらに、氷魚はびしつと指を向ける。
逃がさないよ、といわんばかりに食い下がる氷魚に、遂に根負けした朔は、ひょくつと首を竦めて見せた。

「分かつた、話そう……俺は、そこボウズの言いつとおりウサギだ。けど、ただのウサギじゃない。『森の民』という一族なんだ」

「その『森の民』から逃げてるのね。なにか、追われるような」と
でもあつたの？」

「それは……あたしから話すわね？ 朔ちゃん、いいでしょ？」

「ああ」

こくりと頷いた朔の膝に、風季がよじ登りつとしては、失敗を繰り返している。

どうやら、座高が高すぎて届かないようだ。

「4年前、あたしは琥珀というウサギと暮らしてたの……彼も、朔と同じ『森の民』の一人で、人間と変わらない暮らしをしてた。でもその多くは、人間を憎んでいるのが殆どで。そして4年前のある日、事故が起こったのよ、あたしの実家があつた村を、土砂崩れが

襲つた。あたしが… その時唯一の生存者

「その土砂崩れを起こした先代の長と、現総領が執念深くもさくらを見つけて、『殺害計画』を実行したって訳だ」

「ちょっと、何なのそいつ…… さくらさん、なにも悪くないじゃないつ

拳を握つて地団駄を踏む氷魚に、風季がまとわりついて甘える。

「おかあさん、とうさん帰つてきたよー」

それと同時にバタン、と勢いよく扉が開いたかと思つと、脇に一つずつ袋を抱えた青年が、歩調荒く入つてきた。

「ひーおー…… てめえっ！ 今度はお前が行けよなつ、重かつたんだぞ、小麦の袋2つも」

「遅かつたじやないの、それに… お密さん来てるんだから、少し静かにしてちょうだい」

「他に『言つ』ことがあるだろ？ がつ、つたく」

どかっ、と長椅子に座つた瑪瑙の膝に風季がよじ登つて、小さな口元に、人差し指を当ててジェスチャーする。

「どうせん、お密さんビックリしちゃうでしょ、しーよ、し

」

「密？」

瑪瑙は、向かいの長椅子に座る朔とさくらを見てから、ちりりと氷魚の顔を見た。

「この二人は、さくらさんと『森の民』の朔ちゃん。小一時間前くらいいに、昔アンタが開いた 筋 から出てきたの」

「ああ！？ あの湖の 筋 なら、とっくに閉じたはずだぞ？ 別のヤツじゃないのか？」

「ホントよつ！ だつて、あれ以外に 筋 通つてる場所なんて、この近くにないものつ」

「わ、悪かったよ…… 別に責めてるんじゃない。ってなあぜ俺の首を絞める」

ぐぎぎぎぎぎ……と首を締めあげられ、当事者の瑪瑙に、朔とさくらが

も冷や汗が浮く。

「分かればよろしい」

「いて……それに、あんた朔だっけか？　『森の民』だつて？

それ本当か？」

「知ってるの？　瑪瑙つてば」

首を傾げる氷魚、どうやら知らなかつたようである。

「言つたが、なんだ？」

朔は、膝の上で組んだ手を、きつく握りしめた。

その震える拳を、さくらがそつと包む。

「ああ……『森の民』つてのは、この世界にかつて現存した、古代種族の名だ。どこかに移住したつて聞いてたが、まさか、あんたらの世界にいたとはな」

「ええ、それで……あたし達、逃げてきたんです。その『森の民』から

俯き氣味に言つたさくら、瑪瑙は思わず身を乗り出した。

「追われてるのかつ？」

「あつ、いえ、あの……」迷惑はかけませんつ、また追つ手が来たら大変だし、それに、お子さんもいるわけですし」

さくらは、朔の服の裾を引っ張つて、長椅子から立ちあがる。

「色々と面倒事があるからな、長居はすまい」

「そつ、そんな二人ともつ！」

玄関へ向かおうとする自分たちの前に、通せんぼをする氷魚に、さくらは、やんわりとその片腕に触れて微笑んだ。

「ありがと、氷魚さん……その気持ちだけで充分よ。これからなにがあるか分からぬけど、暫く一人でやってみようと思つたの。それでも分からぬことがあつたら、また来てもいいかしら？」

「もつちろん！　なにがあつたら、いつでも来てつ」

ぶぶん、と強く握り合わせた手を振る氷魚に、さくらは気圧され氣味に笑う。

「あ、ありがとつ」

と、黙つて話を聞いていた瑪瑙が、勢いよく立ちあがつた。

「ついできてくれ、とりあえず、これから寝床がいるだろ？ 客分を無碍にする心根は、生憎持ち合わせてないんでね」「にっ、と笑う瑪瑙の背中を、氷魚が『あんたつてばっ』と強く小突く。

「つてーな、氷魚…お前は留守番してろよ？ 風季と風音放つといたらエラこことになる」

外野で、きやわきやわと騒いでいた風季の他にもう一人、頭数が増えていることに気づいたさくらは、ぱちくつと壁かざねにしてしまった。

「えつ、氷魚さん…もしかして」

「そりなの、こいつら双子なのよねー……やんぢや盛りで煩わずかねいつた

行くぞ、と一警する瑪瑙についていく一人を、氷魚は心配そうに見送つたのだった。

煙の脇を、スタスターと進んでいく瑪瑙。

あとをついていきながら、足を止め、しきりに周りの景色に魅入っている。

「わあ、すごい山脈かずみ……あたしのトコより高いのねえ」

「霞かすみのかかり方が……徳島とは格が違うな」

「おいおい、置いてつまうぞー？」

風景に感動していた自分たちの数歩先で、瑪瑙が振り向き様に呼んでいる。

それに気づいたさくらは、まだ呆けている朔を引きずつて、再び歩を進めた。

「すつ、すみません……ほら朔ちゃん、行くよつ

「さつ、さくらあ」

(女つて、男より…ある意味逞しいよな)

二人を見ていながら、瑪瑙はしみじみと内心で呟いた。

「いじだ、氷魚の母さんが住んでた場所なんだけどな、よかつたら使つてくれ」

『古くてじめんな?』と笑う瑪瑙に、朔とさくらは思つきり首を横に振つた。

「そんなん、すじいですつ……」こんな立派な家、貰つたりやつていいんですか?」

さくらに賛同して、コクコクと頷く朔を見て、瑪瑙は大仰に溜息する。

「いいから連れてきただろ? それとな、細かいこと気にしそぎだぞ? 気にすんな、遠慮なんかいらねえよ」

「あ、ありがとう」

「おうよ」

瑪瑙達三人の前には、立派な石造りの家
佇んでいた。

「すまねえな、色々と……そうだ、あなたの名前は?」

「俺ア瑪瑙つていう、朔だつたか? なにかあれば呼べよ、力になるぜ」

につ、と笑い合つ一人に、さくらもつられて笑う。

「おつと、案内役はここまでだな……しつからは、お一人さんで上手くやつてくれ」

帰つていつた瑪瑙の姿が見えなくなつてから、さくらはさつと朔の腕に抱きついた。

「親切な人でよかつたね、朔ちゃん」

抱きついたままの、さくらの背中がフルルッと震える。

「寒いのか? とりあえず中に入ろうな」

朔は、さくらを伴つて、洋館の扉を引っ張つた。

からん、と、軽やかな鈴の音と共に開いた先には、日本でもよく見られる、いわゆる豪邸を思わせる空間が広がつていた。

「……どうかで見た感じだよな」

ぽつり呟いた朔に、さくらも小首を傾げる。

「わっ？ あつたか…」

玄関で靴を脱いで、フローリングの廊下を通して室内に入った瞬間、ふうわりとした暖気が一人を包んだ。

次いで、吊り鐘型のランプに、一斉に明かりが灯る。

「す、ごい… どうなってんの？」

唚然として呟いたさくらの横で、朔はキヨロキヨロと、珍しそうに天井や周りの壁を見回しながら、独り言のように囁いた。

「魔力で満ちてるんだ、あの文字が彫り込まれて」

「魔力…？」 あ、この模様つて、氷魚さんの家にあつたのと同じ？」

白壁の天井には、様々な形をしたローン文字が彫り込まれ、まるで天球を廻る正座の如くに、天井や壁を巡っていた。

文字は、廻りゆく度に光り、その様は儂い螢火が舞うようでもある。

と、さくらが深い溜息を吐いた。

それが、感嘆からくるものではないことは、赤く潤んだ彼女の瞳からして明白だ。

「ねえ、朔ちゃん… どうなるんだろ？ あたしたち」

さくらは、榻ながすに座る朔の胸板に、きつく身を寄せた。

「……」

朔は、なにも言わずに、ただ、さくらを抱き締める。

「これじゃ、行方不明じゃない… イヤよ、朔ちゃん、帰りたいよう

ガクガクと震え、迷子の子供のように泣きじゃくるさくら。

「…生きるんだ。今、ここで」

そう言って、ぽふ…と髪を撫でる朔の表情は、どこまでも優しかった。

「…」めん…「めんね、責めてるんじゃないの。ただ、考えたら急に怖いな…つて」

「それが当たり前だ。けどな、さくら…同じトコで迷つてないで、今できることをしよう!？」

くすん、と鼻を啜つてから、さくらはじつと、朔の青い瞳を見つめた。

「『いま、できる』こと』か。そつ、そつよね？　あたしつたう…」

朔だつて同じなのに、不安じやないはずがない。

朔だつて同じなのに、不安は同じなのに。

自分が一人、辛い訳じやないのだ。

「生きよ…ね？　朔ちゃん、ずっと一緒に」

朔は、さくらの肩を抱いたまま、半身を捻つて窓の外を見る。暮れてから、大分時間が経つていいのだろう。

こちらに来てから、初めて見あげた夜空。

なにが同じで、なにが違うのか。

同じのようで、同じではない。

見あげた夜空には、深く沈んだ群青が、果てなく続いていた。

救い手（後書き）

维月です、『Rabbitぱにっく』新章のお届けに上りました。
さて、本題。『七つ国』に辿り着いた2人ですが…
バーッつですね（笑）

ちょっと可哀相だったかなー…なんて、今ごろ思つてたりして。
ここまで読んでくださる読者様には感謝です～（^○^）
これからも、もしよろしければ、『愛顧くださいませ』
それでは、失礼致します。

When they, still love もし、それが愛ならば？（前書き）

さくらと朔が、あくせくしている一方で、奈々も、ある想いを抱えて葛藤していた。

なんと、さくらに想いを寄せていた奈々。
しかまた、それが新たな波乱を呼ぶことになりつゝは誰も予期していなかつた。

When tha, s love もし、それが愛ならば？

奈与は、一人湖畔に佇んでいた。不思議な色の水を湛える、あの、いつかの泉である。

尤も、いま水は、鏡のように色を変えているが。

「なぜ、気になるのだ？　たかが、人間の小娘一匹に……」
ぽつりと、しかしさつきりと言った彼は、水鏡に映し出された彼らの姿だけを、食い入るように見つめていた。

「朔め、あいつ……オレの獲物を横取りおって、許さぬつ

水鏡に映るのは、互いに寄り添い、睦み合う二人の姿。

奈与はまだ幼さの残る美貌を歪め、水鏡の中にいる、さくらの唇に手を触れてから、そつと唇を合わせた。

（オレは兎族・森の民の長だつ、手に入らぬ物などないのだ！　さくら……必ずや、手に入れてみせるつ）

触れた（水鏡にだが）唇を押さえつつ、頬を染める奈与は、少年らしく初々しい。

あの唇に、直に触れてみたい……と思つのは、罪だろつか？

人を恨むのをやめた先代今兎族で、人を恨む者など自分を除けば無に等しい。

『なぜ、なぜです長……鬪う理由など、どこにもないのに』

奈与の中に、一頃り琥珀の声が蘇つた。

4年前、兎族でありながら、人に与した男である。

（のう、琥珀よ……そなたも、こんな気持ちだつたのか？）

どうやら、お前が正しかつたようだ。

「そなたが欲しいのだ……さくら、オレのものになれ

水鏡に夢中で口づける様子は、一見、水を飲んでいるようにも見える。

しかし傍観者には、そう解釈されなかつたようだ。

「なにをしてる……水鏡なんぞに発情して」

「ぶはつ、うわつ……父上！？　いや、先代つ」

からかいを含んだ中音に、奈与はバランスを崩し、水しぶきを上げて泉に落下。

「覗覧の術か、まだ解かれていないな……どれ、奈与、そこをビキなさい」

奈与の父・先代長は、青い髪を、腰辺りまで伸ばしている若い男だつた。

面影が、奈与と瓜二つだ。

兔族　　いや、全『森の民』は、ある一定の年を取ると、それ以上の変化はない。大体が、二十代の真ん中あたりの外見なのである。

先代長は、軽々と奈与の背を抓むと、草の上に転がした。

先代長は、水鏡の中のさくらを見た刹那、その身を凍り付かせた。彼は、動搖を押し殺して、なんとか声を出すことに成功した。

「ほう？　これはまた……美しい女子おなじだなあ。奈与、彼女が欲しいのか？」

「バツ、バカをいえつ！　オレが、人間の女を欲しがるわけがないつ」

ニヤニヤと笑う、『隠居もとい、先代長。

奈与の口調が変わっているが、これが彼の地であり、公私をちゃんと使い分けている。

「発情してたクセに、嘘はいかんぞ」

「してないつ！　この変態がつ」

がうがうと、歯がみしている奈与の額を押さえながら、先代は小さく呟いた。

「椿を消したようだな、それと息子も。どうしてだ

それに、奈与はぴたりと動きを止める。

「オレに、刃を向けたんだ、友を守るためにとか言つて

先代の深い溜息に、奈与は憤りを露わにして怒鳴った。

「その友が、さくらでも…か？」

奈与は一頻り目を張つたが、すぐに目をそらして低く唸る。

「オレが欲しかったのは、椿じゃない。さくらだ。ずっと昔、そくらの幼い頃から慕つていたのに」

「奈与、お前はまだ若い……すべてが、自らの思い通りにならないことがたくさんあるのを知るべきだ。例えば、身分や、人同士の絆」「父上は、オレが間違つてるとこか?! すべて父上の、言つとおりにしてきたのに!」

「だからこそ言つている。私は間違つていた、殺戮からはなにも生まれないし、不毛だ。だからもう一度と、我々も人間も、争わないと決めたんだ」

「……父上は、変わつたな」

奈与は、悲しげな瞳を先代に向けると、小さく溜息した。

「変わるさ、どんな者も生きている限りな。お前も変われ」

先代は、懐から緑青に輝く宝珠を取り出すと、奈与の目の前に突きつけた。

「それは……」

緑青に輝く、大小の宝珠

椿と、澪の魂魄だ。

「椿と澪には、私から新たな体を与えておこう。お前は、もう少し成長すべきだ」

「父上」

背を向けた先代に、奈与は凍りそうなほど、冷淡に言つた。

「オレは、さくらを手に入れる。邪魔をするなら、例えあんたでも……容赦はしない」

「それならば、仕方あるまい……その時は、その時だ」

重い沈黙を破つていった先代の瞳には、過去の、もう一人の自分が映つていた。

若く、愚かだつた自分が。

(もう、なにも失うわけにはいかない……その時は止むを得ん、あれを、殺そう)

先代は、静かに踵を返すと、来た道を戻つていった。

「父上には分からぬ、分からぬんだつ」

去つていく父の背中に、奈々はきつくる唇の端を噛みしめる。滲んだ血を吐き捨て、そのまま水鏡の中に、身を投じたのだつた。

さくらの願い（前書き）

七ヶ国での暮らしにも大分慣れた頃、2人は市場の帰り道で、50年前にこちらに流されてきたという女性・セリナと出会う。セリナとの出会いで、さくらはある野望（希望？願望？）を持つて！？

わくらの願い

朔とわくらが、七ツ国で暮らし始めて、早一ヶ月が経つた。初めの何日かは迷ったものの、今ではすっかり慣れてしまい、遠出をして、商人がござつて軒を連ねる衙門山まで行くようになつた。

「わあ、相変わらず混んでるわねえ……向こうで言つ、市場みたいなモノなのね、きっと」

「おじおい、どっち行くんだよ、野菜類はあつちだろ?」

まつたく反対側にある玉石商（屋台の宝石屋）を見に行こうとするさくらを捕まえて、朔は思いきり渋い顔。

「あん、ちょっとだけ見せてよう……朔ちゃんてばあ

「ここに来るたび同じこと言つてるわ、今度こそダメー」

「きやつ」

小柄なさくらを、ひょいと抱きあげると、朔はすんすんと人混みの中を進んでいく。

勿論、人混みを搔き分けて進む一人を、振りかえる者が多い。あまつさえ、くすくすと笑う者さえいるのだ。

「やだ……つ、朔ちゃん降ろして……一人で歩けるから」

「おい、大人しくしてろつて」

じたばたともがくさくらを押さえ込んでいたが、八百屋の前で、さくらは（無理やり）朔の腕から脱出して、ペロリと舌を出して見せた。

「もつ、朔ちゃんのバカ……笑われちゃって、恥ずかしいじゃない」

「買つモン買つて、早く帰るぞ……怒鳴るなー」

（恥ずかしいと思つなら、もうしなけりやいいのこつ）

内心ぼやきつつも、おかんむりなさくらの脇で、朔はしきぱきと野菜を選んでいく。

玉菜、トマト、コン「にキユウリ。朔の好物ばかりである。

しかしあからさまに、一つだけ避けているものがあった。

「はい朔ちゃん、ウサギはやっぱり、これ食べなきゃね
差し出されたのは……人参だった！（ビーンツ）

朔、一步退く。

「朔ちゃん？」

「……人参キレイ」

やや暫く黙った後、朔は汗みずくで、ぽつりと言った。

「なに子供みたいなこと言つてんの！ 好き嫌いしないで、なんでも食べるのよつ、すいませーん、コレグださーい」

さくらは、ポケットから一枚の札を取り出す。

その札は、朱墨で表書きされており、裏にも、同じ朱墨で印が押してある。

先日氷魚がやつてきて、この札を渡してくれたのだ。

「あいよ、嬢ちゃん……今日も」「苦労さんだねえ。おや、ダンナはどうした？」

八百屋のおかみさんが、野菜を詰めた袋をよこしながら尋ねてくる。
「朔ちゃんたら、さつきから拗ねちゃってるのよ……人参買ったから怒つてるの」

さくらが隣を指さると、むくれ顔の朔が、俯きがちに腕組みをしていた。

「ウサギなのにねえ、人参食べないのかい……珍しい」

「好みつてあるだろう、普通」

面白そうなおかみさんに、朔はあくまでも憮然として言つ。

「そろそろ帰る、朔ちゃん」

「うー」（声が低い、まだ怒つてこる感じ）

「ありがと、おかみさん」

「あいよー、またおいでっ」

なんとか険悪ムードを裂こうと、さくらは足早に、朔を連れて市場を離れたのだった。

「『めんてば、朔ちゃん』

「イ、とそっぽを向く朔に、さくらはオロオロ。

(なんか、ホントに子供みたい)

「ちょっと聞いて、きやつ！」

「きやあつ！」

「さくら！？」

同時にした二つの悲鳴に、朔は慌てて振り向いた。

さくらは、座り込んでいる女性に謝りながら、散乱した荷物を拾い集めている。

女性は、妊婦だった。

「大丈夫ですか!? ホントに『めんなさい』、お腹…痛くないです
か？」

「こっちこそ、よそ見してて『めんなさい』…あたしは大丈夫よ」
差し出したさくらの手に掴まって、女性は「よいしょ」と起きあが
った。

「荷物持ちますね、家まで手伝いますから」

「ごめんね、迷惑かけるわ」

「いえいえ、ね？ 朔ちゃん」

「あ…ああ」

さくらは、逃げようとした朔の耳朵を、きつく引っ張つて笑う。

女性の家は市場から近所にあり、玄関先では、彼女の夫が仁王立
ちをして、妻の戻りを待っていた。

「セリナ！ 心配したんだぞつ、珍しく一人で行くなんて言つから、
気が気じゃなくて……」

彼女の夫は、黒い短髪を振り乱しながら言つ。それ程、心配だった
のだろう。

「大丈夫、この人達が助けてくれたからね。それに、これしきで死
ぬんじや、あたし達の子じやないもの」

女性・セリナは、につこりと笑いながら、ポン、とまろやかな腹部

を軽く弾く。

「お一方、妻を助けてくれて、ありがとうございます。立ち話もなんです、上がっていってください」

目元を和らげて、彼は「どうぞ」と玄関口を空けた。

話をするついでに、セリナは人間だと言つことが分かり、いまから五百年前に、嵐の海に転落して流れされ、この七ツ国で暮らすまでを、さくらは聞きたがつた。

「若狭の漁師の娘でね、あ…若狭つて『人魚伝説』で有名な場所ね？忘れもない……あの日は、これまでにないくらいの、大嵐だつたからね。あれは……夏の穏やかな日。昼前までは海は凧いでいてね、父さんが漁に出てくのを、浜に見送りに出たときだ、凧いで、風もなかつたのにね、津波が起きたんだ」

「津波！？」

さくらが驚いて聞き返すと、セリナは大きく頷く。

「そう、津波つたつて、ただの津波じゃない、その中に…蛇みたいな水妖がいたんだ。浜で父さんが助けを求めてた、だから走つたんだけどねえ……けど遅かつた」

「遅かつた？」

「あたしは、崖が崩れて、水妖のいる水の中へ真っ逆さまつてわけ」

「五百年前？ 戦国時代か？」

朔は、呟いてから首を傾げた。

(セリナが、五百年前にこの七ツ国に来たのなら、なぜ若いままなんだろうか？)

それが顔に出ていたようで、セリナは氣を悪くした風もなく朔に応える。

「あ、いや悪い」

心の内が筒抜けだったのに、朔はばつが悪そつに首を竦めた。

「いいのよ。それだったら、もう老人を通り越して、骸骨になつてもおかしくないでしよう？ この世界の時間は、流れ方が違うみた

い。だからあたしも若いままで、この人と出逢ったの、「すべての空間が、同じ時間の流れとは限らない、つてことなんだな」

出された茶を啜りながら、朔は小さく頷いたのだった。

「さくらさんも、人間なのでしょ？」こには、どうやつて？」

セリナは、幸せそうに腹を撫でながら、はんなりとした微笑みを向ける。

「逃避行だ」

と朔。

「まあ」

セリナは、好奇心に田を輝かせながら身を乗り出した。

（なんか違う気が……ま、いいか）

えへん、と胸を張る朔に、さくらはそつと溜息する。

「おー一人は夫婦なの？ お子さんは、まだ？」

「ぶつ！」

「えっ！」

セリナのトンテモ発言に、朔とさくらは一気に沸騰してしまった。

「あ、いや……その」（朔）

「いえ、あの……まだ、です」（さくら）

「ご夫婦なのね、ちゃんと顔に書いてあるわよー」

くすくすと笑うセリナに、さくらもつられて笑う。

「お茶をありがとう、あたし達、そろそろお暇いづましますね」

「あら、もう少しーでも平気よ?」

名残惜しげに言つセリナに、さくらはふつわつと、笑つて見せた。

帰り道、さくらはセリナの言葉を思ひ出していた。

「夫婦…か」

「どした、さくら……疲れた？」

急に歩みを止めたさくらを、朔が覗き込む。

「ねえ朔……」

首を横に振つてから、さくらはじと朔を見あげた。

「ん?」

さくらは、朔の青い目を覗き込んで『ああ、やっぱりきれいだ』と思つ。

「赤ちゃん……欲しいな

朔の手から、ぼさ…と買い物袋が落ちた。

「……さく、ら?」

かかか、と赤くなり、爆ぜんばかりに目を見開く朔。

「あの一人見てたら、羨ましくなつちやつた。ね、作ろ?」

簡単に言つてよこすさくらに、朔の顔の赤みはさらに増してゆく。
朔だつて、さくらとの子が欲しくないわけがないが
欲しがりません、（奈与に）勝つまでは!』である。

「聞いてないでしょー、また人の話」

（いや、もう充分だつて……理性がつ

朔の中で、決心が崩れた。

「じゃ、じゃあ……今夜だけ、な?」

立て前では何度もそう言つたが、それが実現するはずもなく……。

二人は、熱い夜を過ごしたそうな。（こいつら…（怒））

一方…水鏡の前では、奈与が地団駄を踏んでいたとか、いないとか。

せべらの願い（後書き）

ここにちは、「無沙汰しておりました。

引っ越しやらにやりで、更新が遅れてしまい申し訳ありません。
朔とさくら、これからもつと、試練が待っています、頑張れ〜（つ
て、他人事）あわわ。

こんな話しても、読んでくださる読者に感謝です。

それでは、また次回にお会いしましょう。

それでは、失礼します。

兎族の島・梁団（リヤンリュイ）（前書き）

奈『』の追撃もなく穏やかなある日の曇下がり、やくらは煙の眼に引つ掛かっている子兎・紫生しづなを助けてあげた。

実はこの紫生、二つに分かれた兎族の片割れの一族だつた！
お間抜けキャラ（でも忍者）な紫生も加わって、ますます盛り上がりしていく（？）やくら一行。

さてさてどうなる、怒濤の第2部スタート！

兎族の島・梁品(リヤンリュイ)

「ひ
ん」

ただつ広い畠に、なんとも悲しげな泣き声が響き渡る。
このままだつたら、必ず死ぬのは間違いないだらう。
この炎天下だ。

熱にやられるか、畠の持ち主に毛皮　しかも生皮を剥がれるか。
つぶらな瞳から、ぽろつと涙がこぼれ落ちた。

畠のど真ん中に竹竿が天を仰いでおり、その先には、罠に掛かった
哀れな茶色い獸がぶら下がっていたのだ。

明らかな罠に、なぜ気づかなかつたのか？

耐え難い空腹に、罠があつても近づくしかなかつたのである。

「わゅう…う、わゅ、う」

茶色い兎は、逆さにぶら下がつたまま泣き出してしまつた。

怖い。

怖い。

怖い。

死にたくない、こんなところで。

助けて誰か！

「あら？ 朔ちゃん、ちょっと来て一つ、なんか引っかかつてゐるの

」

「んん？」

やくらは、仕掛けに引っかかつてゐる獸を地面に降ろし、足首を縛
る繩を切つてやつた。

「見て！ 茶色いウサちゃん！」

ぐつたりしてゐる子ウサギを朔に突きだしてみせると、やくらは上
機嫌に愛撫を始める。

「元気ないねえ、お腹減つてる？」

子兎は、しきりに頷くとぽろぽろと泣き始めた。

やくひばせよ」とする。

「かたじけない」

「あなた、やつぱり話せるのね?」

「はい」

子兎は、やくらの膝から飛び降りると、土下座をするよひに頭を下げた。

思わず顔を見合わせる朔とやくらである。

「盗みを働いたのに、救つてくださるとは……なんとお優しい方、『姫様』と呼ばせていただいてもよろしいでしょうか? これ以後は、姫様にお仕え致します!」

「あ、あのね……とにかく落ちついて。あたしはやくらってこの、こつちは朔、あなたと同じウサギよ」

「その艶やかな黒髪……あなたはかなり高貴な身分の方ですね。どうか、私どもの国におでくださいませ」

土下座したまま、子兎はなぜか朔に敬意を払つ。

(なんだろ、ウサギの黒髪って珍しいのかな?)

「固いなあ、これじゃ奈与といい勝負だ。それと、お前さんの名前……まだ聞いてなかつたけど」

けむたそうに言って、朔はいつの間にかに黒いウサギの姿になつていた。

「あ、失礼を……私は名を紫生しづなと申します。胡の東海にある染呑コヤンコロイという島の忍です。私事を済ませに衙に下つたものの路銀も底をついてしまい、今のありさまに」

「なあ、お前らの一族つて、兎族か? 『森の民』つて知つてるか?」

「私どもの一族がそうですが、若様と姫様も同族で?…」

「ばつ、と勢よくしがみついた紫生に、やくらは少なからず慌てた。

「う、うつと……あたしは人間なのよ」

「いえ、いいえ……姫様も人間であれ、私には唯一の君主には変わりないませぬ。この際、姫様も我らと同族です」

「え、えつとお」

苦笑いするさくらに、朔は思いきつたように言った。

「ま、いいんじゃねえか？ 仲間は多けりや多い方がいい」

「朔ちゃんたら…… 紫生君は、とりあえずなにかお腹に入れなきゃね。酷いやつれ様よ？」

「そういうや、お前さつきから人型してないよな…… 空腹過ぎて力が出来ないのか？」

「お恥ずかしゅうございます」

げんなり、と床に潰れた紫生の前に、さくらは皿を置く。

「たくさんあるから、どんどん食べてね」

皿に乗っている物体を見た朔は、すざつと後じさり、壁にしがみついた。

皿にのつている物体 基い人参に、朔は一気に青くなつた。

「なななっ、まだあつたのかよっ！ しかもそれ、土臭い」

「うん、だつて… そこの畠で採れたてだから」

「なに！ ？ 人参なんか埋めんなっ」

さくら、どうやら朔に内緒で人参畠を作つていたらしい。かりかりと人参を囁つている紫生を、さくらはにっこりと笑いながら撫でてやる。

「あのね、朔ちゃんたら人参キライなのよ？ ウサギなのにねえ」

「つたぐ」

ぼふつ、と煙が上ると同時に、朔は人の姿に戻つた。

「そんなに怒らなくともいいじゃないの…… あら、もういいの？」

「おいしゅうございました、姫様。ありがとうございます」

そう言つてから、紫生はその形を大きく歪ませた。

その様は、水が揺らぐかの如く。

「姫様」

紫生は、ゆっくりと顔を上げる。

茶色い短髪に、つぶらな翡翠の瞳。

そこには、みかけ1-2才ほどの年格好をした少年が跪いていた。

「あら、う

あまりの驚きにさくらは、紫生を見てから、ぱちくりと一つ瞳田をした。

「で、どうやって行くんだ？ その梁田ってのは、どこか偉そうな朔の脇をさくらが小突くが、紫生は気にした風もなく、にこやかに応える。

「胡の海岸に船、小舟ですが用意がありますので、それで梁田までこいでいくんですよ」

（胡国までつて、どうするんだろう……歩き、はかなりキツいんじやないかなあ？）

不安が顔に出ていたのか、朔がそっとさくらの肩を抱いた。

「大丈夫だ、だから……な？」

「うん、そだね」

すべて言わなくても伝わる。一人を繋ぐものはこんなにも強いのだ。紫生はその様子を和やかに見守りながら、島にいる家族を想つたのだった。

「それで、やつぱり 筋 を使つのね」

移動手段を知つて少しげんなりしたさくらに、しおつは『しばしのご辛抱を』と、さくらと自分の手を強く握り合わせる。

それを見ていた朔は、（さくらに言わせれば子供っぽく）始終拗ねて、床を転がりまくっていた。

いわゆる『ヤキモチ』であるが、本人はそう自覚していない。

「ほら、朔ちゃんてば…行くよ？」

紫生が 筋 を開きながら、二人を肩越しに振りかえる。

「いま行くつ」（怒）

づかづかと歩調荒くついてくる朔に、さくらは大仰に溜息した。

「なに怒ってるんだか。こつちおいでつ

「ん、つ！？」

引き寄せられると同時に、朔は爆ぜんばかりに大きく口を張った。

唇に柔らかな衝撃。

キスである。

「もひ、ヤキモチ焼きさんなんだから。いい子にして?」

「……!?」

真っ赤に沸騰している朔を引きずつて、さくらは紫生の後に続いて筋に入つていった。

「紫生君、梁呂の鬼族の村つて……どんな所?」

さくらは朔に手を牽かれながら、前を歩く紫生に問つた。

(あれ、筋の中にいるのに苦しくない? 耐性でもついたのかしら?)

「言つなれば島全体が『隠れ里』ですね。『心配なさらずに、我らはもう一つの鬼族と違つて、人を嫌つてゐる者はいませんから』『そつなんだ……その、もう一つのつていうのは? なあに?』小首を傾げたさくらに、紫生はなぜか赤くなる。

「いまから千年前に、鬼族は一つに分かれたんです……なんで、分かれたまでには私にも分かりかねるんですが、長老なら話してくれるかも知れませんね」

「初めて聞いたぞ、そんな話。向こうの連中は、それを根に持つてるつて訳かよ」

歩くうちに薄暗さが消え、足が細かな砂の感じを捉える。

潮風が、三人の髪を撫でつけていった。

「着きましたね、船を持つてきまし……暫しここでお待ちを」「う、うん……分かったわ」

一々、さくらの手を握りながら話す紫生に、朔はいらっしゃ。

「なんて顔してゐるの……朔ちゃんたら、こーれ

き つと、歯を剥く朔を、さくらは撫でてやつた。

「どうかなさいましたか? 姉……お、船の用意ができましたよ」

「あ、ありがと!」

「若様も、お早く

穏やかな凪の海原に、船を漕ぐ音がゆつくつと響く。

「水きれいねえ」

日射しに、水面が揺れて輝くのがなんとも美しくて、さくらは、水に手をひたして、軽く漕いでみた。

小魚が数匹、さくらの指の間をすり抜けながら、遊んでいく。どこまでも果てない滄海の彼方を見つめて、朔はぽつりと言つた。

「始まりの地……か」

「え？」

「さくら、これから戦が始まる」

強い意志を秘めた、青い瞳にまっすぐ見つめられて、さくらは短く息をのむ。

「戦……？」

「奈々はお前を狙つてくるだろ？、さくらを守るため、俺は闘う」と、船が大きく揺れると同時に、紫生が『うわっ』と悲鳴を上げて、片足で踏鞴たたひをふんだ。

朔は、さくらを抱き寄せて底いながら、船に起きた異変に気がついた。

ひたひた、と足元を濡らす海水。船底が割れて、浸水しているのだ！

「おい！ この船、壊れてたのかよ！」

「た、確かに底穴は塞いだのにい～っ」

その間にも、船は沈んでいこうとしている。

「とにかく！ 出るぞっ！」

抱え上げられ、さくらはその身を凍りつかせた。

「ま、まさか……飛び込むのとか、ナシよね？ そんなのいやよっ」

朔が足を踏み出した。

いま、ここは海の上。しかも沖のど真ん中である、当たり前なことに地面があるう筈もない。

あるとすれば、それは海の底ではないだらうか？

「やめてつ、飛び込まないで！」

くつくつと、笑いが聞こえる。

抱かれたまま顔を上げてみると、朔が、悪戯の成功した子供のよう

に、嬉しそうに笑っていた。

一気にさくらの口が、への字に曲がる。

「信じられない！ バカ朔ちゃんつ！」

「平氣だよ、ほら…歩いてみる」

特に悪びれた風もなく笑う朔を、さくらは恨みがましい目で見送る。ほど、と降りされたさくらは、足裏に固い感触を捉えて一瞬立ち竦んだ。

「大丈夫ですよ、姫様…私の術で、海を固めましたからね」

「固めた？ え、ええ～！？」

口で驚いてはいても、さくらはすっかり、海の上の散歩を楽しんでいるようだ。

「ありや聞いてないな。さくら、待てよお」

紫生はほのぼのと二人を見送っていたが、そして、いつの間にか置き去りになつていた。

……事にそれから暫くして気がついた。

「あつ、ひどい！ これって置き去りだよ……若様、姫様あ

つ」（慌）

兎族の島・梁団（リヤンリュイ）（後書き）

「んばんわ、」無沙汰しておつました維月です。
めきめあと（？）寒さを増す今日の頃ですが、体をこわして、2
ヶ月ほど寝込んでしまいました。
みなさまも、恙なきよしお過ごしぐだせこませ。
さて、本題。

ついに兎族の謎が明らかに！
千年前の悲劇とは……奈与、なつちに関係した話です。
我が子の中では、とりわけ凶暴な人ですが、まあそこがなんとも。
(みなさまは、どうでしょうか?)
次回、「」期待です。
それでは、この辺で失礼致します。

せくら、ペンチー（前書き）

助けた子兎……紫生に連れられてやつてきた島、兎族の隠れ里の島である梁島。

手厚い歓迎を受けるもぐらだが……。

夜の砂浜で、せくらに危険が迫る！？

セベリ、パンチー

島に着いて、耳に真っ先に飛び込んできたのは、甲高い女衆の声だつた。

「まあ見て！ 黒髪よ黒髪つ、なんて神々しいのかしら？」「ここの子も可愛いわよ？」

「だ～り、んだよお前らつ……」「いや、ひつひくな」

「えつ、えーと、あの？」

見る間に包囲され、押しくらまんじゅつ状態に……。

一気に押し寄せる女性陣にて、紫生は半ば押し潰されながら、セベリの前に出て彼女を庇つた。

「こりひ、姫様に触るな！ 道を開けろ！」

と、女性陣のぞわめきが一瞬で治まつたのに、セベリはぱぱりんと一つ瞠目をする。

(すじつ……紫生君つて、結構偉い人なのかな?)

「おや紫生、おまえ、戻つていたのかい」

女衆の中から、紫生と同じ忍び装束だが、それをもつと上等にしたものをして着た女性が現れた。

きりりとした、なかなかの美女……くノ一だ。

いつの間にか、周囲にござつた返していった者すべて(朔ヒヅヘリ、紫生を除いてだ)が身を伏せ、伏礼していた。

「ばあちゃん……あ、いや長老」

(はあ！？)

ばあちゃん？

この周りで、年を取つたように見える者はいない。

一体、誰を指して言つているのか分からず、朔ヒヅヘリは、互いの顔を見合わせてしまつた。

田の前にいる女性がそなんだろうか？

ばあちゃんといわれるには、とても似つかわしくなく……若い。

「」おいらのお一方が、私を救つてくださったので」に招いたのですが……いいですね？」

「それはいいが、その前になんと言つた？ ん？」

女性は肯定の意を示したようだが、いまは別の意味で鼻白んだようだ。

きらりと横目で睨まれて、紫生はそろそろと後じさり始める。

「『ばあちゃん』って言つたよねえ」

「！」、「めんより、母ちゃん勘弁つ」

瞬間、彼女の霸気に気圧された紫生が、茶色い子兎になつた。

「お若い方、遠路をよく来なさつた。この悪たれが世話をになつたのう、あたしはこの島の長老で、」てあ「阿」という

「あたしは、わくらつて言います……」ひちは朝

「阿は、うんうんと頷いてから、一人だけではなく周りにも陽気に笑つて見せた。

「今日は宴じゃ！ みな、楽しもうぞつ」

わああ…と一気に歎声が上がる。

その様に少々引きつりながらも、わくらは朔と顔を見合させてから、どちらからともなく笑い出した。

けれどそれも束の間、二人はあつといつ間に」アの城館に招かれ、奥座敷で着付けられる羽目となつたのだった。

「おー……色が白いから、なんでもよいつ似合つ。次はこれなんかどうだ？」

(うつ…わあ、映画村みたい)

いま、わくらが着ているのは小袖と緋袴、それに朱の打ち掛け。いわゆる姫装束だ。

「あ、あの、」ア阿さん

「うん、なんじや？」

「あれ…」

わくらが指さした方角には、着替えの際に閉め出したはずの紫生が

(茶色い子兎のまま)、格子戸の隙間から小さな頭を覗かせている。弓阿の頬に青筋が浮き、勢いよく障子が開け放たれた。

「イソのエロガキがあつ！ 紫生！」

小憎たらしくも、紫生は一目散に退散。

「はあ……たく、すまんのう。あのバカ、次にやつたら許さんでな。で、やつきの続き、と」

「エーモ、再び筆筒を漁り始めた弓阿は、やくらははしゃぐ溜息した。

(朔ちゃん、どんな服着るのかなあ？ 格好いいもん、なんでも似合つよね)

一方、弓阿から逃げてきた紫生は、まだ治まらない動悸を咳き込みながら抑え、部屋で待っていた朔の着付けをよつやく始めた。

「は 恐ろしかった」

くてん、と畳の上に潰れる紫生に、朔は袴の紐を縛つてから横に座つた。

「なあ、やくらは、やくらはよつだつた？」

「お美しゅうござこましたとも……それはもつ」

ほけへ……と遠い田をする紫生に、朔はがっくりと肩を落とす。(ダメだコイシジヤ……自分の田で確かめるしかないかな)

朔は、ときどきと身繕いを済ませて、廊下に出た。

「ダメですよ若様、いまは我慢です」

トコトコと付いてきた紫生が、慌てて朔の腕を引こうとする。

「なんだ？」

「いまは鬼ババが……」

「だ~れが鬼ババじやい！ イのエロガキが」

「ふざめ……」

「ひ~と殴られ、紫生は敢えなく撃沈。

「朔ちゃん」

「さ、やくらは」

鉄拳を振りかざす弓阿の後ろには、さくらがいた。

緋袴に、桜色の打ち掛けが、眩しくらいによく似合つて。

元々色素の薄い髪をゆるく結い上げて、それがより、艶やかさを際立たせている。

美しかつた。

「朔ちゃん、どう、かな？　へンじやない？」

頬を染めて俯きがちになつたさくらに、朔は、ぶぶんと頭を振る。

「よかつた。朔ちゃんは、なんだか大正時代の書生さんみたい。よく似合つてるわ」

につこりと笑いかけたさくらに、朔もつられて笑う。

どうやらその雰囲気に感づいた弓阿が、からかい氣味に言つ。

「ん～？　なんじやお主ら、もしや夫婦か？」

瞬間、ぽふんと爆発した一人に、弓阿は『まだまだ青いのう』といやつくのだった。

「今夜は宴じゃ、さくら…存分に楽しもうぞ」

「ありがとう」

「鬼ババが、ウサギ被つてゐる」

と、（余計なことに）そこに紫生の茶々が入る。

「まだ言つか、このエロガキ！　その口が悪いのかえ！？」

「さや　　」

紫生を追つて行つてしまつた弓阿を見送つて、さくらと朔は深いつ溜息をつく。

「仲いいのか悪いのか、分かんない二人ね」

「同感」

夜も半ばになり、皆が酔いつぶれた頃にさくらは、一人抜け出していった。

酒で熱くなつた頬を、涼やかな夜風が撫でていき、それがなんとも心地よい。

潮の香りが混ざる夜風が、襟足の解れ髪を僅かに揺らした。

「いい風……月がきれい」

さくらは月光の降り注ぐ砂浜で、打ち掛けの裾を翻して廻々（くる）くる）と踊る。

深い海の碧が月光を通して躍り、舞い踊る彼女を、より艶やかに見せた。

「はあ……ホントにきれい、どこまで続いているのかしらね、この海は」

「さて、な……月も海も、お前の前では靈んどしまうぞ。なあ……さくら」

一人呟いたはずが、返ってきた返事。さくらは鋭く息を詰めた。

「奈与つ……」

逃げようにも、きつく背中を抱き締められ、身動きが取れない。

「逢いたかったぞ……さくら。お前がここに来るのを、待っていた」「一気に、黒い雲が月を隠した。俄に風が起っては、ざわめきを増させていく。

「離してつ、離しなさいよつ、あんたなんか！」

もがくしゃくしゃの耳元で、奈与は喉の奥で囁いた。くくく、とうに嘲

笑じみた笑いが、さくらの波だつた神経をさら逆なでにする。

「オレが：なんだと？　いくら強がつても、朔は来ない。幻術をかけておいたからな」

鼻息が首筋を擦つて、なんとも居心地が悪い。

さくらは一瞬だけ、守られるだけの不甲斐なさを呪つてから、密かに身構えた。

女だから、力がない……か弱い。

守られる存在であり、一人ではなにもできない、役立たず。

それが世間一般の女のイメージである。しかしさくらは、それが心底気に食わなかつた。

図々しくも唇を求めてきた奈与を受け入れるフリをして、がりつと鋭く唇に噛みついてやる。

「う、う……」

奈与の唇から一筋、つうと血が伝う。

「女だと思って、ナメンじゃないわよ」

さくらは奈与の胸板を突きとばして脱出すると、凍った瞳で睨んだ。

「一筋縄ではいかんか。さすが、俺の惚れた女だ」

血を拭つてから「ヤリとした奈与は、さくらの前髪を掴んで引き寄せると、力強く唇を奪つた。

瞬間、かくん…とさくらが膝をつく。

その身がのけぞつて、砂浜の上にくずおれた。

「気の強い女も嫌いではないが……いま暫し、黙つてもらおうか」

さくらは突然の異変に、とり乱していた。

自らの意志に反して、体は砂の上に仰向けに転がっているのだから、無理はない。

これではあの変態奈与にはござりや』と語つてゐるようにな見えるだろう』。

(バカっ！ ヘンな手つきで触らないでよっ、変態バカウサギ！) 封じられた内心では、由一一杯口汚く罵るが、体はまるで、魂の抜けた人形のように動かない。

(体が動いたら、コイツ…つ、絶対斬つてやる…ハゲてしまえ

つ)

「人間なんか、キレイなのにな……けど、お前だけは特別だ」

奈与は、さくらを抱きかかえながら頬にキスをした。

「受け入れては……くれないか？」

(なに、こいつ…)

目が、合つた。

彼の目は、いまかつて見たことがないくらいに、悲しげな色を滲ませていた。

「解^{かい}」

奈与が一言呟くと、ふわり…とさくらを戒めていたものが消え失せる。

「奈...」「？」

奈与を離つてやる、と息巻いていたさくら。しかしなぜか、気持ちが縮んでいた。

それが釈然とせず、言つてしまつてから、さくらはフルフルと首を振つた。

「奴らにかけた術は解いた、じきに朔も来るだろ？...」

「分かんない男ね、アンタつて。どうして、あたしを助けたりするの？」

「これだけは覚えておいてくれ、オレは...さくらが好きだよ」
さくらは、カツと赤くなる。

こんな、率直に好きだなんて！ どうかしてるとしか思えない。
だが、さくらはある疑問にぶつかつた。

(あれ、この子...よく見たら、左右両目の色が違う？)

それに、すこく透き通った感じがする。

この冷たい...凍える感じ。

さくらは、その目を知っていた。かつての自分と同じ...
『孤独』を知つている目。

「...どうして？」

「それは、分からん...また来るから」

走り去つていつた奈与を、さくらは複雑な顔で見送つていた。

(あの子...奈与つて、ただ表現がヘタなだけで、別に悪い子、といつわけでもないみたい。あの子、寂しいんだわ)

いつも、維月です。

『Rabbieばにづく』新章のお届けです。

あー…奈与が変態くさいっ！ ちなみにダンナさま（朔）は優雅にお眼中。 じらじらじら…（慌）

呂阿と紫生の掛け合いが描いていて面白かった。

ちなみに仲いいです、この二人。（親子だから当たり前か）

こんな話ですが、読んでくださる読者様。ありがとうございます。

それでは、また次回お会いしましょう。

ウサギ地獄？（前書き）

酒盛りの翌日のこと、やくらは『朔以外の雄の匂いがある』と四阿に問いつめられて焦る。朔はむくれるし、四阿には遊ばれ……やくらはてんやわんや。

奈々に会つたことがバレて、そこからまた話が動きだす。四阿が語る、『千年前の悲劇』とは…？

ウサギ地獄？

「 わや つ！？」

早朝のじじまを破つて、四阿の城館中に布を裂くよつなせくらの悲鳴が響き渡つた。

宴会場である座敷には、一面に色々な毛玉が転がっていたのだ。一見には『不気味』である。

ウサギ、ウサギ……どこを見ても、『うやうやしく』とウサギだらけ。

「 ちよつと！ 朔、朔つてばっ、おーケー！ 」

周りの中で唯一人型をしている朔を抱き起こすと、せくらは残酷にも、前後に激しく揺すつた。

その口からは、半分魂が出かけている。

「 ひ、ひ……せくら？ 昨夜、どこ行つてたんだよお 」

朔は額を押さえながら起き上がり、キヨロキヨロと周囲に広がる惨状を見回した。

「 どこひて、どこにも行つてないわよ。アンタが酔いつぶれたから… つまんなくて。それにしても、みんな大丈夫かな… ビドイぞう二日酔い」

「 ふあー……よく寝たわい。いつ見えてもな、我が一族は酒豪揃いなんじや。大事ない、すぐ元に戻ろう 」

「 あ、四阿さん！ おはようございます、ほら朔ちゃんも 」

せくらが城館の主である四阿に余糸するのに会わせて、朔も慌てて小さく会釈する。

「 早うさん。んー？ せくら、おぬし…氣のせいかや？ おぬしから雄の匂いがするわ。朔ではないようだが 」

「 あつ、昨夜の酒盛りの時に付いたとか……たくさんいましたもんふんふん、と匂いを嗅ぐ四阿に、せくらは焦る。いきなり冷や水を浴びせられた氣分だ。

「 ああ！？」

瞬間、うとうとしていた朔の眠気は思い切り弾け飛び、慌ててさくらにじり寄つて抱きつく。

「さくら、まさかだよな？」

「若いな、それに……この匂い、覚えがある」

（う、浮氣だつて！？ そんなつ、そんなあ）

朔は弓阿のため押しに一瞬潰れつつも、涙目でキッと紫生の方を睨む。

しかし紫生は『鬼ババがあ～』などと間に皺を寄せ、うなされているようだ。

よつて、犯行は無理。

「誰が鬼ババじゃ、くぬつ！」

弓阿が紫生にリンチをしている脇で、朔はさくらにかぶりつぐ。

「嘘だ、ぜえつたいて嘘だ

「やだ、朔ちゃんつ」

すりすりと匂いつけに忙しい朔の脇で、弓阿が突然に拍手を打つた。

「奈々じや、間違いない。さくら……彼奴と会つたんだな？」

「ええ。昨夜、浜辺で彼に会つたんですよ

「なつ」

ショック再び。むくれる朔を、弓阿が小突い（殴つた）た。

「お前は少し黙つとれ」

さくらは、その先を言わなかつた。なにもなかつたかのように平静を裝う。

……が、しかしそれも、隠し事が苦手なさくらにとっては逆効果になつてしまつのだ。

朔の一言で脆くも崩れ去つてしまつ。

（キスされた挙げ句、告白されたなんて言えないわよ。思い出すだけでも、あの時はどうにかなつてたんだわ！）

「まーさか、アイツとキスしたとか……ないよな？」

「したんじやない！ されたのよつ！ それも無理やりねつ」

（ダメじやん……）れじや、全然いい訳にしか聞こえないしつ…）

チラと伺い見てみるが、朔は依然むくれたまま。

延長戦突入かと思われたその時。

ジト目の朔は大仰に溜息すると、きつくさくらを抱き締めた。

「とにかく、どこも無事なんだな？ あんなクソガキに誰がやるかよ。さくらは俺だけのだ」

「朔……」

人目もはばからず濃厚なキスをしてから、朔はさくらの耳元に、小声で囁いた。すると、ぽんつ、とさくらの顔が赤くなり、朦々と湯気が上がる。（なにを言ったのかは、『想像にお任せします』）

「さ、さくら……大事ないか？」

夫婦喧嘩が終了したのを見計らって、弓阿が恐々と声をかけた。

「は、い……」

「これを話せねばならん口が来るとはな。聞いておくれ、鬼族と…今となつては、亡んだ人族の話……千年前の悲劇を」悲しげに弓阿の表情が翳つたのを見て、さくらは小さく問い合わせる。

「千年前……？ なにがあつたの？」

じくり、とさくらの喉が上下した。

「あれは……」

ゆっくりと一つずつ噛みしめるように、弓阿は語り始めた。

千年前の、悲劇の全貌を。

ウサギ地獄？（後書き）

いつも、こんばんわ。維月十夜です。

この寒波の中、皆様はいかがお過ごしでしょうか？

この寒波の中、自宅が水害に遭つてしまい引っ越しに追われる毎日。

『ああ、無情』とはこの事ですよね。

さて、本題。なんだか今回の話はあつけなかつたですよ。

導入部なので、仕方ないかな…とほ。

次回は奈との出生の謎に迫ります！（つづけ期待。）ついで、どこの番

組ですか！？ 笑）

Old story(前書き)

千年前の悲劇　　なんとその発端がさくらの前世であり、刹靈の妻であった少女・さくらだつた。
新たな真実に、さくらたちは……！？
異種族ラブファンタジー、いよいよ佳境へ！

「あれは……今より千年前、七つ国の一つ胡国・そしてこの、梁呂にも人間はいたのじゃ。その頃、まだ分かれていなかつた鬼族は、人間と友好を築きながら共生しておつた」

「なのに、それが崩れた」

相槌を打つたさくらにこくんと頷きながら、弓阿は話を続ける。「だが、そこで大きな、とてつもない事件が起こつた。のう、刹霞……そこにあるのだろ？ 出てきや」

静かに障子の戸が引かれて、青い狩衣を纏つた男が、顔を出した。

「奈与！？」

同時に叫ぶ、朔とさくら。

そう、この男・刹霞こそ、奈与の父であり、千年前の悲劇の引き金となつた人物であつた。

「あとは俺が引き継ぐとしよう、よいか？」弓阿よ

「……よからう」

刹霞は、さくらをまつ直ぐに見詰め、どこか懐かしそうに田元を和ませた。

「本当に、そつくりなんだな」

「なにが、です？」

警戒でピリピリしている朔の背中に隠れながら、さくらはおずおずと尋ねる。

奈与に、似すぎていて怖いのだ。

刹霞はなにも答えずに、特に悪びれた風もなく静かに口を開いた。

「今より、千年前の話だ」

千年前、鬼族と人族は互いに友好を築きつつ、穏やかに共生していた。

交易は盛んに行われ、この時には、どこにも戦乱の影など見受けら

れなかつた。

そう、二人の男女が出逢つまでは。

『さくらや、薬草を採つてきておくれ』

小屋の入り口に掛かる暖簾を上げて、老齢の女が顔を出した。

『母さま！ ダメよ寝ていなくてはつ。薬草なら採つてきてあげるから、大人しく寝ていて頂戴ね？』

さくらと呼ばれた少女は、患つている母を床とに戻すと、棚から手籠を取り出す。

『すまないねえ、嫁入り前のお前に、夜道を行かせるなんて』

『母さま……』

嘆き、涙する母に、少女・さくらはにこりとする。

彼女は、一月後に婚礼を控えているが、それに乗り気ではなかつたのだ。

尤も、今それを口に出すことはしなかつたが。

『あたしは平氣よ、母さまのためだもの。行つてくるね』

「彼女の母親は、肺に死病を患つておつた。甲斐甲斐しい世話も虚しく、それから間もなくして母親は死んだ」

「それと、千年前の悲劇とやらと、どう関係あるんだよ」

むう、と眉間に皺を寄せる朔に、刹靈は『まあ聞け』と頭を搔く。

「始まりは、これからだ」

肺病で死んだ母親のお陰で、村人は誰一人、彼女の許嫁を除いては近付こうとはせず。

しかし彼女は強い娘で、決して人前で涙を見せなかつた。

『母さま……あたし、もういやです』

そんな彼女でも夜に小屋で一人になつた時には、どうしようもなくやりきれなくなるのだった。

『どうして、どうして……』

ふと、膝を抱えて座り込もうとした彼女の耳が、笛の音を捉えた。

『だれ……？』

彼女は訝りもせずに、音のする方へと、フランフランと歩いていく。そして、彼女は出逢ったのだ。

見慣れない身なりだが、恐ろしいほど美貌の男に。

『笛の音、あなたなの？』

さくらは、しばらく間をおいて男に話しかける。

『そうだ。なぜ……泣いている？』

さくらは、見知らぬ彼の美貌に見惚れて、一瞬時を忘れそうになつた。

『なぜ、泣いていると聞いたのだ』

ハツ、と一瞬怯えた素振りをした彼女に、男は目元を和ませて囁く。

『恐れなくてよい、なにも取つて喰うわけではないからな。お前、名は？』

尋ねられて我に返つたのか、さくらは男を指さしてから、毅然と言ひ放つた。

『人に名を聞くときは、まず自分から名乗りなさいな！』

今更になつて警戒し始めた少女に、男は面食らつたような顔をしながら、豪快に笑つた。

『面白いヤツだなお前、気に入つたぞ。俺は鬼族の次期長になる、刹霞という』

『あたしは、さくらです』

『そつか、さくら……して、どうして泣いていたんだ？ 差し支えがなければ、聞いてもいいか？』

類い希な美貌で微笑まれて、さくらはまるで、朝焼けのように赤くなつてしまつた。

さくらは話した。母が肺の病で死んでから、村人に差別を受けるようになった事、そして、好きでもない男の元へ嫁ぐ事を。

『刹霞さま、あたし……もう誰も信じられなくなりそうで、怖い』

『せうか、母御が肺病を……そなたも、辛かつたな。苦しかつたらうに』

ぽろぽろと涙が月明かりに反射し、少女の清楚な美しさを際立たせる。

『刹霞さま…優しいのね、見ず知らずの人間のあたしに』

『見ず知らずではないぞ？ 僕はずつと、お前を知つていたよ』

『え？』

涙で潤んだ瞳をしばたかせる彼女に、刹霞は柔らかく微笑んだ。

『いつも見ていた。バレはしないかと、ハラハラしながらな。一生懸命に、母親を世話していたのも』

『じゃあ、夜毎に聞こえていた笛の音は』

さくらは、じしがしと涙を拭つて、刹霞を見あげた。

『俺は、見ていただけで、なにもしてやれなかつた。だからせめて……心安らげようと思つた。迷惑、だつたか？』

眉尻を下げる困った顔をした刹霞に、さくらはフルフルと華奢な首を振つて『ありがと』と笑みを咲かせた。

「美しかつた……」

ほわん、と夢見るようになつた刹霞に、朔がすかさずツッコミを入れる。

「てゆーか、それストーカーだろ！」（怒）

「口ラ口ラ、朔ちゃんたら……大人しくして」

（でもなあ……なんかへんな感じ。同じ名前なんだもん）

逐一反応がつるさい朔を抱きすくめてやりながら、さくらは密かに溜息。

「すみません、話……続けてください」

「ぐ、苦し……さくら」

うむ、と頷いて、刹霞は再び口を開いた。

それから、さくらと刹霞は夜毎に逢つようになり、程なくして深

い仲へとなつていつた。

『刹霞さま……？』

さくらは小走りに林の中を彷徨い、やがてすぐに愛しい男の姿を見つける。

『ああ、こいだ……さくら』

『逢いたかつたつ……ああ刹霞さま』

さくらは、林の最奥にある桜の古木に寄りかかっていた刹霞を見つけ、思いきり腕の中へと飛び込んだ。刹霞も、飛び込んできたさくらをしつかりと抱き返す。

『大丈夫なのか？ もう尾行けられたりしないか？』

『ええ平気。もう婚約は切りましたから……それに、あたしには刹霞さまだけ』

さくらが許嫁との結婚をなくし、それからといつもの、相手の男がしつこく付きまといなかなか離れなかつたのだ。

しかもその男は、引き返すフリをして、二人の情事を盗み見ては嫉妬していた。

『あつ……ん、刹霞、さまあ』

『……うつ』

熱い舌が首筋を這い、さくらはビクリと背を震わせる。

男の手に、力が入る。木の樹皮に食い込んでいた爪が、ミシリと皮を抉つた。

逆恨みは怨嗟へ。男は、自らの妻になる筈だった女を奪つた、兎族の男への怨嗟を募らせていつた。

『やめて！ 離して頂戴つ』

『また、あの化生けじょうの所へ行くのか！？ 行かせない、行かせるものか！』

仕事から戻つた彼女を待つていたのは、勝手に上がり込んでいた元許嫁だつた。

『オレの物だ、他へやつたりはしないつ！』

男は、さくらを殴り飛ばすと、背中を踏みつけて憎悪に歪んだ顔で
嗤つ。

『あんたなんか……あんたなんか、あの人の足元にも及ばない……』
さくらは打たれた背中を庇いつつ、元許嫁を睨みすえた。

『なんだ……その目。なんとでも言え、オレはお前さえいればいい』
『クズよクズ！ 触らないでよッ』

さくらは、元許嫁を突きとばすと、挫いた足を引きずつて小屋から
逃げ出した。

だが男も黙つてはいない。ねじり上げるほど強く彼女の腕を掴むと、
無理やり自分の方へと向き直らせる。

『化生がなぜ美しいか知つているか！？ 人を惑わせ、喰らうため
だつ、大方、あの男もそう言つ肚だ』

ぱちん、と夜の張りつめた大気が裂けた。さくらが、男の頬を平手
で打ち据えたからだ。

その時彼女を突き動かしたのは、底知れぬ憎悪だった。

『最低の人間ね、汚らわしい……一度とあたしの前に現れないでっ』

『くつ くく、くくく……』

男は、喉の底で低く嗤つて、ゆらりと闇に溶ける。

そしてその通りに、一度とさくらの前に現れなかつた。

逢瀬を重ねるうち、やがて

もり、二人は結ばれた。

『刹霞さま、あの……あの、ね？』

さくらの小屋の中、刹霞は炉端で寝そべつている。

『どうした、やけに嬉しそうだな』

からかうような夫の声に、彼女はしきりに小さく頷いた。

『なんだ、隠してないで言つてみる』

刹霞はのろのろと起き上がり、新妻の背中を愛おしげに抱き締めて

さくらは刹霞の子を身籠

『ややが……ややじが、できたの』

微笑う。

『な！？ なにつ』

「と言つことは、奥さんは人間？ ジヤあ、奈^{あの}与^よはハーフなんだ」「そういうことになる。【あわいの者】といってな、人よりは長命だが、兎族よりは劣る存在だ」

乗り出したさくらに、刹霞は静かに、淡々と話す。

（そつか、だからあの子……そつくりなあたしをお母さんと思つて！？）

さくらは唐突に、なぜ奈^よが、自分に懐いたのかを理解した。

「奈^よが生まれてまもなく、人族と兎族の間に亀裂が生じた。彼女を奪つた俺を恨んだ元許嫁の男が、兎族の村を焼いたのが始まりで長い激戦の末に兎族が勝利し、七つ国の人族はすべて死に絶えた」

「奈^よは、あの子は？」

さくらの問いかけに刹霞は、ふと悲しげに遠くを見つめるようする。

その目が泣いているようで、さくらは胸元で握りしめた手を、色が変わるほどにきつく握りしめた。

「無傷だった、俺も… アイツも。なぜだか分かるか？ 妻が、さくらが庇つてくれたからだ」

「そ、んな……」

赤々と燃える戦火は天地を焦がし、あたりは勝ち鬨の声で満ちた。

『刹霞さま、この子を連れて早く逃げて！ ここはあたしが食い止めますっ』

『ああっ、すまん……すぐ戻る！』

熱気に煽られる中、さくらは我が子を夫に託し、兎族の村の火消しに立ち回っていた。

『母さま、置いてっちゃいやだ！ 父さま、母さまを置いていかないでっ』

刹霞に抱きあげられた幼い奈々が、母に向けて、懸命に小さなもみじ手を伸ばして訴える。

『奈々』、母をますぐ戻るから…父をまの言ひと、ちゃんと聞くのよ?』

『イヤだイヤだ! 母さま行かないで!』

もみじ手を振り回して奈々は地団駄を踏むが、母は困った顔をするばかりだ。

『ほら、いい子だから…ね?』

【さ、早く行つて…】

そこまで言いかけて、さくらは叫んだ。

危ない

と。

空気を裂く火薬の破裂音。

血が、勢いよく飛沫いた。

紅く赫く、花びらのように。

鷺の鎌が、さくらを貫いたのだ。

『夫と息子を庇つたか……化生なんか庇うなんぞ、気が知れねえなあ。つくづくバカな女だよ、お前は』

『つ母さま!? 母さましつかりしてつ』

『るせえガキ!』

『つつつ…』

元許嫁は奈々を蹴飛ばすと、脇腹を押されて蹲るさくらの髪を、鷺掴みにして掴みあげた。

『よくも俺を捨てやがったなあ、このアバズレ! この際だ、夫と息子の前で殺してやろうか』

さくらは昂然と元許嫁を睨むと、隙をついて思いきり手に噛みつく。

『あや…?』

男は、手を押されて蹲る。

『殺させるのですか! 汚らしい手で、二人に触るなつ』

瞬間、銃声が轟き 男はぐらりと揺れて地面に転げた。

撃つたのは刹霞で、元許嫁が、人族の最後の一人だったようだ。

人族の鬨の声は、もう聞こえてこない。

閑地には、黒焦げた人間のなれの果てが多く転がっている。

『母さまっ、母さま、しつかりして！』

奈与は、幼顔を涙で濡らして母の傍に寄り添い、何度も頬寄せる。

『奈……』

傷だらけの白い手が、息子の頬を伝う涙を、弱々しく拭つた。

『氣を確かに持て！ いま傷を塞いでやるつ』

『……だめ、いいの、よ……』

刹霞に抱えられたのが分かり、さくらは、そろそろと手を彼の頬に這わせた。

その手が、細かに震えている。

『だめだつ！ このままで死ぬぞつ』

『ごめんな、せい……あたしの、せいね？ 同じ命なのに、たくさん死んだわ』

傷を塞ごうとした刹霞の手を握りしめて、さくらは弱々しく微笑んだ。

『同じよ、みんな……あなたも、同じ命……なの』

『俺は許さないつ、お前を傷つけた人間を、いや、人間すべてを呪う…』

『そんな悲しいこと……言わない、で？』

『さくら……』

『刹霞、さま……あたしも、人間よ？ お願……い、嫌わないで』

『誰がお前を嫌おうか！ セくら！』

『あたしは……人と、して……あなたに、出逢つて、あなたより先に』

力なく、さくらの手が地面を叩いた。

『さく、ら？ さくら つ……』

「そして、俺は奈与を連れて梁山……七つ国を出、鬼族は一ついこ

分かれた、とう訳だ」

噎び泣くさくらを抱き締めながら、朔も小刻みに震えていた。

「鬼族にそんな過去があつたなんて…」

「あの子の気持ち……大事な人を、傍で看取る痛み、あたしにはよく分かる」「

ぎり、と握りしめる手に力を込めるさくら。

「俺は悟つた……4年前、琥珀アイツが言つた言葉が正しかつたのだ。我らも、人間も…もうなにも失つてはならぬとな」

刹霞は溜息混じりに言うと、悲しげに深く頭垂れた。

「奈与が【あわいの者】だつたなんて。全く気づかなかつた…けど、それとこれは話が違う。俺はさくらを守りたい」

「刹霞さん」

「…ん、なんだね？」

さくらにまつ直ぐに見つめられて、刹霞は、居心地悪そうに膝をもじもじさせた。

「あたし、昨夜奈与に会つたんです。なんて言つた…ひどく、寂しそうな目をしていたわ」

(……襲われたけどね)

「なんの巡り合わせなのか……声も、姿形も一緒とはな」悲痛に表情を歪める刹霞に、弓阿が溜息する。

「そうさのう、昨夜…さくらの星宿 星廻りを見たんじゃが、まさしく彼女の生まれ変わりと出あつた。これで話は繋がつたな」一同が息を詰めたのが、さくらにはしっかりと分かつた。

Old story(後書き)

こんばんわ、じ無沙汰しておつまました維月十夜です。
なかなか、パソコンに向かう機会ができずに鬱々とした日々を送って
おりました(笑)

面影（前書き）

『千年前の悲劇』その発端である奈々が原因で、再び二つの鬼族間に波紋が広がっている。

刹霞は、その乱を止めるべくして朔とさくらの後を追つたのだ。乱を止める手段はただ一つ、奈々を殺すことだ。

だが、刹霞は悩んでいた。本当にその他に方法はないか、と。

「なにも失う訳にいかないのに……あの子は死んでもいいのー?」
悩み抜いた末に、さくらは刹霞に訴えた。

2つの鬼族間で、再び波紋が拡がりつつある。奈与がその発端であり、刹霞はその乱を止めるべくして、朔とさくらの後を追つたのだ

といつ。

「あいつをあんな風にしたのは、俺の責なのだ……だからせめて、俺の手で屠ろうと思つ」「うう……

「でも……そんなのって、ないとと思う。キレイ事かも知れないけど、誰かが誰かの命を奪う権利なんてないよ!」
ぱしん、と勢いよく障子戸が鳴る。

すっくと立ちあがると、さくらは憤然と部屋を出て行つてしまつた。

「さくら……」

ぽつりと取り残された朔は、刹霞と、さくらが出て行つてしまつた方を見比べてオロオロする。

彼自身もどう動いていいか分からずに、困つてているのだ。

「朔殿……すまない、彼女を怒らせるつもりはなかつたんだ。一人には、いやな思いばかりさせる」

心底すまなそうな刹霞に、朔はゆるゆると首を振る。

「いや、俺もあなたと同じ事を考えてた……他人の事は言えないと」「あいつを殺したくない……だが、やむを得ん。彼女に会つて、変わりはしないかと…切に願つとるよ」

朝方の海辺を、さくらはザクザクと歩調荒く進む。

「どうこうつもりかしらつ、自分の息子なのに!」
さくらは、きーつ！ と髪を束ねていたリボンを、力任せにほどいて放り投げた。

朝風の中に、色の薄いさくらの髪が、光を通してサラサラと舞う。

「あれじやあ、あの子が可哀相じやな……」
さくらはそこまで言つて、言葉を途切らせた。

驚きに、その目は大きく見開いている。

砂の上に丸まつて、奈与を見つけたのだ。

(なにしてるのかしら、生きてるのかな?)

巨大な体躯を投げ出している脇に、さくらはやうと屈む。

どうしてだろ?。

以前はあんなに、奈与が恐ろしかったのに……今はどうしたか、彼に触れてあげたいと思っている。

艶々とした毛並みは朝焼けを映して、紫陽花色に透けて目を惹いた。
(不思議な色……きれい。触つても、怒らないかしら? 寝てるみたいだし)

そつと手を伸ばしかけたその時。

「なにを、している?」

静かな声に問われて、さくらはウサギのようになに飛び上がってしまった。

「お、起きたのね……」

「まあな……それくらい分かる、さくらの気配がしたからな。どうした、朔は一緒ではないのか?」

大型犬よりも大きな体をぶるん、と震わせてから、奈与は前足を突つ張り豪快な欠伸をする。

「うん。ちょっと成り行きで置いて来ちゃつた」

「……そうか……」

朝の穏やかな時間を、潮騒が旋律を奏でる。さくらも座つたまま、縦に伸びをした。

「ねえ」

「なんだ?」

「撫でてもいい?」

目を細めて毛繕いをしている、彼の頭にさくらはそつと触れてみる。

「……好きにしろ」

「うん……あつたかい。あつたかいのね、あなた…お口さまの匂いがする」

さくらは奈々の頭を包み込むように抱いて、懐かしそうに顔を細めた。

「なあ、さくらの母上は……どんな人だつたんだ?」

奈々は、愛嬌たっぷりにさくらの膝に前足を置くと、身を乗り出した。

さくらは目を瞑る。

今でも瞼の裏に浮かぶのは、まるで仙境のような里で暮らしていた、人口こそ少ないが賑やかな人たちの笑顔。

そして、頼りない父の代わりに厳しかった母。

「厳しい人だつたわ……でもそれだけじゃなくて、ちゃんと皆を気遣える、優しい人でもあつたの」

「それを、俺たちが壊した……たゞ憎いだらへ、理不尽だと悔やんだろう」

奈々は少し距離を取ると、真っ直ぐにさくらを見つめる。

「恨んでないつて言えば嘘になるけど、許せる事じやないけど……あなたも、色々あつたのね?」

そつと、けれどしっかりと抱き締められた奈々は、震えながらその先を紡ぎ出す。

「なぜ、そんな穏やかな顔ができる? 俺を恨んでいるのに」「似てるから」

即答したさくら、奈々は、ぱちんと一つ瞳田をした。

「え? なにが…」

「目よ……あなたの目、すぐ寂しつて言つてる。孤独の目、あたしも、よく分かる」

「俺の母は人間だった。いつもオレと、父上の傍で笑つていて……ただただ、幸せだったのを覚えてる」

「ええ……お父さん、刹靈さんから話は聞いてるわ。あなた、口が

悪くて粗暴だけど、根っからの悪つて感じじゃなかつたもんね？」

「母上と、そつくりだな。名前も顔も……けど、やつぱりなにかが違つ。そこが、好きなの…かも知れない」

さくらの喉元に鼻面を寄せながら、奈与は涙声で言つた。そして、さくらは悟る。

この子の心は、割れている。

喪失したものの存在が大きすぎて。

この気持ちを、なんて言つだろ？

本当の母親じゃないのに、放つとけない。

傍にしてあげたい。

未来を変えてあげたい。

「泣かないで？ ね？ 泣かないの。ねえ奈与……あたしが、お母さんになつてあげる。よく、今まで我慢したね？」

声を上げて泣きじやくる奈与をさつと包みながら、さくらは彼の滑らかな青毛を撫で続けた。

「さくらが、オレの母さんに？ ホント？」

一頃り泣いたあと、奈与は鼻を啜つてからさくらに問うた。
ひた、と真つ直ぐに、澄んだ色違いの双眸に見つめられて、さくらは思ひきり微笑み返す。

「そうよ。今からあたしが、奈与のお母さん」

幻のように兎の形が透けて、人間の姿に戻つた奈与は、改めてさくらに抱きついた。

「朔、朔はあるか！？」

突如、客間の障子が勢いよく引かれた。

「んあ？」

青畠に寝そべっていた朔は、不機嫌モード全開でふり返つた。

昼寝中だったのだ。

「朔つ、大変じや！」

語氣荒く部屋に飛び込んできた弓阿に、朔は幾許か後ずさる。

「来い！　さくらが、さくらがあ　」

弓阿は、今しがた見てきた状況を朔の耳元で小声で伝えた。

あまりのショックに、朔は総毛立つ。

「は、はあ！？」

屋敷が揺れた。（たわんだ、とも言ひつ）

面影（後書き）

いつも、維月です。
書いているうちに、奈々が段々幼稚化してしまいました。
なっち、ごめんなさい（汗）

それぞれの想い（前書き）

朔とやくらに亀裂が！？

そして、千年前の悲劇が終わる！

それぞれの想い

「やくら、やくらー」

細かな砂の上を、華奢な素足がまるづ。
子犬のように懐っこく纏わりつく少年を抱き締めて、やくらはやん
わりと微笑んだ。

「どこまで行つてたの？」

腕いっぱいに果物を抱えた奈々は『お土産』と元気よく笑つて、さ
くらに甘え付く。

奈々は子供だ。

体の大きいだけの、子供。

いまの彼は、『あの』奈々とは思えないほど安らいだ、優しい顔を
している。

刹霞によると、それが彼本来の性状だと言つていた。

「こんなにたくさん、頑張ったのね……一緒に食べようか」

「ホントか！」

嬉しそうに笑う横顔を見ながら、やくらは密かに杞憂する。
(短時間で、どこまで育て直せるかな……)

そんな二人を、^{キロメートル}数糠離れた樹の天辺から見る影があつた。

朔と弓阿だ。

「どういう事じや？　あ奴、奈々なのか？　随分と面変わりして…

…

「うーん……あいつに違いないけども、どうかしちまつたのかな？」
つんつんと、脳天をつついてみせる朔を睨めて、弓阿は小さく咳払
いする。

「『おれ朔！　それにしても……やくら、幸せそうに見えぬか？』

不機嫌に憮然とする朔を揺らすことを、弓阿は言つてよしす。

「はん！ 幸せそつだつて？」

「母子みたいだ、微笑ましいの」

にこにことする弓阿の横で、朔は一人をチラと盗み見た。一つの果実を、分け合つて食べる様子はとても幸せそうで。（なんだよ……あんな顔、最近俺だつて見たことないのに… なんで奈与だけに）

朔は胸が痛んだ。

胸が痛いのか、それとも別の場所なのか……本当にとのじるは分からぬが、なにかが蝕まれていくようだつた。

帰らないさくらを、見つけたらすぐ連れて帰るつもりだつた……けど。

やめた。

体が、勝手に動いた。

「帰ろ」

弓阿は『ふぞけが過ぎた』といつ顔をしてから、そつと朔の後に続いた。

「よ…よいのか？ サクラは……」

しどりもどろの弓阿に、朔は沈黙。

朔は、なにも言わない。

いや、なにを言えばいいのか分からなかつた。

「さくら、大好きだよ

「嬉しい……」

（なんだろう……お母さんつて、こんな気持ちなのかな？）

甘える奈与を抱き締めたまま座り、さくらは彼の細い髪を、何度も梳いてやる。

幸せそうに田を細める奈与、さくらはその表情にどこか悲しげな笑みを浮かべた。

暮れゆく夕陽が、二人を橙色に染めあげていく。

その中で、海辺で拾つた流木がパチパチと爆ぜて、不思議な青緑の焰を上げた。

さくらりが作った橡の実の団子を食べながら、奈々はぽつつと呟いた。

「こ」のまま、ずっといられるといのに

やがて訪れる別れを、見越していいのだ。

この時間が、あまり長くないといふことを。

「傍にして、さくら……一人にしないで」

（この子は一人、寂しい幼年時代を過ごしたのね……でも、あたしには琥珀がいた）

奈々の端正な目尻から、涙が幾筋もこぼれ落ちては散つていく。

「うん、泣かないのよ、傍にいるわ？」ずっと一緒に

「でも、さくらには朔が……」

「なにも言わないで……いい子、もうお休み？」

「怖い、怖いよ……」

膝枕に伏した奈々を宥めながら、さくらは子守歌を歌い始めた。ゆっくりと、透明な声で包むように。

「大丈夫、目を閉じて」

幼い頃、琥珀が自分してくれたのを遠く、思い出しながら。陽が、暮れていく。

寄り添う影が、重なつてゆく。

夕闇は、しつと母子を呑み込んでいった。

「おー刹靄！ 僕アもう我慢できねえぞ！」

「わ、若様あ……落ちついてくださいっ」

袖にしがみつく紫生に歯噛みして、朔は刹靄に詰め寄る。

「そうじゃ朔！ 奈々さん更生できれば疋は止まる、我慢しておくれつ」

袖を振りかざして仲裁に入った阿向に、朔は溜めこんでいた激情を露わにした。

「これでもう3日戻つてこない！ どうして、さくらがこんな事し

なくちやいけないんだつ

ばし、と朔の頬が鳴つた。

『阿ガその頬を、打ちすえたからだ。

「泣き言を云うでない！ さくら……あの子とて、辛くない訳なか

るうが！ だから……そう云うのはおよし」

彼女の激に、一回は目的を見失つていた自らを恥じた。

「ねえ…お父さんの所に行こつか？」

さくらは、身繕いしている奈与の背中に云つた。

「父上の？」

こくんと頷いて、さくらは続ける。

「まだ、人間が憎い？ 人間は、滅びた方がいい？」

「なぜ？」

「あなたが止まれば、間違つた方向に進もうとしている鬼族…つづ
ん、この世界全部が助かるの」

幼い子供に言い含めるように、さくらはゆっくつと奈与に云つた。

「オレは、さくらが好き。だから、人間も…同じ」

「いい子、奈与…いい子ね」

自分より頭2つ大きな奈与を抱き締めながら、さくらは泣く。

「泣かないで？ 泣かれたら、困つてしまつよ」

悲しい涙じやない。

これは嬉しい涙。

オロオロする奈与に謝つて、さくらは涙の痕を『じご』こと拭つた。

「ごめんね、ごめん……本当に嬉しくつて」

「笑つて？ さくら」

柔軟に微笑んだ奈与に、さくらは『よし』と拍手を打つ。

「行こう、お父さんの所に」

「うん、オレが行けば…さくらも、みんなが助かるなら」

3日ぶりに戻ったさくらが、すっかり面変わりして柔和になつた奈
与を連れているのを見て、城中・城下の者も一様に驚きを隠せなか
つた。

「さ、さくら……それに！？」

朔、奈与とニアミス……そして、朔が一方的に火花を散らしている。

「た、ただいま……朔ちゃん。大丈夫？」

「さくらー！　さくら、さくら……つたく、心配させやがつて。命
が幾つあつても足りねえよ」

「……！」

強く抱擁をする一人に、奈与は瞬時に硬直してしまつた。
その表情が、見る間に曇つていいく。

例えるなら、叱られて耳と尻尾を垂らした子犬のようだ、といふ
のがよく当てはまるかも知れない。

「朔ちゃん、ちょっとごめん」

さくらは、所在なげに田線を泳がせている奈与に駆け寄ると、や
んわりと抱き締めてやつた。

それに朔は勿論のこと、弓阿、刹霞までもが茫然と田を張つた。

「怖くないのよ、安心して？　あたしが傍にいるからね」

「さくら……うん」

スリスリと甘える奈与に、朔はやつぱりお囁。

「くおのー、エロガキめえええ～」

あまりの嫉妬に、拳をふるわせる朔。

「待て朔、早合点するでない……見てみり、あの奈与が。あれでは
稚い子兎のようではないか」

弓阿は心底驚いたのか、手近にいた子兎姿の紫生を、思いきりブチ
ブチと鳴っている。

「わーーん、イジメだあ」

「なんつーか、うん…お前も散々だな。人のことは言えねえけど」

朔が腐る紫生を宥めているうちに、さくらと奈与は、和氣藹々とし

ていた。

だが……それを見た朔は一瞬にして表情を凍らせた。

ブチツ ブチブチツ

朔も紫生を驚かす。（ハツ当たり）

「若様までえ！ ヒドすぎですう～～つ」

朔は半ベソをかいている紫生を連れ、怒り心頭で館の四足門を出ようとしていた。

「わ つ、まだ死にたくないよおーつ」

「行くぞ紫生、大人しくしろ！」

「あ、ちょっと待つてよー。朔ちゃん……怒らないで、話を聞いて欲しいの」

「話ー？ 「イツと、よひしひやつてたつてヤツかつ、もう知ってるよー！」

止めるさくらの手をはたき飛ばし、怒鳴る朔。
さくらは一瞬だけ深く傷ついた顔をして、そつと、ゆっくりと肩に触れた手を離した。

「違うの、あたしがこの子を連れて戻ったのは……皆に大事な話があるからよ。聞いて、皆、勿論朔ちゃんも、ね？」

語尾が、掠れて震えた。

兎族の悲劇が、終わるのだ。

この子 当事者・奈引の一言だ。

「さ、奈引……皆に伝えるのよ」

さくらが強張った顔をなんとか解して促すと、奈引はしっかりと頷き、場に集まっている者すべてを見わたして、よく通る声で言った。
「やつと分かった……彼女に会つて分かった。人間でも、すべてが悪い訳じやないのが。だからオレはやめようと思つ。彼女を守りたいから、もうなにも恨まない……父上、いまからでも遅くはないだろうか？ 間違つた方向へ進みかけている『もう一つの兎族』を止

めたいんです」

刹霞はやや暫く沈黙した後、すつと階の上段から立ちあがった。その顔には、決意が滲み出ている。

「よく言つた奈引、それでこそ我が息子だ。共に行つてくれるか」「はい」

応える声は濶みなく。

研ぎ澄まされた眼差しには、一毫の曇りもない。

「さくら殿には誠に迷惑をかけた、すまない。憎まれ役を押しつけて、夫婦の絆さえ危うくさせるところだった」

「いいえ、あたしにしかできない役だったんですけど……仕方ないですよ」

悲しげな笑みを浮かべるさくらに、朔は渋面を作つてそっぽを向いた。

「こまち、行つてしまつの？」

さくらは刹霞と奈引の傍に小走りにまわると、奈引の手を握る。

「うん……大丈夫だよ、母さん。すぐ帰つてくるからね」

眉尻を下げて柔軟に微笑んだ息子を、さくらは強く抱き締めた。

「必ず戻つてきてね、無事を祈つてるわ？」

「うん」

「さ、行つて……刹霞さんも、」武運を

「さくら殿にはなんと礼をすればよいかな……」なんにも、鬼族の方

向性を変えてくれた。いや、もう礼だけでは足りぬな」

刹霞は懐を探ると、螺鈿細工の小柄ひらかをさくらに差し出してきた。

「え？ 刹霞さん……」

「護刀まもじがたなだ、俺の命を灼きつけておいた。滅多なことでは折れぬし、

そなたの守りとして働こう」

刹霞はにこりとすると、青天を仰ぐかのようにして手を伸ばす。

「

また、耳慣れない言葉だった。

おそらく刹霞は、鬼族の言葉で術式をしているのだろう。

ひどく、耳鳴りが鼓膜を揺さぶる。

灼け串で、頭の中をかき回されるような感覚がした。
天地が歪み、太陽は黒く染まる。

そつやつて空間に穴を開けるのか。

青天にぽつかりと空いた筋みちを見て、さくらは息をのむ。
それは、どこかブラック・ホールを思わせた。
青い稻妻に変じた二人は、まるで吸いこまれるかのように、筋に消
えていったのだった。

それぞれの想い（後書き）

どうも、維月です。

『Rabbitパニック』新章のお届けに上がりました。

今回は、困ったさんな奈与のせいで、さくらと朔がやばい状況になります。

まさか、そのまま離婚だつたりして……（^_^）

轟動する闇（前書き）

兎族・千年前の悲劇の原因が自分であることを知ったさくらは、朔、弓阿と共に戦うことを決意する！

だがその頃、梁垣にはもう一つの兎族の軍勢が潜んでいた！？

異界ラブコメ（え…？）好評連載中！

兎族・西祖谷本部。

一向に戻らぬ、現総領と元総領に痺れを切らせた一部の兎族は、仮朝：いや偽王を立てていた。

偽王 刹靄が、祖谷全域を治めていた頃は、忠実な部下として側近を務めた男。
彼の弟、蘭渢らんけいだつた。

「俺は兄上とは違う。人間の女なんぞを娶つたりして……出来こそいいが、半端者を息子に持つている。我らの行く末、それでいいと思つか？」

「しかし、奈与様は比類なき力をお持ちです。総領には充分すぎるかと」

まごついて応える部下に、蘭渢は片眉を上げて驚いた顔をして見せてから、ニヤリと嘲笑の形に口を歪めた。

「『あわいの者』などに総領は務まらん……目障りな奴よ、いまに始末してくれる」

「蘭渢様っ！ なんと愚かしいことを、あなたは篡奪をなさるおつもりか！ 爺やは悲しゅうござりますぞっ」

目尻をつり上げて怒る老爺に、蘭渢はチラともせず、急そうにまるで欠伸でもするかのように言つた。

「そつか……それでは盛大に悲しんでもらおう。彼の世でなー。」

「ゴッ……！」

渴いた白磁の床に、血が飛沫く。

それに合わせて、転々（ころころ）と老爺の首が転がつた。

その様は、まるで声なき悲鳴をあげているよう。

女官らが廻りで布を裂く悲鳴を上げて、一人、また一人と裏へと逃

げていく。

血を浴びた蘭渓は、口許に受けた返り血をヌラリと舐め取ると、帶びていた刀を抜き、事切れた老爺の背中に刃を突き立てた。

「この際だ。刹靄も、あの半端者もまとめて始末する……」

あまりの驚異に顔を見合させていた他の血縁者達は、一様に青褪めた。

「し、しかし……蘭渓殿、それでは」

それでは、篡奪だと。

言おうとしたが、それは叶わず。

「それでは……なんだ？」

ギッと怨嗟の籠もつた瞳で睨み据えられ、集団は一気に身を竦ませる。

「いや……なにも」

「ならばよい。兵を擧げる……皆の者、我に続け、鬼族の新時代を共に切り開こうぞ！」

「ははあ　　っ！」

集団の中心に立つ蘭渓に、一同は伏礼した。

「なあ、さくら……いいだろ？」「

「ダメ、ダメよ朔ちゃん……やあん」

奈与が去つてから、こじつと（本当に）態度を変えた朔。朔は、一面に咲き誇る花園の中で、さくらを襲つていた。

「戻つてこないかと思った……辛かったんだぞ？ 分かるか？」「

「やつ……分かつてるとけば、苦しいよ」

まるで油汚れのように、しつこくじりついてくる朔を振り払いながら、さくらは羞恥に顔を染めた。

執拗に唇を求めてくる朔のせいで、さくらは切れぎれにしか応えられない。

「あたし達、夫婦よ？ ちゃんと分かつてるわ」

「でも寂しかった……その分、ちゃんと埋め合わせようかな？」

「あ、ちょっと朔ちやん

嘗みに忙しい一人は、妨害者に気づいていなかつた。

(おやまあ……) こんな所におつたのか。どうりで屋敷で見かけなんだ)

弓阿、だつた。

「つと、静かに」

ビクリ、と朔が動きを止める。

「どうしたの?」

急に起きあがつた朔に、さくらは小首を傾げた。

「てめえ……なに見てんだよつ、いつからそこにいた!」

大樹を蹴飛ばすと、ほて…と弓阿が落ちてきた。

「若いのは盛んでよいのつ、なに……妾も、ちと散歩してただけじや」

「出歯亀は代々変わらねえのか」(怒)

拳を握りしめて怒る朔に、弓阿はおもむろに声音を変え、固い声で言つた。

「一人とも…至急我が屋敷の広間に来て欲しいのじや」

「はあ…?」

「弓阿さん?」

乱れた結髪を解いてから、さくらは弓阿に近寄つた。

獣脂の灯りが、四角く夜の闇を切り取つてゐる。

二人が謁見の間に通されると、集団の中に、ちらほらと既に知つた顔が並んでいるのが見えた。

紫生の報告によると、梁呂の兔族以外の者 2つに分かれ

たうちの片方の者が、多数梁呂に潜伏しているとの事だつた。

「どういう事!…奈与や刹霞さんと行き違ひに?」

突如の報告に、さくらは、思わず身を乗り出してしまつ。

「やつこつりとりしご。お奴らがおらぬ間に、動きがあつたのか…」

…

(弓阿ちゃん……)

爪を噛み、心底悔しやうに嘔げた弓阿の心中を察して、さくらは口を噤んだ。

「紫生、その者らの姿形、しかと見たか?」

「はい、胴丸に腹巻き。武装はしておりますが、『じく』軽装の者が多
くでした。それと、刀と鉾を持つ者も何名か?」

「そうか…」さくらもうかつておれぬ。紫生、緊急配備じや!

皆にそり伝え

「ははっ…」

返事と共に、紫生の姿が煙のよつに焼き消えた。

「わー」

さくらは刺激が強かつたのか、『本物の忍者だ』と田を丸くして
はしゃいでしまつ。

「んん、忍が珍しかつたか? サくらの国にはおらんのかえ?」

「うん、昔はいたみたいだけど、今はTVとかでしか見ないかな?」

(あと、映画村とか?) 片寄つたイメージ。

「てれ…び、とな? なんじや…食い物か?」

弓阿は田を輝かせて、さくらに先をねだる。

「あ、うつご、テレビってのは簡単に書つて、色々な情報を一
度に知ることができ、人間には欠かせないものなの」

「ほう、人間とは変わった物が好物なんじやの」

TVを完全に食べ物だと思つていてる弓阿に、さくらは苦笑い。

「イヤ、だから食べ物じやないつて」

「おー一人とも、話すてるつて」

更に嵌つていく人に、朔はすかずつゝこむ。

(案外、ミーハーなんだな…このおばば)

「とりあえず、緊急事態なのは確かね」

廻りの空氣を、思いきり壊していくことにやつと啖つたさくらは、

小さく咳払いして四阿に微笑む。

「ひ、うむ……よいか皆の者、遂にこの時が来た。千年の歪み、今
こを打ち碎こうぞー！」

さくらと一緒に顎を合ひつと、玉座で、四阿が城館中に響く大音声で云
つた。

歓声が上がる。

刀鎗を携えた者、すべてが城主である四阿の前に膝を折った。

「さくらは、すいこな」

溜息交じりに言つ朔に、さくらはもよとんとする。

「すい、なにが？」

「さくらが始まりなんだ、今も昔も。2つに分かれた国が、今一つ
になろうとしてる……それを促したのが、お前」

「朔ちやん？」

朔は勇氣づけるように、さくらの腕を軽く叩いて笑つた。

「俺、なんか鼻が高いよ。さくらは凄い」

「うん、あたしが始まりなら、あたしが、責任持たなくちゃね？」

拳を握りしめて、さくらは真っ直ぐに朔を見る。

「おり、それは頼もしい限りじゃな。しかしさくら、そう力むな。
早々気疲れしてしまうぞ？ 無理をするでない」

玉座の四阿が、田を細めてくつくつと笑つた。さくらは彼女の言葉

に、深い労りが含まれているのに気が付いた。

「ありがとう……でも、あたしも戦う。人間のあたしじゃ、なにが

できるか」 「うん、足手まといになるかも知れないけど、それ

でも、あたしも戦おうと思つた。自分にできることをしたい」

「人間だから、じゃない、心配してんだぞ？ 田え離すとすぐ
無茶するし」

思慮深くさえある朔の言葉に、さくらは少なからずムツと息を詰め
た。

「わ、分かったわよ…ムリは、しないから

「よし」

無邪気に破願した朔と、さくらは内心に引かかりを感じながらも、
憐れ口許を綻ばせた。

さくらは、遠く思いを馳せる。

本国　　日本に戻った、奈川と刹震はどうしただろつか？
もう十日は経つといひのに、彼らに関する知らせは一切なかつた。
どうか、無事でいて。

はたはたと揺れる橙の焰が、さくらの表情に深く陰影を刻みつける。
それは恰も、彼女の心情の表れのようだった。

畫動する闇（後書き）

いつも、維月です。

今回も、少々見せ場がめです。（汗）

纂奪者（前書き）

久しく留守にしていた祖谷本部。

しかし、そこに広がるのは同士討ちがあつたことを物語る、未だ渴かぬ血の海だった！

そして、同胞の血で壁に刻まれた『纂奪状』だった。

長らく留守にしていた徳島・祖谷本部は、一面の血の海と化していた。

そこかしこに骸が転がり、白い漆喰の壁を血が汚している。惨状を呈する城内は、同士討ちがあつたことを物語っていた。

暗褐色に変色した白壁。

すっかり渴いているところからして、既に数日が経過しているだろう。

「蘭渓つ……おのれ！」

刹霞は、ぎりりと手の色が変色して白くなるほどに、強く拳を握りしめる。

【兄上、もう貴様の時代は終わりだ。次に会つ時は總領から乞はず
り降りしてくれよう】

壁に、同胞の血で刻まれた纂奪状。

宣戦布告だった。

「まさか、オレ達と行き違ひに？ 父上つ、戻りましょう、早くー」「分かっている……だが今は犠牲者を葬つてやらねば。野晒しじは哀れだる」

死骸と化した、こぢら側に残した部下達を見渡して、刹霞はそつと別れを惜しむように呴いた。

（お前たち……すまなかつた、本当にすまなかつたー）
俯いた刹霞の頬を、悔し涙が伝い落ちて弾けた。

どんなに苦しかつたろう。

痛かつたろう。

『すまない』以外の言葉が見つからない。

部下達の骸を埋葬し終わった後、ぱつりと、奈引がおもむろに呴いた。

「叔父上は……なぜオレ達を裏切ったのか？」

叔父と、父の仲は良いように見えた。

一族中でも人当たりが良く、実子のいなかつた彼は、自分を本当の息子のように可愛がってくれた。

それが……なぜ篡奪を企む？

自分は、叔父が好きだった。

なのに。

「あ奴は……鬼族の在り方自体が気に食わなかつたんだ。篡奪どころではない、すべてを破壊する気だろう」

「戻りましょう父上！ 向こうに残した母さんが心配なんです！」

「……わくひ殿のことか？ 母と呼ぶには若すぎるだらう」

「でも……心配なんです、ある意味」

そう言われて、奈引は羞恥に顔を染める。

「ほう？『妻に欲しい』とか言つていたこともあつたようだが、そう言つ感情じゃあなかつたんだな」

片眉をあげてからかう父に、奈引は精一杯の反撃を返す。だが、効果はなし。

「なーんだ？ 朔にヤキモチ焼いてるのかお前

「分かつてゐなら聞かないでください！」（怒）

「つて、マジに怒るなよ……ジョークだよ」

鼻白む奈引に、刹霞はひょくつと肩を竦めてみせた。

「……彼女が初めてなんです。なんの見返りもなしに、真っ直ぐに接してくれた人は」

「ん。よく成長したな……もう俺から教えられることはなにもない。安心して総領を譲れるよ。守りたい者がいるのなら、頼むすがよい」

刹霞は、息子を一頃り強く抱き締めてから、その背を押して笑つた。

「はい！」

一人は素早く兎型に溶けると、七つ国へと空間をかけていった。

纂著者（後書き）

いつも、維月です。

『Rabbit Pack』新章のお届けに上がりました。
さて、本編。

祖谷本部に戻った刹靄と奈引……そこには想像を絶した惨状が広が
っていました。

悔し涙を流す刹靄さん。

なっちはさくら（お母さん）が心配です。

さてさてどうなる鬼族の行く末……？

まだまだ続いてゆきます、先が気になった方は本編へGO！（笑）

穿たれた櫻（前書き）

順調かのように見えた、朔とさくら。
しかし、無情にも運命は二人を裂いた！
蘭渓の魔の手が、さくらに迫る！！
そして……。

穿たれた櫻

「ほひ、人間の女があるではないか……か弱そつな奴だ、ヘドが出来る」

海を眺望する事ができる断崖にいるさくらを、一羽の射千玉の鳥が見ていた。

いや、見ているのは鳥ではなく蘭渓だった。
本人の目からではなく、遠く離れた場所から鴉の眼を介して見ているのだ。

部下達に潜伏使令を出し、蘭渓は単独で動いているうしださくらを見つけたのだった。

「ふ、余興がてら…楽しませてもらおつか?」

そう呟いた矢先に、ぱたり、と鴉が墜ちる。

元の死骸に戻ったのだ。

「見つけたぞ……兎族の弱点を」

青い双眸をニイ、と歪ませて、彼は音もなく、するりと地脈に体を滑り込ませた。

しかし蘭渓が去った後、
か、彼が触れた地面は焼けただれ、夥しい腐臭をあげる。

彼の体は、つもり積もつた怨嗟が蝕み始めていたのだ。
破滅へのカウントダウン……。

壊疽が、始まっていた。

『へンね、朔ちゃん？ もう今まで隣にいたのにな… おおい朔う！』

外に出るは危険 と押しとどめる周囲を拝み倒して、海が見たいと駄々をこねた自分を朔が、ここまで連れててくれたのだ。

朔がない。

朔がいない。

可笑しい……。

だがすぐに、さくらは異変に気が付いた。
なにが、可笑しいのかにも。

妙に悪寒がして、震えが止まらない。

最近は、色々と口うるさい目付役の朔が、つかず離れず傍にいるのに。

その朔がいないなんて、可笑しい。

『朔、朔う！　どこにいるの？、返事して！』

彼女は、すっかり術中に嵌りこんでしまっていた。
廻りは物音一つしない。

景色には、どこにも変わりなどないのに。
叫ぶさくらの声は、無情にも、ことごとく虚無に喰われて消えてゆく。

『イヤよつ、イヤー！　誰か返事してよー！　一人はイヤあ～…………』

一人はイヤだ。

怖い。

孤独に対する恐れは沸くのに。どうしてか無氣力になり、なにも
考えたくなくなる。まるで、思考する能力を奪われたよう
にかが、そうさせるのだ。

「さくら、さくらー！　しっかりしなよ、俺はここにいるだろ！」

「イヤ……イヤああ」

さくらの傍を、朔は一度たりとも離れてはいなかつた。

朔は、どこか虚ろにとり乱すさくらの肩を揺さぶつて呼びかけるが、彼女はまるで見えていないかのように無反応で、しきりに震えている。

「その女には聞こえない」

朔は虚ろなさくらを抱いたまま、声がした方向をきつく睨む。

「きつ、貴様…敵軍の将かつ

彼女になにをした!」

朔の睨んだ先には、冷笑する、鎧姿の男が佇んでいた。

「ああ……彼女なら夢を見ているよ。最高の悪夢を、ね」

底からこみ上げた激情が、朔の瞳を、髪を異色に染めあげる。

「い…のやひつ、胸くそ悪いツラしやがつて!」

欠伸をするように言った彼に、朔は堪らず飛びかかった。

だが、身軽に躊躇して噛う蘭渓には無意味でしかない。

「……あまり、調子に乗るなよ?」

「なつ」

彼の間合に入りかけて、紙一重で避けたはずだった。

だが、軽々と瞬歩で朔の間合に入つた蘭渓は、耳元で冷たく囁いた。

そして

「口を慎め青一才がつ!」

「がつ…かはあつ!」

しなやかな健脚が、朔を蹴り飛ばす。

蹴り上げられ、朔はもんどり打つて地面を転がつた。

「他人の楽しみを邪魔するでない。暫く、黙つて見ておるがいい」

蘭渓は、朔に向けて縛執呪を切つた。

「やめる、やめてくれ!! ……さくらから離れろっ!!」

重い鉛のような呪縛が朔を戒め、彼に一切の動きを許さなかつた。

『あなた、誰？　あたしを迎えてくれたの？』

虚ろな目で見あげるさくらに、蘭渓は一やりとほくそ笑む。

『そう、俺は君を迎えて来たんだ。おいで、家族が待っているよ』

『あなた……だ、れなの？』

さくらの眉間に、明らかに抵抗が浮かぶ。術に嵌りながらも尚、どこまでも呪を振り切ろうと抵抗するさくらが気に食わなかつた。

蘭渓は、さくらを抱きすくめながらその笑みを深くする。嗤いながら、彼女に一撃を加えた。

残酷な楔の一撃を。

『それは、知らないでいいよ。お前はこれで死ぬんだから』

さくらの体が宙を舞う。

打ち掛けの袖が、天女の羽衣のようにはためいたが、彼女は宙を舞わずには、重力に従つて落下を始めた。

「やめてくれ」 「っー？」

朔は渾身の力を込めて、結界として張られていた、襲撃者の術式を破壊した。

「つまらん。実につまらぬ……だから人間が好かんのだ。今日は引きあげるか」

崖下を覗き込んで座りこむ朔の脇で、蘭渓は消えていったのだった。逆巻く海流同士が、大渦をなしている海域だ。さくらが助からないのは明白だった。

「さくら……さくらあ」 「ーー！」

狂つたように、悲痛な慟哭をする朔を駆けつけた弓阿が見つけ、爆ぜんばかりにその目を張つた。

「朔、朔！ しつかりせい、あの子、さくらはまだつしたんじやー？」

「うああ……うああああ

「っー！」

声にならない悲鳴をあげ続ける朔を抱え上げ、弓阿はそれ以上なにも言わずに、城館へと引き返した。

(朔……一体どうしたんじや！　それに、さくらの気配が消えた…)

すず、と緊迫した空氣を薬湯を啜る音が濁す。

朔だ。

「どうだ……落ちついたかい？　話してくれぬか、さくらはどうしたんじや。あの子の気配が消えたんだ…皆知りたがつてこる」

蓬色の薬湯を啜っていた朔は、ややしぶりく間をおいて辯々しゃべり、抑揚のない口調ですべてを語った。

「……さくらが、死んだ」

弓阿を含め、その場にいた一同は驚きに、愕然と朔を見た。

「まさか……そんな、気配が消えたのは、なんてこと？」

「蘭渓だ、あ奴の仕業に決まっている」

突然割つて入つた声に、弓阿は泣きほらした田でふり返る。

「刹霞、戻つていたのか……さくらが、さくらが」

ゆづくりと、弓阿は格子戸に凭れる刹霞を振り向くと、震える声をなんとか抑えて小さく呟いた。

「徳島に残した、俺の部下共は皆殺されていた。あ奴め、遂に墮ちる処までおちたな。篡奪状を置いていきおつた

「なに！？」

目を剥いたのは、弓阿だけではなかつた。

今まで抜け殻の如く萎れていた朔も、僅かにだが身じろぐ。

「楔を打ち込みおつて……だが皆の者、慌てるな。鬪うべき相手が分かつただろう。奴を、蘭渓を必ず倒すのだ！」

ハラハラと、朔と弓阿を見交わす紫生。

「弓阿、そなたも…もちろん鬪つてくれるな？」

「当たり前だろうが。この弓阿、兄上のためにはここに在るのだから微笑みあつ、弓阿と刹霞。

「ああ、猛獸の檻が壊された……」

はう……と溜息の紫生、即ちなぜか怒りなかつた。

穿たれた櫻（後書き）

いつも、維月です。

蘭渓が……さくらに集中攻撃。

蘭渓のバカ……（怒）

失くしたキオク 残つた想い（前書き）

蘭渓の襲撃を受けたさくら。

朔の目の前で、彼女は『死んだ』

遠い浜辺に打ち上げられた彼女を救つたのは……！？

すべての記憶を失った彼女に、再び 試練 が迫る。

異界ラブストーリー、新展開！

失くしたキオク 残つた想い

ひたひたと、寄せては押し戻つてゆく波。

大波、小波をくり返しながら、時を紡ぐのだ。

波が寄せて、浜に漂流物を置いていく。

波が今度は、一際大きな物体を押し上げて去つていった。

海獸の死骸が、浜に揚があることがある。

海辺を餌場にする、妖魔の類には願つてもないことだ。
いま一頭の黒狼が唸りながら、流れ着いた贈り物の廻りをぐるりと
旋回している。

そつと、鼻面を押し当てたりしながら決めかねているうちに、同族
の狼たちが遠巻きに集まり始め、『よこせ』と言わんばかりに牙を
剥いて、日々に威嚇を始めた。

「よこせ、ここは俺達の縄張り（テリトリー）、そいつを置いてい
け！」

すると、黒狼は胸を張つて前足を一步踏み出し、一声大きく吼える。
「俺から横取るたあいい度胸だ……てめえら、よっぽど死にてえみ
たいだな！」

彼の咆哮は響く。

手当たり次第に、邪魔者を蹴散らしていく。

「ダメだ、奴は『鬼神』だぞ、やつぱりやめた方がいい
けど、どうする

「どうするどうする……」

狼達は獲物の事などと云ふに忘れて、尖つた顔を揃えて首を横に振る。

「ぐだぐだとやかましい奴らだ！ とつとと失せやがれっ」

煮え切らない同族らに嫌気した彼は、思いきり歯噛みして大声で吼

えた。

尻尾を巻いて退散していく狼たちは口々に、『やつぱり相手が悪い』と悲鳴を上げ、情けないほどあっけなく逃げ帰つていったのだった。

「一度と来るんじゃねえぞっ」

黒狼は尾をピンと立て、未練がましく潜んでいた残党に吼える。

あわあわと、忙しく逃げつて行つた狼に背中を向けて、彼は歩きながら人型に姿を変える。

狼と人間、両方の姿をとることができる…人狼なのだ。

黒く硬い髪なので、つんつんと毛先が跳ねている。驚くほど長身の男だ。

青い瞳が、波打ち際に横たわるさくらを捉えた。

「追つ払つたものの…こいつ、やっぱり助けにやならねえのか。下等な奴ら以外は人型だし、んなモンは有り触れてる。まずは、何属か知るべきだよな」

長つたらしい独り言を終えると、彼は、むんずとさくらを背中に担いで砂浜を後にした。

さくらは、ぼんやりと温もりに身を任せていた。

（誰、とても温かい手。誰なの？）

そつと撫でつける手に、懐かしさを感じるのは、なぜだろうか。考えればその度に、喉の奥がキュッと締まって、苦しくなる。さくらはうつすらと、涙で潤んだ目を開いた。

「う……」

涙をゆつくりと拭つて、のろのろと体を起こす。

潮騒の音が微かに響く室内は、必要最低限の家具しかなく、殺風景だ。

一体、自分はどうしたのか。

分からぬ。

「こじは、どこ？」

言おうとしたが、渴いた喉は掠れた呻きしか紡がなかつた。

ただ、言葉のとおりに口が動いただけ。

「気がついたみてえだな……起きても平気なのか？」

後ろから声をかけられて、さくらはぎくりと肩を跳ねさせる。そつと振り向くと、牀台の枕元に寄せられた椅子に、黒髪の青年が座つてこちらを見ていた。

気づいていたなら、もっと早くに話しかけてくれればよかつたのに漠然とそう思つたが、口に出す氣にはなれなかつた。

虚ろなのだ。

なにもかもが、曖昧。

かるうじて、自分の名前だけが思い出せただけ。

さくらは、すべてを失っていた。

名前はさておき、今までの記憶すべてを失くしてしまつていた。

こくんと頷いたさくらを、青年は興味深そうに、まじまじと見つめる。

「ふーん、お前…名は？ ウサギの嬢ちゃん」

「……さくら。それに、あたしウサギじゃないわ。人間よ？」

「人間つて種族はここにやあいねえな、それに言葉…『鬼族のだろ』」
さくらは眉間に寄せて、怪訝な顔で青年を見やる。

「鬼族つて、なに？ みんな…人間じゃないの？」

「へええ、お前…マジで人間？ それにしちゃウサギ臭いが」

青年は顔を間近まで寄せると、すんすんと匂いを嗅ぐ仕種をした。
「やだやだ、なにすんのよ……それに、あなたは誰？」
なんとか枕で頭をガードして、さくらは小さく竦みあがる。

「本つ本当にどの妖魔の匂いもしねえなあ。人間なんか、現存しねえ

つて聞いてるけど。俺は黒鋼、ただの一匹狼さ」
さくらを、珍しげに見つめる青い瞳。

どこかで、見覚えのあるその色。

思い出しかけた光景は、さくらの脳裏に一瞬だけ明滅して消えた。
悲しいほどの懐かしさ　　自分を呼んでくれる、優しい声は
誰だろうか。

けれど、それを思う度に伴う痛みがある。

『忘れる』と言つていいのだろうか？

さくらの擦れて汚れた頬を、雲が幾筋も伝い落ちては散つてゆく。
それを見守っていた黒鋼はばつの悪い顔をしてから、そつと困惑い
がちに、壊れ物を扱う手つきで彼女の頭を撫でた。

「どうしてここまで来たかは、今は聞かねえ。安心しろよ……だか
ら、泣くな」
「……うん」

「お前、なにも覚えてないのか？」

「うん……分からぬ、思い出せなくて」

海岸に打ちあげられた流木に腰掛けて、黒鋼はさくらの顔を覗き込
む。

穏やかな潮騒が、風に乗せて微かな波音を運んでくる。
ここは、細かな白砂しらいさが広がる海岸の端だ。

「ま、思い出せねえなら仕方ないだろ。人生のやり直しと思つて、
生きればいい

「優しいのね、黒鋼さんは」

「うん。

初めて笑ったさくらにぎょっと驚いた顔をして、黒鋼はすぐに、軽

く毒づいてそっぽを向いた。

「べつ、別に優しかねえつ、ただ……放つとけなかつただけだ」「だから優しいの」

さくらは、どこか悲愴な笑顔を滄海へ投げて、小さく呟いた。
「そうかよ」

しばらく、両者間に無音の空白が生まれる。

と、静かに廻ぐ滄海を眺めていた黒鋼が、ふいに立ちあがつた。

「おい」

ぽけ…と見あげるさくらに、彼はニシと笑みを深くする。

その表情には、どこか子供のような無邪氣さが表れていた。

「ついでこい、俺が拾つたんだ……ちゃんと面倒見てやるよ。だから元気出せ」

「あやつ」

ひょい、と子猫のように掬い上げられて、さくらはパチパチと何度も瞪田する。

「ほんと?」

「そうだ。うつわ、軽いなお前… ちゃんと喰わねえと、これからでかくなれねえぞ? 帰つたら、まずはメシだな」

問答無用で、のしのしとさくらを自宅へ連行する黒鋼。

その後ろ姿が、少し誘拐じみている。

「とか言って、結局作るのはあたしなのね。何が使えるかしら?」
戻つたはいいが、黒鋼の家の台所で、さくらはキヨロキヨロと材料を探していた。

何もない割にムダに広い台所で、小柄なさくらは異様に目立つて見える。

「お前、ホント小つさいのな」

「やつ、や、や」

背後に現れた黒鋼が巨大すぎて、さくらは後ずさつて少し距離を取

つた。

「ちび」

面白そうに茶々を入れる黒鍋に、やくらはぱりぱりと怒りまくる。
「むう、小つさいなんて失礼な。黒鍋さんこそ、毎日なに食べて生きてるの？ 殆どなにもないじゃない」

「あ……、とりあえず肉さえありやあいいさ」

「ダメよそれじゃあ……絶対どこか悪くするわよ？」

とりあえず手元にあるのは、牛酪^{バター}に小麦の粉と少しばかりの野菜、それに干し肉だった。

「ガキのくせに、一丁前に言うな。なにか作れるのか？」

無愛想に言つ黒鍋にカチンときたやくらは、精一杯に怒鳴つた。
「あたし子供じゃないもの！ 小やくて悪かつたわねつ、黒鍋さんが大きすぎなのよ！」

「あーあーあー、怒るなつて……腹に響く。悪かつたよ」

「もう……大人しくしてて頂戴」

ぐつたりと頃垂れて見せて、さくらは再び台所に向かつ。

「お鍋に水を張つて、火……これつて、竈よね？ やつ、火が点かな熱つ、熱つ！」

小麦と牛酪を炒めてから、水となじませて野菜・干し肉と一緒に煮る。

煮立つてきたら、塩加減を見て完成。

「結構ホネだわね……」

啖いたと同時に、匂いに誘われて入ってきた黒鍋が、不思議そな顔でフンフンと鼻を鳴らした。

「いー匂いだな、もうできたのか？」

「うん、なんとかね。美味しいか分かんないけど」

「お前も喰うんだぞ、味見したのかよ」

困った顔をして、鼻に皺を寄せる黒鍋。

「したわよ、口に合ひつか分からない、つて言ったの

「はいはい、分かったって……早く喰おうぜ?」

黒鋼は早くも席について、しゃらがシチューをよせつてくれるのを待つている。

「あたしもお腹空いたやつた、食べましょ」
言ひや否や、ガツガツと食い付きのいい黒鋼に、しゃらはあんぐり。(すじこり……なんだか、獣みたいだな)

「……これ……なんていうんだ?」

「口にあつてよかつた。これはシチューっていうの」
シチューにがつつく黒鋼と、知っているのに、名前の分からぬ男の面影が。

「面影が、重なる。
似ているはずがないのに……なのに。
なのに。」

匙を置いたさくらの頬を、つう、と涙が伝い落ちた。

「どう、どうした! 泣くなよ、おい」

「分かんない、分かんないの……急に、苦しくて」

椅子から立つと、黒鋼は涙するしゃらの傍に屈み、田線を合わせた。

「大丈夫か? どうした」

「顔が、浮かぶの……」

震える声で言ったしゃらの頭を撫でてやり、黒鋼は密かに溜息する。「忘れるとは言わない。なるべく、考えないようにな」

忘れるなんて、ムリ。

考えない田もない。

誰か分からぬのに、こんなに愛おしこのは……恋しいのはなぜ?
頭が割れそうで、誰か助けて!

「いじのかな? ホントに」

しゃらは、潤む瞳で黒鋼の碧眼を、真つ直ぐに見つめた。

「辛い思いをするぐらになら、忘れてしまえ。少しずつな

この想いを捨ててしまつたら、本当に楽になれるだろ？」

本当に それでいい？

今のさくらには、何一つ、為す術がなかつた。

彼女はただ、じっと黙つたまま黒鋼の腕に、抱かれる」としかできなかつた。

黒鋼は無愛想な男だが、見ず知らずの自分を救つてくれたのだから、別段似悪い人間ではないようだ。

さくらは緊張に身を固くしながらも、伝わつてくる温もりと心音に、うつとりと眼を細めた。

（不思議……今日出逢つたばかりなのに。どうしてかしら、信頼しているみたい）

いつそ、この人に縋つてしまいたい。
心が、震える。

「『う、『めんなさい』……夕飯、冷めちゃつたわね』
ゆつくりと離れたさくらの背を押して、黒鋼は席に着く。

「なにも考えるなよ……いま、生きろ」

食事を再開した黒鋼は、目元を和らげてさくらに笑いかけた。

夕食の後片付けが終わり、さくらはさくらは牀台に力なく倒れる。

「とても……とても疲れた」

さくらは牀台に横たわって、小さく掠れた声で呟いた。

瞼が重くて、このまま眠つてしまえば、一度と目覚めることができない気がする。

あたしは、どうしてここにいるんだろう？

帰りたい

。

俄に弱々しい郷愁がわいたが、帰る場所さえ分からぬのに、どこに帰ろうとこうのだろう。

(瞼が重い……もうあたし、死んでしまうのかしら。それとも、もうとつくなに? 体が鉛みたいに鈍くなつて、闇の底に沈んでいくみたいよ)

「怖い、の……なんだか。とても、とても」

「なーに『今にも死にそう』な声出してんだよ、もうお眠か?」

黒鋼の大きな手が、さくらの頭を撫でて、揉みくちゃにする。

「あたし 夜が……闇が怖い。目を閉じたら、もう戻つて来れなくなる気がして」

目を丸くして、黒鋼は幾許か驚いたようだ。

「怖い……のよ」

「ここにいてやるから、寝る。手放したりしねえから、安心しな」

さくらの縋るような目に、黒鋼はその碧眼を細める。

「ほんと、ね?」

「ああ」

眠るさくらの傍に座つた黒鋼は、そつと彼女の頬を撫でて外へ出て行つた。

その瞳は、どこか切なげだつた。

眠るさくらの真上、天井の梁。

そこに蠹く影があつた。

蜘蛛だ。

銀糸の巣の真ん中に、無数の目を、赤く爛々と光らせる大蜘蛛がいた。

【まだ……生きていたのか おのれ】

色濃い怨嗟を含んだ声で一頻り呴いてから、大蜘蛛は突如、焰をあげて跡形もなく燃え尽きた。

桜殻（さくらのむがり）（前書き）

蘭渓の襲撃を受けたさくらは……遠い浜辺に打ち上げられていた！—
朔ら、兎族が悲しみに暮れる中、一切の記憶を失ったさくらは人狼
族の青年・黒鋼くろがねに保護され新たな暮らしを送っていた。

すべての記憶を失ったさくら。

そして、新たに生まれる恋愛模様。

果たして、朔とさくらは再会できるのか！？

桜殯（さくらのもがり）

「そうか、朔……さくらが殺されるのを見たか」「さくらが突き落とされる瞬間^{とき}、蘭渓は笑っていた。そして、俺はあいつを死なせてしまった」

ひとひら、ひとひら。

桜の花が舞い散る中、朔と刹霞は祭壇の前に佇んでいた。
殯^{もがり}の為に設けた四阿^{あずまや}の祭壇には、白い帷子を纏つた少女が横たわっている。

さくらだ。

しかし、それは彼女自身ではない。

見つかからなかつた遺体の代わりに、弓阿が桜花を練つて作った花人形だつた。

白く清らかな頬に体温はなく、命を宿さぬ者として棺に収まつている。

四阿の廻りに集まつた者が老若男女問わずに、外聞もなく彼女の死を悼んでいた。

棺に火が灯され、挽歌が満ちてゆく。

燃えあがる淨火を見つめる朔の横に來ていた奈与は、手の色が変色するほど、きつく朔の腕を握りしめた。

「なぜ、助けなかつた……朔！ オレは、オレは信じないつ、さくらは絶対死んでなどいないと、必ず探し出すんだ！」

「俺は……無力だ」

「お前も手伝うんだよっ！！ 貴様がやらねば誰がやるんだつ」
座り込んで、虚ろに言う朔の襟首を掴みあげて激昂する奈与を、刹霞が羽交い締めにする。

「やめる、朔とて……さぞや無念だつたはずだ。今は仲違いしている場合ではないぞ」

「だが……父上」

「さくらは死んではおらぬ、必ず生きて連れ戻すんだ。蘭溪がどこにゐるか分からん今は、迂闊に動いてはならん。暗殺部に探らせておるで、じき場所も知れよつ」

辛さんは、皆同じなのだ。

愛する者を失う、痛み。

刹霞は悲愴に満ちた眼差しを、遠く、窓の外の海に向けた。

「んはつ、寝過ごしちまつた！　あ、あこつはつ
がば！」と勢いよく起きあがつた黒鋼は、窓の床台を見て、寝癖で乱れた頭をかきむした。

「あんのバカ！　外行つたのか、外つ」

だが、焦つて小屋から転がり出た黒鋼は、目前の光景に思いきりしつこけた。

さくらが、近所の子供たちと戯れていたのである。

「お、おまつ…お前」

「あ、黒鋼さん…おはよつ」

寝起きのままぽかんと佇む黒鋼に、さくらはくすぐりと笑う。

「髪、ぐぢやぐぢやよ？　心配…してくれたのね」

「だつ、誰が心配なんかするか…　ただ、見に来ただけだつ」
ブイツとわっぽを向く黒鋼に、それでもさくらは笑いかける。

「ありがと、黒鋼さん」

「おう…」

言つてしまつてから『しまつた』といつ顔をした彼を、子供たちが口々にからかつた。

「この姉ちゃん、黒鋼の嫁さん？　ねえねえ」

「ばつ、ばばバカ言つんじやねえつ」

「あーつ、お嫁さんなんだ！　みんなに言ひやがりやおつひとつ
「兄ちゃん、やるなつ」

「ちげーよバカ！　勝手なこと言ひやがつてガキ共がつ」

真つ赤になつて怒る黒鋼とはしゃぐ子供たちを見ながら、さくらは

『気がつかれないよう、小さく溜息した。

【お前は、俺の血縁の嫁なんだ！】

ふと浮かんできた言葉に、さくらは一頬りの痛みを覚え、強く眉間にを押さえる。

「……痛つ」

「おい、どうしたさくらっ！」

よろけたさくらの肩を抱いて、黒鋼は不安そうに眉根を寄せた。

「大丈夫、大丈夫……声がしただけ」

「ひゅう～

「あつつくヒヤケドしちやうつ…みんなに話してじようつと」

「るせえンコー！」（怒）

さやあきやあと、はしゃいで逃げていいく子供たちの背中に毒づいて、黒鋼はそっとさくらの背を片手で支える。

「外にや出みな、なにがあるか分からん。帰るぞ」

「う、うん……」

子供たちが流した噂は、またたく間に廻りに広がった。

曰く、近所の住人は、興味津々といった感じで始終まとわりついてくる。

勝手に、さくらは『黒鋼の嫁』といふことにされてしまった。

「なあなあ、あんた黒鋼に攫われてきたのかい？」

「美人だねえ、嬢ちゃん」

「新婚さんなんだろ？　いいねえ」

「う？　う？」

まとわりつかれたさくらは、あつといふ間に押しくらまんじゅう。

「つたぐ！　まわりの喧しきこつた、普段なんぞ見向きもいやがらねえくせしてよつ」

黒鋼の逞しい腕が、さくらの背中を抓んで、人の海から引きあげる。

「やーん……」

「だーから、いわんじゅうひやねえ」

じたばたと暴れるさくらを床に降りると、黒鋼は思いきりイヤな顔。
「「めん…なさい、あたしのせいなの
しゅん、と頃垂れたさくらに、黒鋼は斜に構えてから間近まで顔を寄せた。

「あ？」

「子供たちに『黒鋼の奥さんみたい』と言われて、なにも聞けなかつたから」

【さくら】

また 呼ぶ声がして、さくらは強く眉間に押される。

「余計なこと、気にすんじゃねえよ」

台所に据えている卓に直に座り、黒鋼はなにげなく中を仰ぎながら言った。

「……うん」

ねえ。

誰か教えて？

自分を呼ぶ声が、頭から離れないの。
忘れられないの、苦しい。

どうすればいいの？

「ん~？」

「えっ、なに？」

気がつくと触れそづなほど近くに、黒鋼が顔を寄せてきていた。

さくらは、面食らって幾らか後じれる。

「また考えてたら、シワ寄つてんぞ、眉間」

「だ、だつて……聞こえるんだもの、仕方ないわよつ」

図星を指され照れ隠しに背を向けた彼女を、黒鋼は面白しきな顔で見つめ、唐突に抱き締めた。

「やーつー！ ややや、やだ、やだつてばつ」

「なんつーか、お前……見てて飽きないな。カワイイ」

ニヤ、と黒鋼は狼スマイル。

逞しい腕に抱き締められて、さくらは動きもままならず、か細い悲鳴をあげる。

「なんか、マジで氣に入っちゃったな……お前のこと」

「ええ！？」

不遜なほど嬉しそうに言つ黒鋼に、さくらは赤面してしまつ。

彼がいま狼姿だつたら、絶対に尻尾を振つていそうだ。

「俺アな、今までずっと、他の奴らから恐怖されてた。どんな奴でも、一緒にいるうちに、逃げてつちまつ。なんでか知らねえが、逃げなかつたのはお前が初めてだ」

『見て』『りんよ、あれば 鬼神 だよ……近づくんぢゃないよ』
『あの目、あの青い目……ああおぞましい。太古の怪物の血を引いてるんだって！』

『近寄るんじゃない、あ奴は化け物だから！』
どうしても、どうしても受け入れてはもらえず。
自らにはなんの責もないのに、嫉そねみ、憎む村人達。

果てない孤独。

果てない悲しみ。

「それは

それは、さくらにも分からぬことだった。

逃げようと思えば、そうすることができたのに。

逃げなかつたのだ。

「それは……黒鋼さんが綺麗だから」
彼の眼差しに憎しみはなく、あるのは、どけ出でも深い孤独と寂しゃ。

透き通つた、氷のよつこ固て『生きる』意志。

「綺麗……なにがだ？」

彼の薄い唇が、笑みの形に開かれる。

笑つてゐるのに、田だけが笑つていなかつた。

「あなたの田よ。田は心を映してゐるから
なの」

頬に両手を添えて微笑むそくらじ、黒鋼は思いきり赤面し、慌てて
身を翻した。

「なんでもねえ……今のは、忘れてくれ
ドカドカと勢いよく、小屋を出て行つてしまつた黒鋼を、きょとん
と見送るそくらじ。

「どう、応えればいいのかな？」

ぽつりと呟く。

しかし誰が応えてくれよはずもなく、声は虚しく静寂に食べられ
てしまつ。

あとは、潮騒が謡う音しか聞こえてこなかつた。

「好きって、言われちやつた」

黒鋼の、上氣して嬉しそうな顔を思い出しつゝ、そくらじは思いきり赤
くなつてしまつた。

「気に入つた……か

(どうしたんだろ、頭……もう痛くない？ 痛みが…消えた)

好きと言られて、返事はしていないものの、どこか受け入れている
自分がいる。

好きになつてみよつかな、と一人呟いてから、そくらじは出て行つた

黒鋼を捜しに行つたのだった。

桜殻（さくらのむがつ）（後書き）

どうも、維月です。

さくらが記憶喪失の間、朔はずつとむくれていますね。
朔：哀れだな。

さくらは、黒鋼といつ青年に拾われます。
そこで、また新たな……？

寄り添つ心（前書き）

蘭渓の襲撃を受けて行方不明中のセイクラ。
介抱してくれた人狼族の青年・黒鋼に愛された彼女は……
朔ではなく、黒鋼の傍を選んだ！
異界ラブファンタジー好評連載中！

寄り添つ心

「ん……」「ん……」

夜半、さくらは小屋の戸が閉まる音で目醒めた。

(黒鋼さん……?)

さくらはがば、と勢いよく牀台から起き上がる。

「黒鋼さん！」

牀台から飛び降り、急いで小屋からまろび出たが、そこに彼の姿はなかつた。

ひゅうひゅうと、冷たい夜風がすり抜けていくだけ。

恰もそれは、置いて行かれて寂しい、今のさくらの心のよう。

(どに行つたのかな、散歩かしら? 眠れなかつたの?)

青白く、月光がストライプを描く森の中を、ペたペたと足音が響いた。

「黒鋼さん……どこにいるの? 黒鋼さん!」

か細いさくらの声は、悉く夜闇に吸いこまれて消えてゆく。

一人が怖かった。

言いしれぬ不安を生む夜の闇は、もつと嫌いだつた。いつの間にか、さくらは走り出していた。

「黒鋼さんつ、どこ、どこつ? 怖いのよつ……」

転んで擦りむけた足を引きずつて森を彷徨い、さくらは声を限りに

叫ぶ。
いや それはもう悲鳴だった。

「置いていかないで! 怖い、怖いつ」

擦りむけた傷が、寒さに痺れたように痛んだ。傷も痛むが、それよりもっと、胸が痛い。

さくらはつこには座り込み、泣き出しちゃった。

『はふ……ハツ、ハツ、ヴ　　／　ルルル』

ふと、獣の唸る声を聞いたさくらは、ヒツと短く息を詰める。

体が動かない。

声がもの凄い近くに……！

逃げなきや。

逃げなきや。

夜の森がいかに危険に満ちているか、彼女は失念していたのである。いくらか後じさつたが、それ以上のことはできなかつた。

「やだ、やだ……食べられちゃうつ、来ないでよ！」

足元の小石を拾い上げたさくらは、獣に向けてそれを投げつける。小さく弧を描いて飛んだ小石は、獣の鼻面に、いい音をたてて命中した。

「いでつ！」

ひとりきわ唸りが高くなる。
身構えるさくら。

「ぬあにじやがる、ばかやわ！」
「…………え」

木々の作る影から現れたのは、一頭の黒狼。

黒狼は躊躇なくさくらの側まで来ると、彼女の向かいに座り、実際に臭くニヤリと笑つたのだ。

さくらは、その青い双眸に、彼が何者かすぐに理解した。

「バカだな……俺なんか追ってきて、ケガなんかしてんじゃねえよ

「だつて、だつて……怖かつたんだもん」

さくらは狼の黒鋼にしづく抱きつき、思ひきり泣きじやくつた。

だが……。

「きやあー」

いきなり『べろつ』と頬を舐められて、さくらは慌てて涎を拭い落とす。

「お前、さつきからペーペー嘘しかったよな。泣くなよ」

「だつて……一人が不安で。黒鋼さんは急に出てくるし

「探してたんだろうが」

「唸つたでしょ、食べられちゃつかと思ったのー」

特に気にした風もなくかかか、と後肢で首筋を搔く黒鋼に、さくらは思いきり膨れ面。

「喰わねーみ、てか、喰つていいの?」

がう、とさくらの腕を黒鋼は甘噛みする。

「やあだ、もう」

さくと顔を赤らめたさくらは、それを誤魔化すように慌ててさくまを向いた。

触れられた場所が

熱い。

熱を持つて、まるで疼くよう。

「俺が狼だつて分かつたら、それでも……怖くねえんだな?」

彼はさくらから離れるごとに人型に姿を歪ませた。

月光につやはと輝く彼は、どこか神々しくもある。

「うん……」

それに見惚れていたさくらは、傷の痛みも忘れてすくと立ちあがる。

そして中天の月を見て、ふうわりと微笑んだ。

「月、きれいね」

今度は、彼が赤面する番だ。

満面の笑みを咲かせるさくらを見て、黒鋼はひときわ高い動悸を感じ、田を見開いた。

「帰るつ、黒鋼さん」

「お？ おう？」

とことこと、少し先を歩いて振り向いたさくらに、黒鋼は暫し見惚れたまま立ち去る。

（この娘は、こんなにも美しかつただろ？）

弱みにつけ込むやり方を好まないの黒鋼の信条だが、こればかりはこの想いだけは、彼自身にもどうする」ともできなかつた。

「危なつかしい奴だな、見てらんねえ」

吐き捨てるように行つて、後から追い上げた黒金は、勢いよくからくらを抱きあげた。

いつものよつな、子猫を抱くよつなやり方ではなく、今度はできるだけの愛しさを込めて。

「やあん、降ろして、降ろしてってばつ」

それでも、さくらはじたばたと暴れる。

今の体勢が、余程恥ずかしいのだらう、彼女の顔は赤い。

「るせえ、大人しくしろ……ケガしてんだろ？ がよ」

「大丈夫っ、ちょっと擦りむいただけだからっ」

もじもじと暴れるさくらを押さえながら、黒鋼は勝ち誇ったようにフンと鼻を鳴らす。

やはり、獣の性が騒ぐよつだ。

「黒鋼さん……苦じつ」

締めあげられた、子猫のよつに訴えるさくらの頬をペロリと舐めて、黒鋼は幸せそうに田を細めた。

「お前がいいつてんなら……そのままこでてもいいぜ。俺も、その方が嬉しいからな」

「うん？」

やつぱり、ぽけ…と見あげるさくらに、黒鋼は苦笑い。

(「マイツ、意味、分かってんのかあ……？　一生に関わることなのによ」)

「決まり、だな。よしつ、俺ソヒコニハ。な？」

「黒鋼わざ……」「ハハ……」

【「たゞ、やくひは俺がいなきやダメダメだな】

声が、重なる。

映像ビジュアルまでが浮かんで
しかし、今度はなんとか痛みを呑み込んで、混乱を避けた。

彼の言ひとおりに志れてしまおつて、やくひはわざの田を境に一度と、
朔を思に出でなこりました。

「こね、じやあずっと……黒鋼わざの傍に」

ふわふわと漂うだけの花びらは、やつと一時の安樂を尋る。
しかし、その安樂もいつ消えるやも知れぬ泡沫のよつなもなのだ。
それを、やくひは知らない。

禁断の恋（前書き）

行方不明中さくらうのさくらが流された島は、鬼族の梁呂から北東の方角に
ある胡国・茜嶺せんりょうという漁村だった。

そこで、繰り広げられるさくらと黒鋼の激しい恋。
奔放な一人の愛は今日も深まるばかり。
さて、これからどうなる？

異界ラブファンタジー、好評連載中！

禁断の恋

朝に日を覚ますと、必ずさくらが傍にいるか確認するのが、黒鋼の最近の日課になっている。

存在を確かめるように、さくらの頬に触れる黒鋼の表情は穏和で、普段の無愛想が嘘のようだ。

「んう……うん？」

可愛い寝言もいいが、このまま寝かせておくわけにもいかないので、早速起こしに掛かる。

今日は、食糧を定期的に取りに行く日なのだ。

さくらが流れ着いたのは、梁呂から北東の方角にある胡国・せなんじょ西嶺ひざねという漁村だった。

西嶺に棲む種族は人狼族。ここ西嶺だけではなく、各國の種族は大半が人狼が占めているのである。

西嶺は漁業の盛んな村だが、村人達の多く殆どは畑作をしながら日々を暮らしている。

黒鋼は、そのどちらも例に漏れており、すべて自給自足（ある意味）、正真正銘の一匹狼だ。

「起きろさくら、出かけるぞ」

「どこ行くの？」

寝ぼけ眼を擦るさくらの頭の上に、作業服のような物が被さる。

「食いもん探しにな。行くだろ？ 待つててやるから、着替えてこい」

「あ、うん

黒鋼がさくらに投げたのは、黒い野良着だ。

それは、土木業者の作業服に、よく似ている。

（わつ、がぼがぼだ……上着だけでも、スカートみたい）

とりあえず隣室で着替えたさくらだが、サイズが合わない。

そのつえ……。

上着だけでも長いのだ、ズボンなどは到底ムリだ。

「これじゃ、なんだかスカートみたいだけど……仕方ないわよね。
どこかに紐があればいいんだけど」
「ごそじそと弓を出しを漁るぞくら。

そして。

偶然ズボンのウエストを締める紐を見つけたさくらは、それを使つ
ことにした。

そうすれば、裾が広がらない。

「遅えぞ、おい」

ひょ、と頭を覗かせた黒鋼は、渡した服の上着だけをワンピースの
よう着たさくらを見て、思いきり噴き出してしまった。

「ぶふつ！ んだよ、そりやあ……」

「黒鋼さん……」（怒）

「だから長衣にしたのか。まあいいんじゃねえ？ 似合う似合う
ばしばしと地駄を踏んでウケている黒鋼を、さくらは恨みがましい
ジト目で睨む。

くつくつと笑う彼の目元には、涙さえも浮かんでいる。

「笑わないでよ……失礼ねえ」

ふ つと膨れた餅のようになつて閉まつた彼女に、黒鋼は二
ツと口角をあげて笑つた。

「行くぞ」

夜明け間近の森を、さくらを乗せた狼姿の黒鋼が駆けてゆく。

夏とはいえ、早朝の大気は冷たく肌を刺す。
耳元で鋭く風が鳴り、髪られた髪が頬を打つた。

「ど、どこまで行くの？」

「奥だ、奥」

「奥つてなに

「つ！？」

「 るせえ、しつかり掴まつてなつ」

更に速度を上げた黒鋼に抱きつい（しがみつい）て、さくらは毎度の事ながら身の凍る思いを味わっていた。

（は、速いいつ……とにかく、早く止まって――）

と、急停止した黒鋼から、さくらは危うくずり落ちそうになり、慌てて地面に足をつけた。

「 黒鋼さん、どうした……の？」

「 てめえ、なんだ」

夜明けの薄闇に、黒鋼の唸りが響く。

そこまで言いかけたさくらを背中に庇つて、黒鋼は牙を剥いた。二人の前に現れた青い毛皮を持つ獣は、どこか穏和にさえ聞こえる声で礼を取つた。

「 夜分に失礼を、私は『連れ』を探している旅の者です、
「へえ、そうかい……それで、俺たちになんの用だ」
すると、青い毛皮のウサギはニイ・ニイ日月形に目を歪ませて笑い嘲笑を含む声で言つた。

「 その子は、私の探している『連れ』に相違ありません」
「だから……返せつてか」

「 はい。おいで、さくら……みなお前の帰りを待つてゐるぞ
一步にじり寄つた獸に、さくらは身の底からくる何か 悪寒

を感じて、黒鋼にしがみついた。
さくらに戦慄が走る。

自分は、この男を知つてゐる！

鳴りやまない警鐘。

宙に舞う感じ。

翻る衣。

侮蔑と、嘲笑の笑み。

そして、悲鳴。

冷や汗が首筋を伝い、さくらは、耳の奥で血潮が逆流する音を聞いた気がした。

震えが、止まらなかつた。

「イヤだと言つた！」

黒鋼は牙をむき出しにして唸り、青毛のウサギ・蘭渓を喰い千切らんばかりに間合いを詰める。

「てめえ、どうにもこいつを捜しに来たつて感じじやあねえよな。殺意の宿る田だ。コイツは誰だろ？ が、他の奴にくれてやる氣はねえ……今すぐくたばりたくなきや、さつせと失せろ！」

「ふつ……思つた以上に楽しませてくれる。殺すには、ちと惜

しいな。まあ勢々、足搔ぐがいいや」
くくくと低く嗤つて、蘭渓は地脈に染み込むように田元まで潜り、影の底に消えていった。

「あの声……知らないのに、でも知つてゐつて？」

座り込んでうち震えるさくらを、こいつの間に戻つたのか、黒鋼の逞しい腕が抱き寄せる。

「お前、ウサギ共と関係してたんだな……それで記憶喪失になつた。けど安心しな、たとえ全部元に戻つたとしても、俺はお前を離さねえ」

さくらの瞳が、涙で潤んで震えた。

小さく頷くと、黒鋼の胸板に甘えるように頬寄せる。

「嬉しい……あたし、嬉しい」

頬を染めてはにかむさくらの初々しさ、彼を夢中にさせることも充分すぎる理由だった。

「さくら……つー」

「やんわり……ん、うひうひ

「んはり　　んんり、んり……」

黒鋼は、夢中でさくらの唇を奪っていた。

強く吸い上げ、舌を絡める。

「やだ……あん、黒鋼……」

「逃げるなよ……な？」

やんわりと押し倒され、さくらは恥ずかしがつてもがく。

夜目にも薄紅に上氣するさくらの肌に、黒鋼は更に欲情した。その唇が、彼女に触れる。

「あんっ……ダメ……」

「もう、離さねえよ……覚悟しな」

地平を染め上げる払暁の中、当初の目的を忘れて睦み合ひ一人。

禁止されたことほど、嵌りやすく甘美なものはない。

まさに『禁断の恋』に墮ちた黒鋼を止める者は、今のところいなかつた。

禁断の恋（後書き）

こんばんわ、維月です。

ああ……二人の濡れ場が多すぎた。

（汗）

朔はどこいったああ～！？

急転直下の恋 求婚（前書き）

胡国・茜嶺で、人狼族の青年・黒鋼と暮らし始めたさくら。ぶつきらぼうで、粗暴。だが優しい彼にさくらは惹きつけられ、彼もまた彼女に惹かれている。

今日も、奔放な二人の愛は深まるばかり。そして、遂にプロポーズされたさくら！記憶は戻るのか！？

異界ラブストーリー、好評連載中！

急転直下の恋 求婚

「起きてー もつ黒鋼つてば……もつお皿だよ?」
下敷きにされたままのせへりは、黒鋼の胸板をなんとか押し返そう
と、奮闘中だった。

「苦しそよ、起きて ～」

完全に寝入つてこのが、いくら押しても起きる気配はない。
あまつさえ、『父さんだぞ』などと口にやけでいたりする。
(重い……それにしても、どこかに隠し子でもいるのかな?)

だからとこつて放つておへ程、せへりも甘くはない。
いまは、華奢なせへりことつて、逞しい黒鋼の重みは驚異でしかな
いのだ。

「黒鋼のバカあ……」そのまま死んだら絶対、恨んでやるつゝ
やや暫ぐじたばたともがいてから、せへりは小さく鼻を鳴らして、
そのままぐったりと伸びてしまった。

「悪いな……死なせるつもりはねえよ」

やつと、ゆつくつと体を起こした黒鋼に、せへりは戸れ面。
「やつと起きたのね、もつ……」

がしがしと頭を搔き篭る黒鋼は、聞いてこらのかいないのか、素知
らぬ顔で大あくびをしている。

「朝ゴハン通りこして、お皿ゴハンになつちやつたじやない。聞い
てる?」

牀台に座りながら髪を梳き、身繕いを終えたせへりは隣りに座つて
いた黒鋼に甘えた。

「ねえ……キスして?」

「朝つぱらから誘つなよ……」

「嬉しいクセ」

「……ああ」

また、その情事に牀台が苦しそうに軋んだ。

昼の温んだ日射しに、彼女の素足が眩しくて。
絡めるようなキスの後、黒鋼はついと目をそむける。

最近はそれでなくとも、理性が保たないのだ。

目に痛い。

「結局、昨夜はそのまま帰つて来ちゃつたからね……もう一回行つてこよう。あたし、仕度してくる」

「お、おひ

ぱたぱたと、さくらが部屋から出て行く。

それを名残惜しげに見送つてから、黒鋼は頭を振つて、なんとか邪念を振り落とした。

「つて！ なに考えてんだよ俺っ

（もし、このまま暮らしが続いたら……理性保てる自信がねえよ。
どうする）

再び牀台に、大の字で寝転がり一人苦悩する黒鋼は、妄想が暴れそうになるのを懸命に堪えた。

そんなことではないけど、自分でも分かってはいるのだ。

徐々にだが、最近さくらの記憶が戻りつつある。

そして、あいつ　　さくらに夫がいるのを知つた。

いる、ということは認めているが、名前が思い出せないことと、彼女本人に自覚といつか、実感が沸かないようなのだ。
もし、さくらの夫がここに来たときは、やはり返すべきだろうか。
しかし本人の記憶が戻らない限り、『あなたは誰だ』というシチュエーションが妥当だわ。

どっちにしろ、残酷なことに変わりはない。

それならば、いつそのこと……。

「奪つちまうか」

どちらが後腐れがないかといえど、もちろん後者の方だ。

いや、ないとは言えないが、現状を認めさせるのが一番自然なよう

な気がする。

それに、

「あ つ、黒鋼まだ着替えてなかつた！ 置いてつちやうだ
？」

「なあ、さくら」

「なあに？ おつかない顔して」

それに搜すだら、普通は。

自分の妻がいなくなつても探しにも来ねたあ、どういう事だ！？

譬えどんな事情があれど、そんな奴にさくらの夫を名乗る資格はない。

と、俺は思つ。

「俺んとこにいる、いや……いてくれ」

「なあに、それ昨夜も言つてたね。 どうしたの？」

刹那、気の抜けたような顔をした黒鋼に、さくらは（やっぱつ）無邪気に小首を傾げて尋ねる。

「お前なあ……やっぱ分かつてねえか」

「なにがよ」

普通にしても、鋭い彼の眼差しに挑むように、さくらも黒鋼を見返す。

まっすぐに見つめられた黒鋼は、一気に赤面すると同時に、半ば怒鳴るように言った。

「一度しか言わねえぞっ」

「うん」

「くづ、とやくらの喉が上下する。なにを言われるんだろうか。

「俺と……結婚してくれ……」

あまりの迫力に、彼女はやや暫く目をしばたかせていた。
そして、おもむろに沸騰する。

その顔は、互にまるでトマトのよつだ。

「黒、鋼……どうして？」

「俺なら、お前を泣かせたりしねえ……苦しめたりもしねえ。だから、俺のモノになれ」

やんわりと抱き締める腕で、やくは幸せやつて『うれ』と息をついた。

「ほんと？」

「お前の夫だかが来ても、絶対対に渡さねえから」
黒鋼は強くやくらを抱き締めると、軽く額に口づけ、照れくわわつに微笑んだ。

「嬉しいなあ……でも、もう少し……考えさせて？」

「さくら？」

不安そうに表情を曇らせた黒鋼に微笑んで、彼の腕を解く。
戸口を出て行ったのを、見送った矢先だった。

やくらが、頬れた。

その様は、細く柔らかい草が折れるかの如くで。

血の氣の失せた白蠣の類は、瘦せて尖ったほお骨が目立つばかり。
そして、口許には鮮血がこびりついていた。

「やくらー？ やくら、どうしたんだよー？」

いくら呼びかけて頬を叩いても、やくらは口を開けず、昏倒したまま動かない。

まるで

『魂そのもの』が抜けてしまったような感じだ。

「医者ひ、くそつ……分からねえ、医者ひてのはビヒにいやがるー。」

青白い顔色。

滯つ氣味の脈。

どひしみよひ。

どひしみよひ。

とつ乱す、黒鋼の声を聞きつけた隣家の老婆がやつてきて、唐突に彼の背中を杖で一突きした。

「うづやー、大の男が情けないつ。まずは落ちつくんじや……医者なら、山一つ越えたところにあるから、一晩かからず着けるだろうよ」

「すまん、おばば」

心底すまなそうに言つ黒鋼に驚いて、老婆は険しくしていいた表情を幾分か和らげた。

「よーせ、気にするでない。はみ出し者のよしみじや……それにしてもう、なんとも面妖な。この娘、人間なのかい?」

「そうだが、なんだ?」

返事が来るとは思つていなかつた老婆は、驚きに口を張り、そつとさくらの頬を撫でた。

「まわりの連中が騒いでいたが、どひやら話は本当のようだ。流れ着いたのを拾つたんだってね。可哀相に、こんなに毒を溜めて」「毒だと!? なんだ、病氣のかつ? だから、コイツは血を吐いたんだなつ」

身を乗り出した黒鋼の背中を、老婆はなにも言わずに押し出す。

その代わりに目配せをして、黒鋼に『行け』と促し、片手の杖を掲げて見せた。

風が、止む。

死気が生気に転じてこべのを、黒鋼は体のどいとも言えない場所で感じていた。

騒めきが静まり、夕闇が忍び寄つてくる。

「時間がない、急ぐんだよ……」

さくらを抱えて駆けていった黒鋼の背中を見送つて、老婆はぼつりと呟いたのだった。

脣の陽氣は死氣であり、どんな禍事もなりを潛めている。
まがいじ

しかし今は、死氣と生氣の境である。病人には、一番の峰だ。
(体…悪くしてたなんて、全然気づかなかつた！ やべえよ、冷たすぎだつ)

時折止まつてはさくらのために暖を取り、少しでも体温が戻るよう

に念じる。

しかし火影に照らし出される彼女の頬は白く、まるで、内部から凍つていてるかのように熱を受け付けない。

「必ず助けるつ……助けるから、頑張れつ」

再び走り出した黒鋼が、山裾に棲む医者の元に着いたのは、夜が明けるか明けないかの一歩手前だった。

「すまねえ、助けてくれ！ ここに、急に血い吐いて倒れた奴がいるんだつ、開けてくれ！」

激しく、せつぱ詰まつた呼びかけに、木製の扉が今にも碎けそうなほどに歪む。

それが余程応えたのか、間を持たずに勢いよく扉が開き、手提げ灯ランプ

を片手に掲げた金髪の男が現れた。

金髪といつても、それ程明るい色ではない。

普通の色が太陽と譬えるなら、彼の色は月光のよう。

「はいはい、そんなに叩かないで……近所迷惑になっちゃうだろ
？ その子が患者だね、とにかく中へ」

「あっ、ああ！」

茜嶺と隣村の境の山裾に住む医者は、せい暁と名乗る男だった。

「この子、人間だね……吐血するまで我慢してたんだ。こりゃあ酷
い」

暁は、診察台に仰向けにしたせいかの上に、手を翳しながら云つた。

「コイツ、助かるのか！？」

「連れてきたのが俺の処でよかつた。他じや、ビリにもできないだ
ろうから」

身を乗り出した、黒鋼の肩を押し返して座らせるとい、暁は微笑んで
みせる。

「どうなんだって聞いてる」「怒鳴らないで、いま確かめてるんだ」

濃厚な、怨嗟の気配。

それに。

彼女には、『護り』が働いている。

死した、魂の気配。

彼も、ひどく彼女を心配している。

ひどい汚穢おいだ。

晟を光輪が包むと同時に、彼の片手に光が灯った。

その手で触れていくと、灯つた光は青白く揺れながら、やがてさくらの心臓あたりに染み込んだ。

「なあ！ どうなんだっ！」

「かなり深刻な状態だよ……」この子、呪われてる。おそらくは厭魅えんみ、禁呪だ。

「の、呪いだつて！ 笑かすんじゃねえよ、てめえ……医者だら？ んな事信じてんのかよっ！」

引きつった笑いを浮かべる黒鋼に、晟はへにゃんと笑つた。

「幸いね、俺は呪術師でもあるんだよ。言つたら、『他じや、ビツにもならない』って。俺なら、できる」

「じゃあ、やくらは助かるんだなー？ それさえ破つちまえば」「あと 血を吐いた原因だけど、全部が呪いのせいつて訳じやないよ。この子…やくらさんと言つたね、やくらさんの体は『变成』を起こしてる。この世界で生きていけるように、変わり始めるんだ。その変化に体内が軋む。それともう一つ」「なんだよ」

黒鋼は、短く息を詰める。

「彼女……妊娠している。身籠もつてるよ」

さらりと呟つ晟。

「なつ、なにいー？ だだだ誰の奴だよーーー！」

思いきりわめく黒鋼に、晟は不思議そうに首を傾げた。

「えー、君のじゃないの？ 彼女なんでしょう？」

晟は緑色の瞳を細めて笑つ。

詮索する女性のよつつな雰囲気を感じ、黒鋼は思いきり顔を顰める。

「や、そつだが……身に覚えがねえ！」

（げつ、そういうや……あの夜！ 覚え……あるかも）

思わず赤面して怒鳴る黒鋼に、晟はどうか楽しげに笑つた。

「そういえばね、君の名前…聞いてなかつたと思つんだけど? 教えてー」

「黒鋼だよ、知らねえのか?」

訝る黒鋼に、最はまたも『くにやん』とおどけてみせる。
「知らないって、なにが? 僕あんまり外出しないから、よく知らないんだ」

人狼族の中でも、隔絶された力を持つ個体。

異種混血。
ハーフ

今は、神話の世界にしかその名を聞かない妖魔の血を、黒鋼はひいでいるのだ。

それ故につけられた異名は『鬼神』黒鋼。

「まあいい、とにかく助かるんだな…コイツ。それで、どうすればいい…その、呪いとやらは」

肩を竦めて言う黒鋼に、最はどこか面白そうな風に笑つて腕組みする。

「まあ、本業は医者だけど…呪術の方が得意分野。任せてよ」
ヒヤウ

「足元に氣をつけてきて…こっちだよ」

床の隠し扉を開くと、地下室独特の冷氣が吹き上がり、秘密めいた雰囲気を感じさせる。

先導してランプを掲げた最が、中段で立ち止まつて微笑んだ。

急転直下の恋 求婚（後書き）

どうも、維月です。

仕事の都合で更新が遅れてしまった……。はあ。

さて、本編。

新キャラ登場！ 彼の性格、作り直した方がいいかなあ（汗汗）

衝突（前書き）

蘭渓の攻撃により記憶をなくし、茜嶺という漁村に流れ着いたさくら。

黒鋼との生活に終わりが訪れつつあった。

さくらの記憶が戻ったのだ！

『変成』を起こして吐血した彼女を、黒鋼は医者に診せに行くが…

…そこでさくらの新事実が明らかになる！

衝突

「 イタカ?」

「 アア、ミツケタ」

「センドツテ、ホンタイニツタエニイツタ……サア、ドウウゴク力
ミモノダナ」

漆黒の闇に紛れて潜伏している梁呂側の暗殺部三人組は、暗殺部特有の微声で、標的の動きを見張っていた。

「くつ、ぬかつたわ……呪が甘かつたのか、あの小娘め、返してき
おつた!」

吐血した鮮血のこびりつく口許を拭つて、蘭渓は憎々しげに、叫ぶ
ともつかない声で叫^わき散らす。

「くそ、くそつ……たかが人間の分際で! 許さん、許さんぞおつ
パタッ……パタタ

鮮血が掌を伝つて、地面を赤黒く染めていく。

再び吐血して、蘭渓は体をくの字に折り曲げた。

「あの女……殺してやる!」

狂氣の宿る目が、ひときわ青く燃えたぎつた。

最の案内に入った部屋は、壁天井すべてが朱塗りで、そこかしこに甲骨文字によく似た、おそらく一般人には解読不能な文字が刻まれている。

そして、文字たちは自在にその空間を廻っていた。

地下室独特の冷氣と水の気配が、不可思議な雰囲気を寄り際立たせている。

「さくらさんをこっちに……この池に浸して

薬湯元々の色なのか、他にも様々な薬草が沈む澄んだグリーンの水

に、黒鋼は静かにさくらを横たえた。

水は、まるで冬の凍水のよう。

冷たい痛みが走り、彼は苦渋にその顔を歪ませた。

「いてつ！……つーか、なんだこの冷たさはつ。真冬なみだぞ」

「それが、いま彼女が感じてる『痛み』だよ。水を通して伝わったみたいだね」

「さくら……」

触れようと伸ばした手を、晟はやんわりと、だがしつかりと押しとどめる。

「ダメだよ、今は触っちゃいけない。邪氣を炎り出しているからね……見てござりん、早速始まった」

静かな水面に、ゆっくりと泡が浮かんでは消える。

同時に、水中に筋を引く青白い糸。

「なつ、なんだよこりやあ！」

青白い糸は恰も、蛇のように鎌首をもたげて床へと這い出し、寄り集い、布を織るように一人の男の姿を現した。

【お、のれ……！ 人間の小娘が……許さん、許さん！】

ボロボロと崩れては戻るを繰りかえしながら、『それ』はさくらへの怨嗟を吐き散らす。

「やつとおでましだね、コイツが…術者、さくらさんを呪詛した犯人だよ。どうやら鬼族のようだけど」

見覚えのある容姿に、黒鋼は唸る というか怒鳴った。

「コイツ、あん時のつ！？ またなんか仕掛けてやがったつ

「ねえ、あの時って？ なーに？」

「あん時は、あん時だ。初デート壊しやがつて……って、てめえは知らなくていいんだよつ」

忘れもしない。

初デートを邪魔した男だ。

忘れようにも、忘れられるわけがない。

「それよかコイツ……手負いみてえだな」

べつとりと鮮血のこびりつく口許、狂氣の青い瞳。

痛手さえも凌駕するほどの執念が感じられる。

「同族に追われてるみたいだ。なんだろうね、兎族のほう……なんだかきな臭い」

晟はうむむ、と唸つてから、ポケットにある呪符 紙人形を取り出す。

そして薬湯の池からむくらを抱え出し、紙人形を彼女の額に張り合わせた。

紙人形は一度、等身大の蘭玉に変じると、蓄が綻ぶが如くにその形を変化させてゆく。

やがて現れたのは、さくらと瓜二つの式神だった。

「おっ、おい！ さくらが分裂したぞつ」

慌てて後じさる黒鋼、案外小心者である。

「いいや、分かれたんじゃないよ。元に戻ったのさ……彼女を呪つたのと同じモノに。それと、呪詛返しも兼ねて、今度彼女を呪おうとしても術は働かずに、術者自身を殺すように、と。ちよつとオマケした」

てへ、と無邪気に笑つた晟に、黒鋼はヒヤリとなる。

(「コイツ……もしかしてやばい奴かも）

「見かけに寄らねえな、お前。黒いこと言いやがる」

「さて、次の手を打つとしようかな」

暁は女神のように微笑むと『そんなことないよ』と、やくら型式神の背を軽く押し出した。

「そ……行つておいで。その力の持ち主の元へ。そして見張れ、もし動きがあれば殺ししい」

是と応えた式神は、疾風となつて鏑矢の如くに、天高く跳んでいつた。

「さて……」

椅子に座らせていたさくらに向き直ると、暁は彼女の額に人差し指で触れる。

すると、徐々にじわじわと青い光の皮膜が覆つた。

「君は戻つてくるんだよ、目を開けて」

彼女の瞼が、ゆっくりと開かれてゆく。

いま夢から醒めたような薄茶の瞳が、ふわりと光を戻した。

「戻つたね、おかえり」

白く、か細い手が伸ばされる。

差し出された彼の手を取り、覚束ない足取りで立ちあがるさくら。

「お前つ……よく、無事でつ！」

瘦せて、更に華奢になつたさくらの肩。黒鋼は堪らずに思いきり抱き締めた。

「心配ばっか、かけやがつて……よく、戻つてきたな」

強く閉じた黒鋼の目尻から、涙が、堰をきつたように幾筋も伝い出した。

「黒鋼……こーじ、じー？ 寒いの」

強く締めていた彼の腕を解いて、さくらは身を竦ませる。

すべて、^{あが}褚で統一された空間。

冷氣……。

いや、靈氣だらうか？

さくらは漠然と、雨上がりの、故郷の森を思い出していた。

雨。

冷氣、水の……氣配。

心許なくて……愛おしく、甘酸っぱいような思いがこみ上げてきて。意識が……覚醒していく。

「なあ、コイツ記憶喪失なんだよ。それも治ったのか？」

黒鋼は、どこか縋るように戻に訊^とう。

信じたくないのだ、彼女が自分から離れていくことを。

紛れもない事実だが、分かつてはいるが、もう一度問わずにはいられなかつた。

ゆるゆると、首を振る戻。

その答えが、どちらを意味するのか……彼にはもう分かつていた。

時が、動き始めたよ。妨げる、手ではないんだ。

「初めまして、さくらさん……俺は戻。巫^ふ靈道士なんだ。君を戒めていたモノは、取らせて貰つたよ。よかつたら、話してくれるかい？ 鬼族のこと、そして……君がどこから来たのか」

「……」

さくらは暫しの沈黙のあと、何度も瞳孔を繰り返してから、ゆっくりと頷いた。

「あたし、ずっと漂つていたのね。あの日、突き落とされたから今まで。朔の処に、早く帰らなくちゃ……」

「帰るって、さくらさんは朔というヒトの処から來たんだ？」 ビー

に棲んでたんだい？」

ひとしきり、走った痛みがさくらの頭を軋らせる。

その痛みに、彼女は強く眉間に顰めた。

「『めんよ、ムリしないでいいから…ゆづくりね』

「ええ……あたしは、夫と梁山にいたわ。兎族同士が争つていて…あたしが、その始まり。ダメ……これくらいしか思い出せなくて」

夫。

その響きに、黒鋼は爆ぜんばかりに目を見張った。

「言つな…それ以上言つなよつ

傾いださくらを抱き寄せて、黒鋼はきつく頬寄せる。

「ダメだ…行かねえつ、お前は…俺の傍で幸せになればいい！

わざわざ不幸になりに行くこたねえよつ」

「今も昔も、あたしが始まりで兎族は鬪つてるの……あたしが始ま

りだから、だからあたしが終わらせなくちゃ」

ただ成り行きを見ていた鼠が、やにわに言つた。

その聲音に、尋常とは思えない意志を感じたからだ。

「さくらさん……記憶が戻つたんだね」

「さくらー!?

小さく頷いた彼女に、黒鋼はまたも口を張る。

さくらは黒鋼の側から離れると、悲愴に顔を顰めた。

「『めんね、黒鋼……もつと前から、記憶は戻つてたの。あなたの気持ちが嬉しかつた……愛してくれて、嬉しかつた。でも、これじや騙したのと、同じだよね』

泣いても状況は動かないし、誤魔化せないのは分かつている。

けれど、泣かずにはおれなかつた。

痛い……。

静寂が、痛い。

「巻き込むくらいなら、忘れたまま暮らせばいいと思つた。けど……そんなのはダメ、自分で逃げて生きるわけにはいかないのよ。さだめが、あたしを逃がさない」

泣いて腫れた目元を拭つて、さくらは一人を交互に見やる。

「言い方が悪かつたんだね。別に君を責めてる訳じゃない……さくらさん、俺たち君の力になりたいんだ。だから、なにがあつたのか全部話してくれる？」

翡翠のような緑の瞳を和ませ、最はさくらの頬を撫でた。

その温みが愛おしくて、また涙腺がゆるむ。

「バーカ、そんなんで俺が諦めると思つた。お前の行く先、どこにだつて付いてくぜ」

「黒鋼、それってストーカーって言つんだよ？」

へんつ、と強がつて胸を張つた黒鋼を、最が茶化す。

「んだとお……龜られてえのかテメエ！」

「おつと、暴力はんたーい」

一方、最の式神付きの蘭渓は、思いの外の深手を抱えて、西領の山林を逃亡していた。

青い巨体が、木々をへし折りながら森中を疾駆する。背後の、そう遠くない距離に、無数の気配を感じる。

おそらくは追つ手、梁呂側の軍勢だらう。

蘭渓は唸つた。

「ふん……結局残つたのは俺だけか。ぐだらん奴らだ、怖じ氣づきお

つて！」

カララ、と脆い岩盤が崩れて谷底の闇に消えてゆくのを見送って、
口惜しげに足踏みする蘭渓。

これですべて、彼の退路は断たれた。

「くそつ…来すぎた！」

谷底には、硫黄の噴き出す地獄谷。

これしきの熱で溶ける体ではないが、長丁場になれば不利な地形だ。

「追いついたぞ、蘭渓っ！…」

風の中に、短かな黒髪^{キロメーテル}がさんざめく。

蘭渓より数糸離れた場所に、引き絞つた矢を番えた青年が構えていた。
朔だ。

その他にも剣霞や奈^{はいかい}、「弓阿がいる。

「屠られた同胞の辛酸…思い知るがいい。蘭渓、反逆罪により貴様
をこの場で極刑に処す！！」

「ふふふ……くはははっ……兄上、今更、もつ遅いわ！」

歪んだ笑み。

牙を剥き出しに、耳まで裂けた口を開けて高笑いする蘭渓。

「貴様……黙りや！」

きらりと白刃に光が反射し、鞘から刀身が抜かれた。
刀を振り上げたのは、弓阿だ。

「弓阿……兄妹だろう、兄を斬るのか？」

「罪人に、兄もヘチマもない……彼岸でその罪、悔いことだ」

戦姫の異名を持つ彼女からは、普段からは想像のできないほどの気迫と殺気が放たれていた。

「止せ、やめる弓阿！」

必死に身を捩る蘭渓。

しかし白刃が、滑らかに弧を描いて振り下ろされた。

ガシュウ……ツ！

斬り捨てられた蘭渓はそのまま崖を滑落し、谷底の闇に消えていったのだった。

「この世界に、人間はいないのよね？ どうしてか知ってる？」

さくらは、自分より頭2つ分背が高い鼠を見あげて問うた。

「色々説はあるけど、気候のせいとか……一番有力なのが戦争による減少、及び絶滅かな」

「俺も、そう聞いてるが……さくら、なにか知っているのか？」

大きく頷いたさくらに、黒鋼と晟は、共にぎょっと目を張った。

「鬼族と人族が千年前に大戦をしたの、その原因が……あたしよ

衝突（後書き）

ああ、黒鋼がしつこい。（汗）

茜嶺の役（へき）（前書き）

一方、蘭渓を倒した弓阿たち梁臣の側鬼族は、
取つていた。

予期せぬ戦闘に、弓阿達は戸惑つが……？！

茜嶺の陣営で仮眠を

茜嶺の役（えき）

「千年前の悲劇……それでこの世界の人族のすべてが滅んだ、だと？」

「さくらさんが始まりつて、千年前とどんな関わりが？」
やつと言葉を吐きだした二人は、顔を見合させて動搖を露わにする。まつたく、事態が飲み込めていないようだ。

突然に事実を告げられたのだ。

すぐに受け入れられるはずもないのは当たり前だ。

「人と兔族はね、それまでは上手くやってたの……貿易とかも盛んで。平和だったと聞くわ。あたしの前世、もう一人の『さくら』と兔族の長が出逢い、恋に墮ちるまでは

「ちょっと質問～」

ひょこ、と小さく手をあげる戻。

「さくらは、どこから来たの？」

(こ、いつの間にか呼び捨て……まあいいや)

「日本というの。もうあんまり口にしてなかつたから、懐かしい響きね

「二ホン……？ 聞かねえ国名だな、どじだよそりやあ」「知りたがりだねえ、君も」

身を乗り出して興味津々な黒鋼を、またも戻が茶化す。
どうやら、からかい癖が板に付いてしまつたらしい。

それとも、もしかしたらそれが彼の地なのかも知れないが。

「もしかして、伝承に聞く『倭国』かい？ 遥か東海の果てに浮かぶ島国で、不老長寿の」

「『倭』……そう、昔は確かにそう呼ばれたらしいわ。でも、全然不老でも長寿でもない国よ？」

「……その日本から、兔族のヒトと一緒にここに来たのか。梁呂はウサギの島だもんね。ということは ダンナさんは兔族なん

だ？」

「そう、だけど……話がずれてるから戻すわね。今も昔も、あたしのせいでも兎族は変動を起こしてる。あたしが始まりつて……わざわざ言ったのはその事よ」

さくらは小さく咳払いをして、面白がっていた戻を窘める。

「帰りたい？ 彼の処に……口封じに殺されかけたんだろ？ そんな一族に戻つたら、今度こそ殺されるかも知れないよ。さだめ運命なんて気にしないで、余所で暮らした方がいいと思うけどなあ」

「お前の言い分にも一理あるが、まあ説得したつてムダだ……どうあつても行くんだろ、兎に会つに。俺は気にくわねえけどな」

「きやつ！ や、やーん

唸るように言つた黒鋼は、さくらを抱き寄せ、ぐしゃぐしゃと黒いきり髪をかき混ぜた。

「ほーんと、黒鋼はさくらが好きなんだねえ……でもお、それつて不倫つていうんじゃない？」

「えつ……」

にこにことしながらも、一番黒いオーラを出しているのは彼だ。

黒鋼は、未だ凍結中。

黒鋼は石化し、一瞬大気が凍つた。

それを叩き割つたのは、もちろん戻だ。

「ねえさくら、ダンナさんつて……どんなヒトなんだい？ 僕、人型してなかつたら食べちゃいそつ」

「えつ……」

(そつか……この人たちにとつて、朔は食べ物でしかないんだわ！)
さくらは、失念していた自分を一瞬呪つた。

「さくらは可愛いのに、相手が変なのだつたら悲惨だつ……だつたら、俺あたりに乗りかえたりして……」

「戻、戻……後ろに」

(もやー…………なんなの、この色気は～っ…………それに、この妖氣は……)

さくらは、甘える戻の後ろに聳える黒鋼に、寒氣を催した。

その一瞬後、甘えていた戻が頭を押されて、地面に沈み込む。

「いつ…………いつてえ~」

「このボケ狐！ 間違つても横取りなんか考えんじゃねえ！」

とかなんとか。

威張り散らす黒鋼だが、彼も、ヒトのことは言えない立場である。

「…………黒鋼…………」

(ふう、なんとか助かった)

「痛いなあ、もうお陰で変化が解けちゃつた……」「冗談だよ」「冗

談」

戻が涙目で振り返った先には、まさに『怒髪天を突く』状態の黒鋼が、震える拳を構えていた。

金色の房尾が、不機嫌そうに床をうつ。

「戻つて、狐だったのね……犬じやなかつたんだ。泣かないで？ よしよし」

ひ んと、鼻を鳴らして蹲る金色の狐を、さくらは傍に座つて撫でた。

「ああ つぐむ！ わたとウサギんとこ行くぞつ、一発殴らなきゃ 気が済まねえ」

それに増えむくれた黒鋼は、遂に鼓膜が破れるほどの大聲で吼えまくつた。

「ちょ、ちょっと……殴っちゃダメだよ黒鋼つ

「うるせえつ！ わたと行くぞつ」

「黒鋼も行きたがってるし、俺も、会つてみたいな

「…………え」

(どうしよう、どうしよう……会つたら、朔が、殺されるかも知れない。でも、会いに行きたいの)

「……分かつた、行きましょ。あたしも、伝えなくちゃいけないから」

同意を待つ一人に、さくらは躊躇いながらに頷いた。

(朔は、絶対自分を責めてる……早く行って、抱き締めてあげたい)
『生きてるよ』って、伝えたい。

朔、朔ちゃん…待つてね。

待つてね

。

「つあ！？」

茜嶺の山中、鬼族の陣営の天幕。

仮眠を取っていた朔は、微かにさくらの声を聞いた気がして、天幕を転がり出た。

「どうした朔、騒々しい」

天幕の傍の炉端に佇んでいた奈与が、不機嫌に顔を歪ませて朔を振り返った。

火影が、彼の端麗な顔に、明らかな動搖を浮き彫りにさせた。

「さくらの声がしたんだ……絶対に夢なんかじやねえ。近くにいる

のかも知れない

「ぬあんだと？ サクラが心配だつたら、よくものうのうと寝てられるな！ このへなちょこつ！」

月は中天を流れ、凍えた御手で、触れたもの凡てを眠りへと誘う。夜は一時だけ死の気配を孕み、月は残酷な微笑を浮かべていた。

「これ……やめぬか。喧しいのはどつちも同じじや……ムダな労力ちからを使うでない。今は気を抑えて休め」

口論する一人に、弓阿の鋭い叱責がどぶ。

「す、済まない……たかが夢で騒いだ。ムダに騒いで悪かつたよ」

「よからう、朔……お前の心痛もよく分かるが、いまは動くときではない

「ああ……」

「ホントだつ。さくらにお前みたいな『へなちょい』は似合わない、もしや愛想死きて、他の男と暮らしてゐるかもなつ」

「おひ、お前……ヒトの氣にしてゐる」と何度も…（怒）

「あーあーあー、やめんか一人とも」

涙目で睨む朔の脇腹を、奈^ナは小突いて鼻白む。

ドンッ！

弓阿^{ヨウア}がいい加減にしり、そう言いかけた刹那、激震が地面を搖るがせた。

正しくは、外郭に張り巡らされた結界が、加圧に軋んでいるのだ。
空間の軋み。

譬えるならば、張りつめた糸同士が擦れる音だろうか。

「豺共^{ヤマイヌ}だ……っ、囮まれてゐる！」

結界ごしに響いてくる唸りに、兎たちは身を凍らせて身構え、襲撃に備えて武器を帯びる。

豺は黒犬型の妖魔で、狼よりは劣るが、俊敏さを武器にする凶暴な種族だ。

「結界が揺れてる、体当たりしやがつて！ 餌じやねえつつーの…」泡吹く牙が結界に迫り、何度も体当たりを繰り返している。

「射手、構え…結界が破れたら同時に矢を放て」

キレる朔を宥めながら、弓阿^{ヨウア}は部下達が騎乗するのを見送った。
そして、自らも愛馬の背に跨るのだった。

「久々じゃのう、共に一暴れしてやろうじやないか…のう、^{いふう}猪風よ

弓阿^{ヨウア}は不敵に笑つて、『愛馬』の首筋を撫でてやる。

「グルル…フウ、フウツ」

翼持つ大型妖魔・天馬だ。

猪風と呼ばれた天馬は、荒々しく黒土の地面を抉つた。

主従共に血の気が多く、かつては梁臣最強の忍として恐れられていたのだ。

「来るぞ、朔……変化を解けつ」

「お、お前こそつ」

いつの間にか協調している二人を、弓阿はどいか嬉しそうに見ていたが、すぐに元に戻つて、鋭い号令を発した。

「破れるぞつ、撃ち方……

構えつ」

結界が欠片を散らして爆ぜる、泡吹く牙が火影を返して黄色く映え、襲撃の咆哮をあげた。

「放てえ
つ！－！」

ひとりわ声高に、鬨かちんときがあがつた。

茜嶺の役（へき）（後書き）

いつも、維月です。

読んでくださる読者の皆様、更新が遅れてしまい申し訳ありません
です。期間が空きすぎてしまったので、ちょっと話が繋がってない
箇所もあるやも知れません。

では、本題。それにしても、朔がなんだかヘタレです。
黒鋼が出しゃばつてる感じでしょうかね……（汗）

再会（前書き）

朔とやくらが、ようやく再会を果たす！－！
感動的な再会と思いや…そこに横恋慕の黒鋼が乱入！

再会

「血と、獣の匂いだ……ウサギだな、近いぞ」

黒狼・黒鋼はすんすんと風の匂いを嗅いでから、牙を剥いた。

「鬼族が！？ お願いつ、あたしを早くそこに連れて行つて！」

彼の背に騎乗していたさくらは、夜日にも青褪めて必死に嘆願する。ウルウルと瞳を潤ませる彼女を、黒鋼は思いきり『べろりん』と舐めた。

「きや つ、またやつた！ 黒鋼のバカあつ

さくらは慌てて、黒鋼の毛皮に涎を拭う。

「ペーぺーとうつせえ、泣くな！ あああ… やっぱり返したくねえ
は、誰だつて同じだよ」

晟は困ったように笑つて、きつく寄り添う黒鋼を、さくらから離す。

「イヤだ……こいつだけは離したくねえ。今更戻つて、コイツが幸せになれると思うのかよ？」

きつく睨み据える目が、悲痛を帯びて翳る。

「それが、不義でも？」

晟の穢やかな眼差しに受け止められ、黒鋼は、つこと顔を背けた。

「晟、ありがと…後はあたしに任せて？ あたしが不甲斐ないせい
で、じうなつたんだもの。ちゃんと始末つけたいわ」

「そう……さくらはいい子だね」

くぅん…と小さく鼻を鳴らして、黒鋼がさくらの腕に鼻面を擦りつける。

「黒鋼？」

「まあ、あれだ……腹の子のことは心配すんなよ。俺は、たとえ不義でも構わねえし。だから、行くな」

一瞬、世界が音をなくしたようだつた。

音は聞こえても、その意味を結ばない。

「え……なに、言つてるの？ 黒錆つたら、変な冗談よしてよね」なぜか力む黒錆を撫でてやりながら、さくらは訝しげに眉を寄せる。「だ、だから……お前の腹の子の話だ。もしかしたら、俺のかも知れねえし」

「嘘でしょ？！ あたし、そんな訳ないわ。不義だなんて……どういう事！？ それに、お腹に赤ちゃんがいるなんて、知らないわようつ」

「いでつ！ いでで、口ラつ！ さくら痛エつ」

パニックのあまり、さくらは黒錆の毛皮を思いきり垂つてしまつた。「やだやだつ……朔ちゃんに、なんて言おうつ

「やめつ！ さくらつ。ハゲる、ハゲるつてつ

完全無視。

といつか、聞こえていない。

「大丈夫だよ」

わたわたと騒いでいた二人は、暢気な戻の仲裁に、ぴたりと動きを止めた。

「……戻？」

きょとんと見あげるやくらに微笑んで、戻は黒錆の背中（さくらの後ろ）に腰掛ける。

「つて口ラ！ 僕はハゲていいのかよつ

つつこむ黒錆だが、流される。

シカトだ。

「ちつ……（怒）」

「ここに来て、どのくらいか覚えてる?」「

「ええ、結構経つんじゃないかな?……三ヶ月くらいかな?」

「来るのは、ちゃんと来てた?」

「……それが、ずっと来てなかつたのよ。どうして?……夢じゃないんだわ?」

赤らんだ顔を覆つて、さくらは頭を振る。

「それはさておき、困つたなあ……黒鋼がこれしきで諦めるわけ、な

んどうだし」

「当たり前なこと言つてんじゃねえ。行くんだが、ウサギん處に」

そう言つて、黒鋼は背中から戻を振り落とした。

「おつとー、危ないだろ、さくらに何かあつたらどうするのやー?」

「さくらはお前に任す。巫山戯てる時じやねえぞ……テメエにも分か

るだひい。血の匂いが、濃くなつてやがる」

さくらを庇つて戻はきつく黒鋼を睨むが、それは殺氣だった彼の気配、あつけなく相殺されてしまつっていた。

黒鋼の中の血が騒ぐ
古の夜叉が、今ゆきへつと皿を醒ました。

「行ぐぞ! 犹共なんぞにデカい面させられねえつ、ぶつ潰してやる!—!」

「はいはい、まつたく血の多い

ボケているさくらの脇で、一頭の妖狐が起きあがる。

狐は戻の声で喋つた後、さくらの服の袖を咥えて、皿の中の皿に引つ張り上げた。

荒々しい動作なのに。

なのに、さくらはなんの衝撃もなく戻の座に座れたことができた。

きっと、彼が気を遣つてくれたんだろう。

「走るよさくら、しつかり掴まつてー!」

皿まで言つ終わらないうちに、一頭は走つ出していた。

白刃が、血と火花を散らす。

「跋鬼伏邪……臨！ 前！ 先！」

朔は片方で牙を防ぎながら、開いた左手で呪を切った。

不動印だ。

たちどころに、相手は呪力に搦め取られて縛られる形になる。朔の目の色が、凍っていく。

「貴様……つ、たかが、兎族の分際で！」

突如の司令塔の失脚に、豺たちは一歩ずつ、後退を始めていた。

「うるせえよ、兎族だからなんだ……弱者は、強者の糧になるべし。

だから、てめえはここで死ぬんだよ」

薄闇に、血が、飛沫いた。

耳を抉りそうな風が、五体を叩いていく。

戻の背で、さくらは幽かに煙の匂いを捕らえていた。だんだん、それが近くなる。

「いた！ あそこだよつ、結界の残滓…所々に残つてゐるけど、そのまま行つても良さそうだ」

「きやつ」

落下の感触に、さくらは短く息を詰めた。

「平氣？ もう着いたからね。立てる？」

そつと問う、戻の深緑の瞳。

そろそろと背中から下りたさくらの傍に、黒鋼が寄りそう。

「豺共を追つ払つてくる…お前は、そこから動くな」さくらの手を舐めてから、黒鋼は駆けだしていった。

「う、うん」

「やつほー…ウサギさんたち、やつぱり驚くよねえ」ゆるゆると、戻の変化が解けていく。

再び緊迫する兎族だが、朔は例外だったようだ。

「さく……り？」

刀を取り落とし、さくらを見つめたまま微動だにしない。それは、さくらも同じだ。

懐かしい声を聞いた、彼女の瞳から涙がこぼれた。いくつも、いくつも止めどなく。

「朔ちゃん……朔ちゃん！」

走り出すさくら。

「さくらっ！」

「さくらっ……さくらあっ！」

きつく抱擁する一人を、晟は微笑みながら見送った。（よかつたね、さくら。……げつ！　しつちは全然よくなかつたりしてつ）

ゆらり……。

「あれが……さくらの夫なんだな」

「じつ、こら黒鋼つ……ダメだつてば。折角会えたのに邪魔だろつ？」

一人黒いオーラを出している黒鋼に、晟は慌てていい添える。

ゆらり、と人型に戻つた黒鋼は、晟を締めあげた。

一方さくらと朔は、きつく抱き合つたまま動かなかつた。いや、朔がさくらを離そとしないので、動けないのだ。

「ほんとに、さくらだよな……生きてたつ、さくらだ！　ちゃんと生きてたつ」

「あたしが悪かつたの……」めん、『めんね朔ちゃん』

「謝るな……お前が生きてただけでいいんだ」

「あの二人が、助けてここまで連れてきてくれたのよ？」

指さした先の一人を見た朔は、一瞬言葉をなくしてしまつた。

（さ、さくら？　俺たちの天敵種族と、お友達になつてたり……する

(?)

「どうしたの？」

「い、いや……なんでもねえ」

再会を喜んだのも束の間、朔、一気に汗みずくになる。

大将の凹阿でさえ、その表情を凍らせてはいるのだから、無理もない。

「じゃ、じゃあ……礼、言わねえとな」

声が裏返つてこる。

不気味だ。

「俺に耐えろってか！　もう我慢できねえぞ俺あつ」

「おいおこつ……あ！　さくら、丁度よかつた……この狂犬を止めて

～つ

「ひつけひつけひで、また揉めていいようつである。

「やだ黒鋼つ、なに怒つてゐのやつ……せやつ……」

「お前が、さくらの夫か」

さくらを脇へ押して、黒鋼は思いきり朔を睨んだ。

「あ、ああ……」

一人の身長差、約10センチ。

朔、再び固まる。

「テメエみてえなガキに、さくらを幸せにできると思つてんのかよ？　こいつを捜しに来もしゃがらねえ奴にや、渡せねえな

殺氣を露わにする黒鋼に、朔は息ができずにいた。

「おつ、お前こそ……さくらの何が分かるんだよ！」

じりじりと迫る間合に、田には見えない苛烈な火花が散る。

「その言葉、そっくり返してやる……『イツはな、人間だ。俺たちのようなチカラも持つてねえ……だがさくらは、弱い訳じやねえんだよ。それがなぜか、テメエは考えたことがあるか！？』

一気に増した辛辣きわまりない雰囲気を和らげるよつて、払暁が撫でていった。

再会（後書き）

いつも、維月です。

『Rabbit Party』31部のお届けにあがりました！

朔とさくらが、ようやく再会を果たす：が。

黒鋼／＼朔……ああ、どうするんだ朔！（汗）

天泣（前書き）

蘭渓の襲撃によつて裂かれたが、遂に再会を果たしたさくらと朔。
蘭渓は死んだ。

一連の騒動は、静かに幕を閉じたのだった！

一人だけ異なる存在。

生きられる時間も、持ち得る能力も、何一つ持っていない。

人間。

似て非なる者　姿こそ同じだが、非力な生き物。
さくらはそれを理解しながらも、重圧に耐え、今までなんとか踏み止まっていたのだ。

「分かるか？……想いの強さだ！　コイツはな、血べど吐いて死にそうな目に遭つたってのに、テメエのことばかり心配しやがるつ。なのにだ！　探しに来ねえたあどういうこいつだ！！」

「……！？」

朔は目を見張る。

忘れていた。

一族に固執するつち、自分自身だけしか見えていなくて。

何より大切なはずの、彼女のことを思いやれなかつた。

いや　　もう、そんなものは理由になどなりはしないだろう。
「俺はバカだな……謝るのは俺の方だ。さくら、お前の心を一人にした、俺が……悪かったんだ」

朔は涙を溜めた瞳で、さくらを振り向いて笑う。

「分かつたら、大切にしろ！……泣かしたら、俺が許さねえ。いつでも取り上げに来るからな！」

「ああ

肝に銘じておくよ」

黒鋼に背を小突かれて、朔は地べたに頽れる。

「朔ちゃん、もういいの……いいから、泣かないで」「すまない」

さくら、本当にすまない」

声を上げて号泣する朔の肩を、さくらは優しく、愛おしげに抱き締める。

朔ばかりが、悪い訳じゃない。

油断した、自分にも非はあるのに。

この優しいウサギは、全ての罪を被つたのだ。

「雨……？ 晴れてるのに。お天氣雨だわ」

晴れ間から天地に降る雨は、神の泪。

天泣

。

朔を抱き締めながら、さくらは小切へ息を吐く。

それは、安堵の息。

これで、一連の騒動は終焉を告げた。

ひそかな雨雲が、さくらの田尻を這いついた。

天泣（後書き）

「こんにちは、維月十夜です。

『Rabbit』ばにつく』32部です。

再会を果たして、ラブモードに突入した一人ですが……黒鋼は、さ

くらを諦めていません。実は。

やれやれです。（笑）

悲しい理（ことわり）（前書き）

無事、朔との再会を果たしたさくら。
しかし。

『变成』を起こしたさくらは、もう人の形を保つてはいなかつた！？

悲しい理（ことわり）

「ねえ朔……」

「ん~？」

朔とさくらは、夜に沈んだ浜辺で寄り添つていた。

月は中天に流れ、淡く海原を撫でていく。

「あたしね、ずっと……帰りたいって、思つてたの。思い出した」

遠い望郷。

この世界の向こう側に、必ず戻ると言つていた、あの日。

「さくら……今でも、戻りたいか？」

朔は、愛おしげに頬擦りしながら、さくらを腕の中に閉じ込める。

「ううん。たぶん、もう……そこにあるたしの居場所はないの」

「さくら?」

月明かりに照らされた、さくらの顔が悲しみに翳る。

もう、戻れないのだ。

自分は『人間』という存在を逸脱してしまったから。
サイクル

身体が、変わってしまったから。

「もう、戻れない」

「そ……くら? お前」

朔は氣づく。

自分を見つめる彼女の双眸が、青いことに。

彼女の瞳が、闇の中でも沈んでいないことに。

「もういいの、あたし……人間じゃなくなっちゃったから。帰る場所は、ここしかないのよ」

彼女が、もう人間ではないのは事実なのだ。

さくらはもう、殆ど鬼族になっていた。

「鬼族に、なつてる？」

「朔ちゃん……だからもう、なにも言わないで」
するすると、彼女の頬を清いものが伝つていいく。
変わつていぐ、身体が痛かつた。

血反吐を吐いて歪み、引き裂けて死んでいく『人間の身体』が悲しかつた。

初めて血を吐いたとき、『人間のあたし』は悲鳴を上げた。

怖くて、怖くて内側なかで叫んだ。

お願い！　あたしを殺さないでっ、どうして死ななきや
いけないの！？

誰か、この『異形』を殺して！

氷を抱いて、身の中に巣喰う異形を殺すのだ。

『これ』が死んでしまえば、あたしは助かるのでしょ！？

ダメよ、それはあなたの子供よ？　殺してはダメ、あなたまで死んでしまつ。

ウソ！　イヤよつ、死にたくないよ！　あたしにも、生きる

権利があるのにつ

その叫びを聞きながらも、自分はどうすることもできず、変化に喰われていった。

いやだ！

ひとりわざわざ声があがつたが。
痛みに耐えて、叫びを飲み込む。

それが自分に与えられた運命なのだ。

受け入れるしか そうするしか、なかつた。
「あなたと生きていきたいから、選んだ。これでいいの」
「さくら…っ、どうして、なぜだ！？」

抱き締められた彼女の目尻から、涙が一筋こぼれ落ちる。

「人として生きるということは…朔より先に死ぬということ。そんなの、耐えられない。あたしにはできないよっ」

愛しい者のため…

少女は『人』の理を棄てた。

「そんな惨い道を…俺は、さくらに選ばせちまつたのか…？」

さくらは、わななく彼の腕に触れて、ゆるゆると首を振る。

「朔も…誰も悪い訳じゃないわ。あたしの身体が変わったのはあたしたちに子供ができたからなのよ？」

「はっ？」

空耳を聴いた気がして、朔は抱いていたさくらを離してしまった。
「やっぱり驚いた、あたしも最初は驚いたわ。でも本当よ…」
くすくすと笑うさくらに、朔は呆気にとられたまま動けない。

「まさか

本当に？ 夢じゃ、ないよな？」

「せうよー。お父さんになつたんだからね、しつかり頼むわよ？」

朔

悲しみを代償にして、手に入れた幸せ。

「やだもー…ほら、泣かないの！」

(俺はやつぱり、愚かなのかも知れない)

それでも幸せ、と。

よかつたと思えてしまつ、手前勝手な自身が情けない。

(あれ……でも、それよりもっとイヤなこと、忘れてないか?)

「…………やばい」

冷や汗まみれ、しかも涙目でぽつりと呟いた夫に、セクハラモードとんと振りかえる。

「朔ちゃん？」

「セクハラ…アイツだけには言つなよ？ もし知つたらどうなるか

…

アイツとは、もしかしたら奈々のことである。

『この、くなちょこのクセに~つー』と蹴りが来るのはまず確実だ
る。

「大丈夫よ、奈々ならきっと分かってくれるわ？」

頼りなく震える朔。

はつきり言つて、かなり情けない。

「なにを、聞いたら悪いんだ？」

「企業秘密！ 奈々には言つちやならねえ話…って奈々…？ なん
で、ここに」

背後に、今いるはずのない奈々の声を聞き、朔は言葉どおり飛び跳
ねた。

そこには、肩で荒い息をする奈々が構えていたのだ。

「母さんの、戻りが遅いから見に来たら……やつぱりお前が朔！」

「なに怒つてんだよ、おいつ」

朔は、すかさず後じわつた。

それに彼の色違ひの双眸が、訝しげに細まる。

「怪しい、お前……なにか隠してるだろ？」

「べ、別に」

（これだけは……これだけは言つ讃にはいかない！　殺される～）

「吐け、このへなちょこウサ！　なにがあつたんだ？、母さんから人間の氣配が消えてるだろ？」

蛇に睨まれた蛙とはこの事か、絞られる朔は、あつとこう間に汗みずくだ。

「な、なんで分かつた？　隠してたのに」

「わからいでかつ！？　さくらは、いつからああなんだ！　もう、父上たちと同じ氣配がするじゃないかつ！」

「やめれバカ奈与！」

「つむせーつ、なんでさくらをちゃんと護らなかつたんだ！」

怒りにまかせて奈与は獣化し、朔に飛びかかった。

「俺にふるな！　バカ野郎つ！」

キイキイと喧嘩する二人は、既に動く毛玉と化している。まき散らされる砂と一緒に、ふわふわと毛玉が舞う。じやれている一匹に、さくらは大仰に溜息した。

「こーら、一人ともやめなさいッ！　話すから、大人しくして？」

「「やくらー？」」

仲良く（？）声が重なつた朔と奈与は、『フンつ』と思ひきりそっぽを向く。

（朔は後でいいにしても、問題は奈与……相當怒つてゐるわ。無理ないけど）

「おいで、おいで奈与！」

耳をV字にして威嚇し、じりじりと後じわつて睨む奈与の瞳には、大粒の涙が溢れている。

さくらは以前彼に言つた言葉を反芻して、痛苦に顔を歪めた。

【 ねえ奈々、あたしがお母さんになつてあげる】

【ずっと、一緒に】

「……一人にしたね。寂しくして、『ごめんね?』
さくらはそつと彼の傍に屈み、首に腕をまわした。
「悪いお母さんだよね……」、あなただけのお母さんじや、なくなつ
ちやつた」

頬れたさくらの姿が、大きく歪む。

「や…くらー?」

そこには、銀色のウサギが、大きな目で涙を溜めて佇んでいた。
「あたし……もう、人間じゃないんだ」
「どうこいつことだ、どうしてだ! どうしてこんな惨いことを…?」
いつの間にか人型に戻った奈々の頬を、止めどなく涙が伝う。
「変わらざるを得なかつたのよ。人間を棄てないと、お腹の子も、
あたしも助からなかつたから」

「お腹の、子?」

みごとに惚けた顔をして、奈々は鸚鵡返しに呟いた。
心なしか、焦点が合っていない。
「そんなん……」

「じゃ。

「なつ、奈々! ?」

卒倒した奈々を抱えて、さくらはオロオロ。

「だからだ、コイツには言つくなつていつたのに」

「三」「サイズに縮んで、さくらの腕で伸びてこた奈々」をねめつけながら、朔はぶつたれる。

「やだ

「じりしましょ」

「とにかく戻るか

足早に踵をかえす朔。

完全に伸びてしまった奈々を抱えて、さくらは忙しなく朔の後を付いていくのだった。

そして、伝わる（前書き）

無事帰還を果たしたさくら。しかし　　彼女はもう『人間』では
なかった。それに、もう一つの新事実が判明して！？

そして、呑む

「なにい つ！？」

早朝の城館を搖るがせたのは、間違いなくこの城の主である卯阿だ。
「ばあちゃん、ひるむわ…」

「口ッ！」

両耳を伏せてぶうたれる紫生だが、卯阿の無言の鉄拳に敢えなく撃

沈。「さくら、お主……妾と同じ氣配がするわ、一体、なにがどうした
んじやつ…？」

彼女の突如的な変化に、城中・城下の者すべてが顔を見合わせては首
を傾げていた。

「だから……叔母上、結局は全部朝のせいですって」「なつ、なにおうつ！」

さくらを板挟みにして、歯噛みし合つ一人。

あつという間に取つ組み合いの喧嘩が始まった。

卯阿は肩を竦めて、障子戸に凭れていた刹霞に問いかける。
「なにか、分かることはないか？ 人の娘を娶つたことのあるお主
なら、なにか知っているのではないかと思つたのだよ」

視線が集まり、刹霞は短く咳払いした。

「前代未聞……としか言いようがない。人が我らと同族に変化するな
ど……」

彼にしても分からぬことなのだひつ、口調には、いつもの自信が
見受けられない。

「父上！ さくらを怖がらせるなよつ、ほりつ、泣きそづじやない
か！」

「え…？ いやさくら、別にお主が悪いといつ訳じやつ

ぽろぽろと泣き出したさくら。刹靈は大慌てだ。

「それは分かるんだけど……あたし、云わなきゃいけないことがあるの」

「男衆、ちょっとどうきな。さくら？ 泣くんじゃないの、なにがあつたんだい？」

それでも、ぽろぽろと涙をこぼす彼女に、一同は騒然となる。

「さくら、大丈夫か……どうか苦しいのか？」

朔は心配やうにさくらを抱き寄せるが、彼女は小さく頭を振った。「ううん、今みんなに伝えるんだと思うたら……なんだか嬉しくて」

「……さくら……」

「大丈夫よ、一人で言えるから」

「さくら、なにがあった……話しておくれよ」

「あのね……」

懇願する阿に、さくらは口を開く。

騒めきが、一瞬おさまった。

すつぐと立ちあがつたさくらは、嬉しそうに……でも少し悲しみも混ぜた笑顔で真実を告げたのだった。

「聞いて、あたしね……朔の子供ができました。きっと、だから变成が起きて、人間の身体が剥がれたんだと思うの」

「……なんてこと…… どんなに苦しかつたろう、お前、そんな、なんて痛いことを」

弓阿は、ひととさくらを抱き締めて涙ぐむ。

「人間を棄てたのだろ？ なんて無茶をしたんだ。死んでいたかも知れないんだぞ？」

「こうするしか、なかつたの……じゃないと、あたしも……お腹の子も助からなかつたわ。人間の身体を棄てたのは、もつ後悔していないわ」

「本当にお前とこう子は……無茶ばっかりだよ。心配する者の身に

もなつてくれ、命がいくつあっても足りいやしない」

「弓阿さん……」

「今宵は宴だ！ やくらの寿を祝つての無礼講じやあ……！」

涙を拭つて微笑むと、彼女は城を搖るがすほどの大音声で言つた。

そして、おちる（後書き）

いつも、維月です。

ついに（やつとへ）、朔とそへうらがくつきます。
このまま平和にことが進めばいいのですが…現実はそへ甘へはない
のです。ラストあと少し…♪期待くださいませ

烈火（前書き）

その、肚の底から響くような絶叫を聞いて
寒を催した。
『モノノケ』と化した蘭渓：
彼が、さくらを求めて兎族の里に向かつてきた！？

烈火

毒霧の霞む谷底

硫黄谷。

蘭渓は、血反吐を吐いてもがいていた。

その脇で、使令を果たした戻の式神が霧散する。

彼の血まみれの身体は、目を除いて全てが闇に覆われようとしていた。

闇は、全て彼がその身に溜めた恨みや憎しみ・妄執・そして呪いが形を変えたものだ。

闇は黒く棘々（おどりおどり）しい蛇体を模し、牙を剥いては彼を塗りつぶしていく。

「あ…つい、熱いいつ…？ やめり……っ、ぐあっ、やめろ
」

最期の絶叫は咆哮となり、ビリビリと天地を軋ませる。余地なく食い尽くした闇は、彼を『モノノケ』にえたのだった。

「いま、なにか聞こえた？！」

夜明けのつす青い部屋の中、さくらは跳ね起きた。

なにかの叫び声が聞こえたのは、『氣のせいだらうか？

さくらは、その肚の底から響くような絶叫に、ひどく禍々しいものを感じて背を凍らせる。

なにかが、とてもイヤなものが来る…。

そんな気がして、さくらは弓阿を呼びに走つていった。

一方、見張り台にいた弓阿も、動搖の異変を感じて考えこんでいた。
まだ遠方だが、微かな異臭がする。
これは死臭だらうか。

ひどく焦げた匂いと、血の生臭さ。

「卯阿さん！ なにか変な匂いがしませんか？！ それに、声みた

いなのを聞いて。不安だから知らせに来たんだけど」

「さくら、呼べば下に降りたのだぞ？ こんな所に登つてきて危ない。お主も分かるか、大気が濁つとるんだ… 姫はここで様子を見る、お主は皆に知らせてきてくれ」

「はい！」

見張り台を降りたさくらは、座敷で伸びて居る朔を起しに向かつた。

パン…と勢いよく、障子戸を開け放つ。

「朔ちゃん！ 起きなさいっ、おーきーーーー！」

伸びて居る朔を、さくらはガクガクと揺らす。

「んああ、なあんだよさくら…まだ朝だろー？」

「まだじやなくて、もうなのっー 大変なんだから、早く起きて頂戴！」

むにゅっと朔の頬を伸ばして、さくらは膨れ顔。

「分かつた、分かつたから……つたく、奈与起きる、さくらが呼んでんぞっ」

朔は、渋々転寝をしていた奈与を叩き起しした。

「なにっ！？ なにがあつたのかつ」

（フン、コイツはこんなモンだろ…）

奈与の場合、さくらの名さえチラつかせれば起きるのだ。警え、どこにこよつと駆けつけるだろつ。

「いや、それが俺もさくらに叩き起しだれてな。なんか異変がどうとか…つてもういねえし…」

朔も、少しは見習つて欲しこと/orである。（最近急け気味）

刹霞は民を高台へと避難させ、兵で周囲を固める。

さくらと奈与が触れて廻ったお陰で、現状が鬼族全体に伝わったの

だつた。

「姫さま、いけません… 紫生が傍で護ります！ だからお戻りをつ
母同様に武装するさくらの周りを、紫生が泣きそうな顔で跳ね回る。
「あたしも闘うのよ、ただ護られるのは好きじやない。みんなと一緒に
一緒に闘うわ」

「紫生、もちろんお前も闘うんだ。兎族の男なら、しゃんとおし
「母上……はい。」この紫生、兎族のために闘いましょ！」
「我らも命を賭しましょ、御方の恩のために！！」

紫生の言葉を皮切りに、兎族の兵士全てが平伏した。

「町回れん、あれは… っ」

ぐぐりは、朔の鎧の胸元にしづく身を寄せる。

腐臭が、濃くなつた。

「分かつておる…… あれは蘭渓じや。ついに、憎しみに喰われたか
陽光に反射して、棘々（おどりおどり）しい漆黒の獣が唸りを轟か
せる。

触れている地表は悉く焼けただれ、死臭をまき散らした。

「二クイ…… ニンゲンガ、ニクイ！ ロロス…… ロロシテヤル
！？」

憎悪に凍つた青い瞳が、さくらを見つけて真円に裂ける。

勢いを付けるために身を撓ませてから、唸りをあげて走り出した。

「来たよ、こっちへ来る！？」

「あんな化け物、どうするんだ！」

木々をへし折つて猛進する憎悪の塊に、民は震え上がる。
短く空気を裂く破裂音、それに続いて重く砲撃音が轟いた。
戦陣の兵が闘つているのだ。

黒い獣はあつという間に業火に覆い隠され、もがいては牙を剥ぐ。
だがすぐに大きな身震いで焰を振り払い、獣の咆哮は天地をひどく
拉がせた。

「さへり、お前はここで民の守りを頼む！」

「弓阿さん…？ ダメよつ、刀じや『あれ』は斬れない」

愛馬の背に跨つた弓阿に、さへりは慌てて縋りつく。

「行かせておくれ……愚弟を止めるのは、どうか妾に」

「弓阿さん… 一人じゃ行かせられません。行くといつのなり、あ

たしを連れて行つてください」

彼女の傍で、朔と奈与も頷いた。

「しかし、お主は言つなれば生まれたばかりの赤子に等しいのじゃ
それに騎獸はどうする…？」

「それなら大事ない、奈与がいるではないか」

言いかけた弓阿を、刹靄が遮る。

「俺も行くぞ、コイツ一人にや任せらんねえからな」

朔につつかれ、奈与は膨れ面。

「いや、お前はここに残れ」

掴み合つて喧嘩を始めた二人のうちの、朔の方を弓阿がつまみ上げた。

「なつ、なんで俺がッ…」

「お前たちが喧嘩してどうするんじや、収まるものも収まらぬわい
ベーッと舌を出す奈与に、朔は地団駄を踏む。

「それじゃあ奈与…お願ひにね」

兎型に転変した奈与を抱き締めて、さへりは青い瞳を細めた。

「ああもう、仕方のない……妾の負けじや。各方、出陣が決まつたからには、うかうかしてられねど…」

ぐるりと見回してから、弓阿はクシシャリとひくひくの髪を撫でる。

「弓阿さん… あたしも鬪います、護られるだけはイヤだから

「昔と変わらんな、お主は」

「ええ」

「……隨分と楽しそうじやねーか」

突如割り込んだ黒鋼の声に、一同は背後をふり返った。

「黒鋼！？ どうしてここに、帰つたんじゃ…」

ぴょん、と飛び出してきたわくらを、黒鋼は嬉しげに軽々と抱きあげて笑う。

「すげえコトになつてんな、兎共がドンパチ始めやがつたつて… 今その話で持ちきりだぜ？」

「それどこじやないの、あれ見てよ…」

もがもがと暴れて、わくらは迫りつつある黒い獸を指さした。

「ああ、アイツだな。青毛のクソ野郎：ついにモノノケになつたか」「笑い事じやないの一つ、今から鬪いに行くんだからつ」

子兎よろしく暴れるわくらを地面に降ろすと、黒鋼はスタスターと弓阿の傍に歩いていく。

「アンタが将だな？ 頼みがあるんだが、いいか」

「人狼の小僧、わくらを救つたのはお主だつたな。なんだ、頼みとは」

ニヤリと笑つた弓阿に、朔たち一同は冷や汗を禁じ得ずに、その場に凍つた。

「俺を、軍に加えちや もらえねえだらつか？」

「黒鋼？」

不思議そうな顔のわくらに、彼は不敵に笑う。

「奥の手は俺にくれ。こんなコト、滅多にねえぞ」

「まあ、よからず…兵は多いに越したことはないからな。どうじや、わくら…お主も異存なかろ？」

弓阿は騎乗したまま、愛馬である銀の巨狼に問う。

「主様がよいと思えば、わくらも同じこと」

凛とした女の声で、わくらは『是』と応えた。

その時、黒鋼が彼女を食い入るように見ていたことは、誰も気づいていないようだった。

「お主、名は？」

「黒鋼」

「そつか…行くぞ、黒鋼」

即阿は黒鋼を軍に加え、戦地へと陣を進めたのだった。

「 聲が、聞こえる」

疾駆する奈刀の背中で、せくせくぽよぽよつと呟いた。

烈火（後書き）

こんばんわ、維月です。

『Rabbit』ばにつく

35話のお届けにあがりました。

モノノケと化した蘭渓は、

さくらを求めて兔族の里へ猛進中

……。

かすかなる聲（前書き）

やくへりは、助けを求める蘭渓の声を聴いた。
そして、『彼女』は動き始める…？

かすかなる聲

「クイ…ドウシテ、ナゼカノジョハ、アーフランダンダ！」

さくらは戦慄した。

彼の声が流れ込んできて、灼けるような悪寒を催させるのだ。

「やつぱり、氣のせいじゃない」

「さくら？ どうしたんだ…顔が青いぞ？」

急停止した奈与に、朔も慌てて足を止めた。

「どうした！？」

即阿に止められたが、無理を承知で付いてきたのである。

クルシイ…カナシイ、カナシイ…クルシイ、ダレカ…タ
スケテクレ！

「こえ聲がするのよ、おそらく…蘭渓の」

「なにつ！？」

朔は血が滲むほど強く、唇を噛みしめる。

(あの男は、モノノケになつてまでさくらを苦しめるのか…?)

「なんて言つてる！ 忘れてしまえ、そんなもの！」

「ダメ…聲が止まない。助けて欲しがつてる…とめてくれつて」

「奈与つ、即阿に伝えろ！ 早く行つてこいつ」

「分かつた！！」

額を抑えて俯くさくらを抱き締めて、朔は奈与を急がせた。

「彼…とても苦しんだんだわ。闇の底で、凍えて泣いている。彼に武器は効かないから、斬つてはダメと伝えて……でないと、みんな死んでしまう。早く！」

ぜいぜいと蒼白な顔で言つ彼女に、朔は引っかかりを憶える。

彼女は、そんなもの言いをしたりはしない。

それに、気配が被つて いや、重なっている。

「わ、分かつた！ お前はそこにいる！」

朔は、口論している奈引と弓阿の仲裁に入ると、さくらの『お世子』を伝えた。

「とにかく喧嘩してる時じゃない、弓阿… 今すぐ兵を止めてくれ！

あれに武器は効かないし、でないとみんな死んじまうんだ！」

「バカを言つたな！ いま兵を止めた方が危険なことが分からぬかっ

ゆうりと、さくらが立ちあがる。

彼女の全身を銀色の光輪が覆い、細い毛先を揺らめかせていた。

「あれは……私が止めます。私でなければ、止められない」

その声を背後に聞いて、弓阿は目を張った。

さくらから、およそ尋常ではない靈気が発せられていたからだ。

「お主、さくらではないな……あの『さくら』か！？」

「そうよ。ずっとこの子の中で、時を待っていました… 私をあの者の傍へ連れて行きなさい」

「母…上なのか？ 本当に」

よろめいて、奈引はさくらの前に立たなくなる。

「奈引……」めんなさいね。すべて私が始まり、だから、幕は私が引くわ」

涙ぐむ彼女を無言で背負つと、奈引は滑るように兎型に転変した。

「俺が連れて行く、叔母上たちは高台で待っていてください」

「待ちな」

背を向けた彼に、黒鋼が唸る。

「なにを……一度は言わぬぞ、去れ」

「だーから、お前一人じゃ危なつかしいんだよ。俺はお前よりも強えし、足も速い」

「なにが言いたい！」

ぐるると牙を剥く奈引に、黒鋼はそれ以上言わずに、狼に変化する。

「なにしてる、行くんだろ？ 行け！」

「わ、分かつてる！」

黒鋼の吼えに後押しされ、奈引はよつやく走り出した。

「弓阿……やくらが

駆け去つた一人を見送つた後、朔は複雑な思いで隣の弓阿を振り向く。

「さくらの遺志に、任せんじや… 我らは高台へ行こ。民が、待つていい」

弓阿の先導に、兵は従順に移動を始めた。

戦陣の兵等は、たじろいでいた。

それは、突如血反吐を噴いて崩落した獸のせいだ。

「どうしたんだ… 動きが止まつたぞ…」

「よく分からんが、油断はできん… 気をつけろ」

そんなような会話がヒソヒソと交わされる中、闇のそこで、蘭渓は声を聽いていた。

（サムイ…… オレハ、モウモドレナイヨウダナ。アノクロー、モドリタイ）

分厚い壁を隔てているような幽かな声だが、彼にとつてそれは、それでも温もりを与える。

そんなような気がして、闇底の彼の頬を涙が伝つた。

戻れたらいいのに。

あの暖かかった、豊かな時代に。

誰よりも愛していた彼女の、生きていた時代に。

こんなにも望んでいるのに、声が出ないんだ。

彼女の、生まれ変わりを見つけたの……。

優しくしてやあつと、今度こそ優しくしてやあつと思つたの……。

また、彼女を深く傷つけた。

もう戻れないのか……。

昔の自分にも、昔の鬼族にも。

ならばいっそ……もつ。

ならばもう、いっそ殺してくれ。

と、兵が騒めき始め、そこに墮ちていた蘭渓 いや、獸は
ゆっくりとその巨体を起こした。

細かに鋭く、風を裂く音が閑地に響く。

上空から、しなやかに奈与が獸の傍に降りたつた。

「ありがとう奈与、ここでいいわ……下がつていて?」

さくらは彼の背を降りると、蹲る獸に惜しげもなく歩み寄る。

なぜか獸も抵抗せずに、彼女の接触を受け入れた。

「私が分かる? 蘭渓。こんな姿になつてしまつて、私があなたを傷つけてしまつたのよね。最期まで、あなたの気持ちに応えられなかつた私を許してね」

さくらは、やんわりと闇色の獸を抱き締める。

「フレコン……スマナイ

低くくぐもつた声がして、獸はさくらに頬寄せた。

「『みんなさいね、本当に……でももう今度こそ、一緒にいられるわ
?』

「サク、ラ

彼女の腕の中で、獣は輪郭をなくしたようだつた。
彼を取り巻いていた闇が、浄化されたのだ。

闇が消えた後、そこにあつたのは……傷つき、瘦せさらばえた一匹の青兎だった。

「今度こそ、絶対に一緒よ？ もう、行きましょうね……どこへでも行けるから」

虚ろだつた蘭渓の瞳の色が、悄然と褪せていく。

彼女が撫でると彼は幸せそうに、鼻先を小さく動かした。

「せめて、道案内ぐらこさせて頂戴ね？ ね？」蘭渓

さくらの身体が、ゆっくりと頽れる。

「さくらー？」

彼女が地面に触れる寸での所を、駆けつけた奈引が慌てて受け止めた。

「……奈引」

起きあがつたさくらは涙を拭つて、腕の中の蘭渓を見せた。

骨張つた、小さな体。

蘭渓は、息を引き取つていた。

「彼がね、最期に謝つてくれたわ……本当に、済まなかつた。ありがとうつて」

言いながらさくらは嗚咽が止まらずに、奈引の胸元にしき付いて、大声で泣いた。

「兎族の因縁も、これで終わつた。帰るつ？ さくら

「うん……」

これで本当に、兎族の因縁は幕を閉じた。

後日、蘭溪の亡骸は刹靈の妻・せくりの墓の傍に葬られたことになつたようだ。

かすかなる聲（後書き）

どうも、維月です。

『Rabbit』ばにつく』次話で最終回です。

さくらではない、『さくら』が蘭渓を連れて行きます。

蘭渓：可哀相な奴ですが、眞の悪人ではなかつたんですね。

未来へ…（前書き）

朔とさくらが棠国へ戻つて、3年が経つていた。
糺余曲折の果てに幸せを手にした一人。

未来への架け橋。

世代が替わり、時代が変わつても、梁呂の乱を治めた、元は人間だ
つた勇敢な少女の話は、後々まで語り継がれていった。

未来へ…

それからと朝が棠国へ戻つて、3年が経つた。
そして…。

「パパちゃん、あつかんべ～」

「くあら、また脱走する氣かおのれは」
がし、と背を押さえられ、子供は無惨にも地面に押しつけられるこ
とになる。

「うっ、やあ～つ

「つたく、紐でも付けときたいぜ」

脱走した息子を抱きあげて、朝は溜息した。

「もう逃げないか？」

「やら」

また溜息。

現在、母親であるせくらが留守なので朝が子守り中なのである。
(はあ～……ガキの世話つて大変)

「おあーしゃんは？」

「んー？」

むに、と鼻をつままれて、朝は濁音氣味の声で応える。

「んあいのの、はにや…はにやせ」(買い物、鼻、離しやがれ)

「いないの？ ぼく、おあーしゃんさがすつ」

やつと離してくれた鼻をさすつて、朝は渋々彼の物見行に同行する
ことにした。

話題は戻るが、朝とせくらの間には一人息子・奏かなでが生まれていた。
3つにしてはやんちゃ坊主で、利発な彼に親となつた二人は毎日が
てんてこ舞い。

「おあーしゃーん？」

てここへ歩いていつては、木の虚に頭をつつこんだり。

枯れ葉の裏を返して呼びかけてみるが、結局見つからずに、機嫌を損ね始める奏。

「あえ、おとーしゃん？」

朔はとくに、切り株に腰掛け、飽きてしまったのかポケ…と空なんかを見ている。

当然、奏のことは忘れていた。

「おとーしゃん、いない…」

(やつぱガキだな〜、気づいてねえし)

しじげた奏は、ぼしゅんと柔毛の黒い子兎になり、耳を毛繕いする。

「おとーしゃん、ぼく、きらいなの？」

枯れ葉を銜えて、じろじろと砂の上を転がるしげさが可愛すぎで、出るに出られない、バカ親な朔が物陰にいた。

(我が息子ながら、可愛い。ま、俺には劣るけど)

「朔ちゃん？ なーにしてんのかな？」

「子守りです… つてさくら！？ つーか早つ、もう買ひ物済んだのか？」

うだうだと物陰で悶えていた朔は、さくらの冷たい一瞥に跳ね上がつてしまつた。

「あたりまえでしょー？ 本当は奏も連れていきたかったんだけど、まだ人混みになれないし。早く戻つてこないと、朔ちゃん見習つて悪い口になつちやう」

「点検、俺の嫌いな人参が入つてないか」

そもそもと買い物袋を漁り始めた朔の足を、さくらは踏みつけた。

「漁らないの、行儀悪いわね… 悪い口つ

「ひ、ひでえな、さくら…俺そんなに悪い子じゃないだろ？ 夜以外は」

「へんなこと言わないの！ 教育に悪いでしょ。文句言つてないで、これ持つていってね？ あたしは奏抱つこするから」

「あ？？」

きょとんと首を傾げる奏。

幼いのが幸いで、会話の内容が理解できていない。

「へいへい（さくらり、奏が生まれてから変わったな…俺、悲しい）」
朔は苦笑して荷物を両手に持つと、玄関へ向かつていった。

「おあーしゃん（お母さん）」

もにもにと両手を伸ばして、奏はさくらの足に抱きついて笑う。

「あら？ 泥んこじゃない、奏え。おフロ入らなきや」

「やらよー、おフロやらー」

に一つと笑うやんちゃ息子に、昔見た朔の満面の笑みが重なって、
さくらは思わず溜息した。

（ほーんとそつくり、瓜一つなんだから）

ねえ、琥珀。

きつと、アンタが引き合わせてくれたんだよね。

色んなことがあつたよ、色んな人に出会つて別れたよ。
結局、あたしは人間を棄ててしまつたけど。

人間でいたら、こんな道は絶対歩かなかつたと思つ。
始まりは徳島。

そして、あの場所から始まつた。

出逢いと別離の果てに、あたしはかけがえのないものを見つけたの。
大切な人の傍で、『生きる』と言つこと。

Rabbitはつべ、もう本当に毎日がパニック状態。

琥珀、それにお父さん、お母さん。
あたし、ここで生きてるよ。

約束、まもつたからね。

「おあーしゃん、かえろ?」

「あ、うん。お父さんも待ってるし、帰るつか?」

「うん!」

そくは石青の空を見あげて深呼吸し、ひとしきりの風に身を任せた。

未来へ…（後書き）

『Rabbit』はついに最終章です。

紆余曲折の果てに幸せを手に入れたさくらと朔。

ここまで読んでくださった読者様方、本当にありがとうございました。

本作について質問などございましたら、何なつとも申しつなぐくださいませ。

それでは。

2006・4・26 維月十夜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2469a/>

Rabbitぱにっく

2010年10月28日03時42分発行